

内閣府青年国際交流事業報告書2024

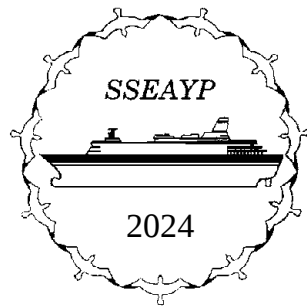
令和6年度 第48回
「東南アジア青年の船」事業



内閣府

内閣府青年国際交流事業報告書2024

令和6年度 第48回
「東南アジア青年の船」事業



内閣府青年国際交流事業報告書2024

令和6年度 第48回「東南アジア青年の船」事業

CONTENTS

カラーグラビア	3	6. ホーチミン市人民委員長表敬訪問	63
		7. 船内公開・出航式	63
第1章 事業の概要		第6章 インドネシアにおける活動	
1. 趣旨	20	1. 活動日程	66
2. 日程	20	2. 共同記者会見・歓迎式典	67
3. 構成	21	3. 青年スポーツ省副大臣表敬訪問	67
4. 経費及び使用船	21	4. 歓迎夕食会	68
		5. ASEAN事務局への表敬訪問	68
第2章 事業の企画から実施まで		6. 課題別視察	69
1. 各国政府代表者連絡会議①	24	7. 船内公開・出航式	70
2. 東ティモール当局との打ち合わせ	25		
3. 内閣府による事前調査 (ベトナム・インドネシア)	25	第7章 ディスカッション活動	
4. 日本参加青年の選考	26	1. ディスカッション活動の概要	72
5. 各国政府代表者連絡会議② (オンライン)	26	2. ディスカッション活動・各グループのレポート	74
6. ファシリテーター会議(オンライン)	27		
7. ナショナル・リーダー会議(オンライン)	28	第8章 事後活動セッション	
8. 日本国内活動に関する準備	28	1. 事後活動セッションの概要	104
9. 事業関係資料の作成	29	2. サマリーフォーラム(事後活動案)	105
10. 日本参加青年の事前研修及び出航前研修	29		
11. オンラインプレ会議	31	第9章 日本国内活動2	
第3章 日本国内活動1		1. 日本国内活動(東京プログラム②)日程	112
1. 日本国内活動(東京プログラム①)日程	34	2. 日本国内活動(地方プログラム)日程	114
2. 参集式	35	3. 石破茂内閣総理大臣表敬訪問	119
3. 課題別視察	35	4. 佳子内親王殿下御引見	119
4. 船内公開・出航式	36	5. 解散式	119
第4章 運航(船内活動)		6. 解散交歓会	119
1. 運航日程・航路図	38	7. 帰国	120
2. 船内組織	40	8. 各国政府代表者連絡会議③	120
3. 船内運営委員会(COC)	46	9. 日本参加青年の帰国後研修	120
4. 船内活動	46		
5. 下船	58	第10章 本事業に対する評価等	
第5章 ベトナムにおける活動		1. 管理官報告	122
1. 活動日程	60	2. 船長評価	123
2. 歓迎式典	61	3. 参加者による事業評価	125
3. 献花式・歓迎夕食会	61		
4. 課題別視察	62	関係資料	
5. ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市 常任委員会書記主催夕食会	63	1. 参加者名簿	134
		2. 参加青年の構成等	150
		3. SSEAYPインターナショナルの概要	151
		4. 「東南アジア青年の船」事業実績	153
		5. にっぽん丸船内配置図	158

令和6年度 第48回「東南アジア青年の船」事業

佳子内親王殿下御引見



各国ナショナル・リーダー、ユース・リーダー、アシスタント・ユース・リーダー（12月10日）

石破茂内閣総理大臣表敬訪問

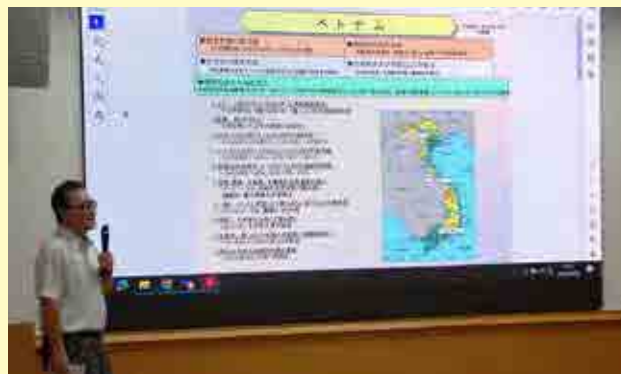


各国ナショナル・リーダー、ユース・リーダー、アシスタント・ユース・リーダー（12月4日）

事前研修



在京ベトナム大使館訪問（8月2日）



河上淳一元在ホーチミン日本国総領事によるベトナム情勢及び日・ベトナム関係の講義（8月5日）



在京インドネシア大使館訪問（8月6日）



日本ナショナル・リーダー及び日本参加青年（8月6日）

オンラインプレ会議（10月20日）



藤森俊輔参事官による挨拶



NLセッションの冒頭説明



NLセッションにて各国や参加青年を紹介



ディスカッション・グループの顔合わせ（DG1ソフト・パワーと青年の民間外交グループ）

日本国内活動 1

参集式 (11月5日)



集合写真 (全参加者)

課題別視察 (11月6日)



国会議事堂を訪問 (DG1ソフト・パワーと青年の民間外交グループ)



東京証券取引所を訪問 (DG2経済成長と持続可能な社会グループ)



東京都環境公社の産業廃棄物の活用事例を視察
(DG3地球環境と気候変動グループ)



首都圏外郭放水路内を見学 (DG4防災と復興グループ)



心の健康にもつながる盆踊りを体験
(DG5健康とウェルビーインググループ)



NEC Future Creation Hubを訪問し、社会とビジネスのイノベーションについて説明を受ける (DG6デジタル社会グループ)

出航式 (11月7日)



三原じゅん子内閣府特命担当大臣による挨拶



三原じゅん子内閣府特命担当大臣と各国ナショナル・リーダー

ベトナムにおける活動



ホーチミン共産青年同盟中央委員会から盛大な歓迎を受ける
(11月14日)



ホーチミン大統領記念像への献花式での集合写真 (11月14日)



ホーチミン大統領記念像への献花 (11月14日)



統一会堂にて説明を聴く (11月14日)



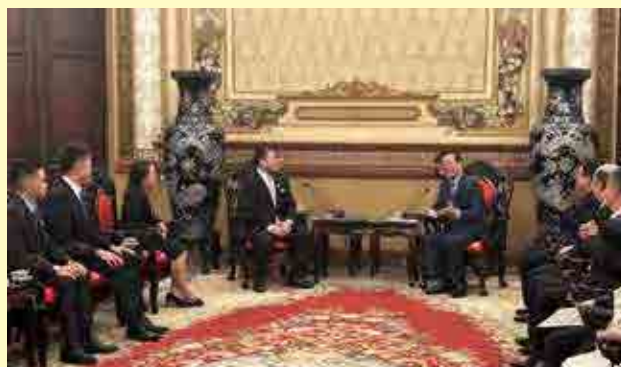
歓迎夕食会で乾杯 (11月14日)



トンデックタン大学にて、学生と意見交換 (DG3地球環境と気候変動グループ) (11月15日)



ホーチミン市医科薬科大学を訪問し、人体解剖学研究所で説明を聴く (DG5健康とウェルビーインググループ) (11月15日)



Mr. Phan Van Maiホーチミン市人民委員長表敬訪問 (11月16日)

インドネシアにおける活動



到着歓迎式にて、ラオス・ユース・リーダーによる挨拶



表敬訪問にて、Mr. Taufik Hidayat青年スポーツ省副大臣による挨拶 (11月21日)



インドネシア銀行を訪問 (DG1ソフト・パワーと青年の民間外交グループ) (11月22日)



インドネシア環境フォーラム (WALHI) を訪問 (DG3地球環境と気候変動グループ) (11月22日)



ASEAN防災人道支援調整センター（AHAセンター）を訪問（DG4防災と復興グループ）（11月22日）



ASEAN事務局での集合写真（11月22日）



ホストファミリーと対面（11月23日）



出航式にて、Mr. Ario Bimo Nandito Ariotedjo 青年スポーツ大臣による挨拶（11月25日）

船上プログラム

ディスカッション活動



課題別視察での学びを共有
（DG1ソフト・パワーと青年の民間外交グループ）



ビジネスモデルについて意見交換
（DG2経済成長と持続可能な社会グループ）



ディスカッション開始前のグランドルールの共有
（DG3地球環境と気候変動グループ）



国ごとに話し合った内容を発表
（DG4防災と復興グループ）



ウェルビーイングに関する各国の相違点について意見交換
(DG5健康とウェルビーインググループ)



グループで話し合った内容を発表
(DG6デジタル社会グループ)



成果発表 (DG3地球環境と気候変動グループ)



成果発表 (DG4防災と復興グループ)



成果発表に聴き入る参加青年



発表内容に関する質問をする参加青年

管理官講話



藤森俊輔管理官による参加青年への講話 (11月9日)

船長講話



内田浩一船長による参加青年への講話 (11月9日)

国旗掲揚式



ベトナムによる国旗掲揚式 (11月14日)



インドネシアによる国旗掲揚式 (11月21日)

SG活動



ゲーム前のウォーミングアップ (11月12日)



SG対抗スポーツ大会 (11月20日)

ピア・ラーニング・セミナー



[S12] シンガポールのアイデンティティを説明



[S22] 日本の「道」(茶道、華道、弓道、剣道)の精神を紹介

自主活動



ブルネイの伝統ダンスクラス



ラオスのチャンパービン作り

ナショナル・プレゼンテーション



ブルネイ



カンボジア



インドネシア



日本



ラオス



マレーシア



フィリピン



シンガポール



タイ



ベトナム

サマリーフォーラム（12月5日）



若者に異文化と触れる機会を増やすMini SSEAYPというプロジェクトを発表する日本参加青年



文化の保存・促進と、インフラ設備の改修を目的とした「チュラサ・コア」プロジェクトを説明するカンボジア参加青年



発表内容に対して積極的に質問をする参加青年



Ms. Socheath Sroyカンボジア教育青年スポーツ省青年局長による挨拶

日本国内活動2

地方プログラム（12月6日～9日）

奈良県



地元青年と共に東大寺を訪問（12月6日）



奈良公園を散策（12月6日）



歓迎レセプションで懇談する参加青年（12月6日）



ホストファミリーと奈良県の名所を訪問（12月7日）

高知県



五台山展望台にて見晴しを楽しむ(12月6日)



牧野植物園にて子どもガイドの説明に聞き入る参加青年(12月6日)



地元の方と共に高知よさこい情報交流館を訪問(12月8日)



地元青年と交流(12月8日)

熊本県



地元ガイドと共に水前寺成趣園を散策(12月6日)



地元青年と一緒に牛深ハイヤ踊りを踊る(12月8日)



地元青年と意見交換を楽しむ参加青年(12月8日)



ホストファミリーとの再会を約束(12月8日)

北九州市



茶道を体験する参加青年 (12月6日)



小倉城庭園を地元青年と散策 (12月6日)



ホームステイマッチングでホストファミリーと対面 (12月6日)



地元青年と一緒に竹あかり竹灯籠作り体験 (12月8日)

函館市



雪を楽しむ参加青年 (12月6日)



ホームステイマッチングでパフォーマンスを披露する参加青年 (12月7日)



ホームステイマッチングでの集合写真 (12月7日)



ホストファミリーとの再会を約束する参加青年 (12月9日)

解散式（12月10日）



由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）による挨拶



各国参加青年への修了証の授与（ブルネイ・ユース・リーダー）

解散交歓会（12月10日）



辻清人内閣府副大臣による挨拶



辻清人内閣府副大臣とオブザーバー参加の東ティモール・ナショナル・リーダーとの記念品交換



タイ・ユース・リーダーが参加青年を代表して挨拶



各国による3分間パフォーマンス（インドネシア）



集合写真（全参加者）

参加者の顔ぶれ



SG-A



SG-B



SG-C



SG-D



SG-E



SG-F



SG-G



SG-H



SG-I



SG-J



ナショナル・リーダー



ファシリテーター



事後活動組織代表者



管理部



にっぽん丸乗船員

第1章

事業の概要

1 趣 旨

「東南アジア青年の船」事業（SSEAYP）は、1974年（昭和49年）1月のインドネシア共和国、マレーシア、フィリピン共和国、シンガポール共和国及びタイ王国の各国と日本国との共同声明に基づいて始められた事業であり、これら東南アジア各国（これに1985年（昭和60年度）からはブルネイ・ダルサラーム国が、1996年（平成8年度）からはベトナム社会主義共和国が、1998年（平成10年度）からはラオス人民民主共和国及びミャンマー連邦共和国が、2000年（平成12年度）からはカンボジア王国がそれぞれ参加）の積極的な参加と協力の下に、日本国政府（内

閣府青年国際交流担当室）が実施している。

本事業は、日本及び東南アジア諸国連合の青年が、各種の交流活動を行うことにより、青年相互の友好と理解の促進、青年の国際的視野の拡大、国際協調精神の醸成及び国際協力における実践力の向上を図り、もって国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮することができる次世代リーダーを育成することを目的とする。

2024年（令和6年度）は、令和元年度以来初の海外航路での船の運航を復活するとともに、船上及び訪問国において各種の交流活動を実施する。

2 日 程

事項	日程
各国政府代表者連絡会議	2023年12月8日（金）
内閣府による事前調査	4月23日（火）～28日（日）〔インドネシア、ベトナム〕
日本参加青年選考試験	5月11日（土）、16日（木）及び18（土）
各国政府代表者連絡会議（オンライン）	6月25日（火）
地方プログラム受入県市担当者等会議	7月10日（水）及び9月25日（水）
日本参加青年事前研修	8月2日（金）～6日（火）
ファシリテーター会議（オンライン）	8月20日（火）及び9月10日（火）
ナショナル・リーダー会議（オンライン）	9月3日（火）及び10月4日（金）
オンラインプレ会議	10月20日（日）
日本参加青年出航前研修	11月1日（金）～3日（日）
東京プログラム	11月4日（月）～6日（水）
運航（出航から下船まで）	11月7日（木）～12月6日（金）
各国政府代表者連絡会議	12月5日（木）
東京・地方プログラム	12月6日（金）～12月10日（火）
日本参加青年帰国後研修	12月11日（水）～12日（木）

3 構成

第48回「東南アジア青年の船」事業の構成員は次のとおりである。

(1) 管理部

- ① 管理官（1名）は、本事業の実施に関し内閣府を代表し、その運営を統括する。
- ② 副管理官（1名）は、管理官を補佐し、管理官に事故があるときは、その職務を代理する。
- ③ 主任（1名）は、副管理官を補佐し、副管理官に事故があるときは、その職務を代理する。
- ④ 管理部員（29名）は、管理官の命を受けて本事業に係る事務を処理する。
- ⑤ ファシリテーター（6名）は、管理官の命を受けて、本事業に係る事務のうちディスカッション活動に関するものを処理する。

(2) ナショナル・リーダー（NL）

各国政府は、各国1名のナショナル・リーダー（NL）を選任する。NLは、自国の参加青年（PY）を統率し、必要に応じ指導及び助言を行う。また、船内運営委員会（COC）の構成員として、管理官の助言、指導の下に、船内活動日程、船内生活規律等について協議、決定する。

(3) 参加青年（PY）

PYは、次の資格要件を備える応募者の中から、各国政府が選考する。

- ① 2024年の各国政府の定める日現在において、年齢が満18歳から30歳までの者
- ② 心身ともに健康な者
- ③ 日本国内活動、船内活動及び訪問国活動の全日程に参加することができる者
- ④ 船内及び訪問国における活動を円滑に行うことができる英語力を有する者
- ⑤ 協調性に富み、事業の計画に沿って規律ある団体生活ができる者
- ⑥ 参加国に対する関心及び理解がある者

PYの中から、PYの代表となるユース・リーダー（YL）及びアシスタント・ユース・リーダー（AYL）を、各国1名ずつ選任する。

YLは、自国のPYの活動について連絡及び調整の任に当たり、AYLはYLを補佐する。YLとAYLは別の性でなくてはならない。

4 経費及び使用船

(1) 経費

第48回「東南アジア青年の船」事業の実施に当たり、内閣府は、船の運航に要する経費のほか、次の経費を負担した。

- ① 東南アジア各国のNL及びPYが本事業に参加するための、当該国首都の国際空港と羽田空港又は成田空港の間のエコノミー・クラスの往復の航空料金
- ② 日本国外在住のファシリテーターが本事業に参加するための、在住国の国際空港から羽田空港又は成田空港までのエコノミー・クラスの往復の航空料金
- ③ インドネシア事後活動組織代表者を除く各国事後活動組織代表者が事業に参加するための、各国内における最寄りの国際空港からジャカルタまでのエコノミー・クラスの片道航空料金、及び日本事後活動組織代表者を除く各代表者の帰国のための、東京から各国内最寄りの国際空港までのエコノミー・クラスの片道航空料金
- ④ NL、PY（日本を除く）、ファシリテーター、各国事後活動組織代表者及び各国政府代表者の本事業期間中

の疾病、事故等に対する保険料

- ⑤ NL、PY、ファシリテーター、各国事後活動組織代表者及び各国政府代表者の船内において定められた時に支給される飲食物の費用
- ⑥ 寄港地ごとに開催される「船上既参加青年の集い」のレセプションの飲食に係る費用
- ⑦ 各国政府代表者が事業に参加するための、各国内における最寄りの国際空港と羽田空港又は成田空港との間のエコノミー・クラスの往復の航空料金
- ⑧ 日本国内における、定められた日程に基づく見学等に要する交通費、入場料、宿泊費及び食費

東南アジア各国政府は、自国におけるPYの募集、選考及び事前研修の費用、「東南アジア青年の船」事業の自国訪問中に行われた諸行事、諸活動に要した経費を負担した。

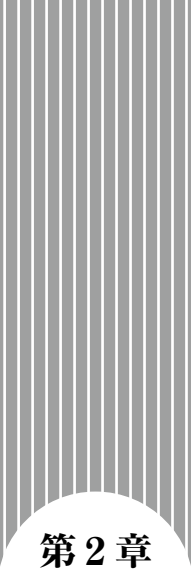
(2) 使用船

第48回「東南アジア青年の船」事業では、商船三井クルーズ株式会社所属の「にっぽん丸」を使用し、その運航

についても同社に委託した。

「にっぽん丸」は全長166.6メートル、総トン数22,472トンの外航客船で、キャビン193室、ホール、ラウンジ、シアター、プール、医務室、洗濯室、食堂、大浴場などを備えている。



A decorative graphic consisting of a series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect. At the base of these lines, a white semi-circle is positioned, which serves as a background for the chapter title.

第2章

事業の企画から実施まで

各国政府代表者を東京に招へいし、第47回「東南アジア青年の船」事業の終盤の2023年12月8日に、第48回「東南アジア青年の船」事業の方針について協議を行った。

(1) 議題

第48回事業計画について

- a. 事業日程
- b. 参加国・人数
- c. 今後のスケジュール
- d. その他

(2) 議事

まず、内閣府から第48回事業計画について説明を行い、質疑応答及び意見交換が行われた。

本会議における主な合意事項は次のとおりである。

- ① 第48回事業は、2024年11月～12月に、船上活動、日本国内活動及び訪問国活動（インドネシア及びベトナム）を行う。
- ② 参加国にミャンマーは含めない。東ティモールのオブザーバー参加（NL 1 名及びPY 2 名）を歓迎する。た

だし、事業実施時までの状況の変化により、参加国の変更の可能性もある。

- ③ PYの数は各国15名ずつとし、日本は20名、東ティモールは2名とする。
- ④ 第47回事業のPYは、公式プログラムとしての対面交流を体験しているため、将来の事業への参加資格を有さない。

(3) 会議出席者

この会議に出席した各国政府代表者は次のとおりである。このほか、参加各国事後活動組織代表者がオブザーバーとして同席した。



各国政府代表者連絡会議

ブルネイ	Ms. Hajah Noor Maslina binti Haji Sulaiman (文化青年スポーツ省青年スポーツ部青年担当チーフ)
カンボジア	Ms. Socheath Sroy (教育青年スポーツ省青年局長)
インドネシア	Mr. Khairil Adha (青年スポーツ省青年パートナーシップ担当総括補佐) Ms. Hasintya Saraswati (青年スポーツ大臣特別補佐官) Mr. Abdul Latif (青年スポーツ省広報・情報システム・改革推進課責任者)
ラオス	Ms. Keo Oudone Sengmanivong (ラオス人民革命青年同盟事務次官)
マレーシア	Ms. Wan Azira binti Abd Aziz (青年スポーツ省青年育成課国際担当係長)
フィリピン	Asec. Alexa Danielle C. Dayanghirang (国家青少年委員会SOMY担当リーダー)
シンガポール	Ms. Hasliza Binte Ahmad (全国青年評議会青年関与担当課長)
タイ	Mrs. Apinya Chompumas (社会開発・人間安全保障省子供青年局長) Ms. Chayatada Prapasathid (社会開発・人間安全保障省子供青年局社会開発専門官)

ベトナム	Ms. Le Hong Nhung (ベトナム国家青年委員会国際部副部長)
日本	藤森 俊輔 (内閣府青年国際交流担当室参事官) 越田 辰宏 (内閣府青年国際交流担当室参事官補佐) 武田 由香子 (内閣府青年国際交流担当室主査)

2 東ティモール当局との打ち合わせ

2023年12月8日の各国政府代表者連絡会議において、東ティモール民主共和国のオブザーバー参加が了承されたことを踏まえ、2024年1月10日から1月14日の間、藤森俊輔参事官及び越田辰宏参事官補佐が東ティモールを訪問した。東ティモール外務・協力省及び青年・スポーツ・芸術省に「東南アジア青年の船」事業のプログラム内容や選考手続などの詳細を説明し、本事業への参加意向を確認するとともに、関係者との連絡調整の体制を構築した。



3 内閣府による事前調査（ベトナム・インドネシア）

訪問国活動の準備状況などについて調査するため、事前調査を実施した。藤森俊輔参事官及び武田由香子主査は4月22日から4月28日までの7日間、インドネシア及びベトナムを訪問した。

事前調査では、各国政府から提出された訪問国活動計画書に基づいて、各国政府担当者と協議し、訪問国活動の細部について、検討、調整を行った。



内閣府によるインドネシア事前調査



内閣府によるベトナム事前調査

4 日本参加青年の選考

日本参加青年の募集は内閣府が行った。なお、応募資格は次のとおりである。

- (1) 日本の国籍を有すること。
- (2) 令和6年4月1日現在、18歳以上 30歳以下の者であること。
- (3) 健康で、長期の共同生活・航海に耐えることができること。
- (4) 協調性に富み、事業の計画に従って規律ある団体行動ができること。
- (5) 日本の社会、文化等について相当程度の知識を有すること。
- (6) 交流対象国に対して関心と理解があること。
- (7) 本事業における活動（ディスカッション等）を円滑に行うことができる英語力を有すること。
- (8) 事前研修、オンラインプレ会議、出航前研修、本体プログラム、帰国後研修及びオンライン事業報告会の全日程に参加できること。

- (9) 事業終了後もその経験をいかして社会貢献活動等を活発に行うことが期待できること。
- (10) 自らの負担でオンラインプレ会議等に必要な機材を準備できること。
- (11) 事業内において、内閣府及び本事業の支援業務を受注した業者が撮影した写真及び動画等について、内閣府及び関係団体の HP、SNS 及びその他広報に用いることに同意すること。
- (12) 新型コロナウイルス感染症やインフルエンザ等の感染症対策について、内閣府が求める必要な対応について協力できること。
- (13) 本事業を含め、過去に内閣府が主催する青年国際交流事業に参加したことがないこと。
※令和2年度から令和5年度までに内閣府が実施したオンライン交流事業に参加した者は、応募は可能。

内閣府は、応募者に対してWebテスト及び面接試験を実施し、20名を合格者とした。

5 各国政府代表者連絡会議②（オンライン）

第48回「東南アジア青年の船」事業の寄港地である日本、ベトナム、インドネシアにおけるプログラムの準備状況等について情報交換を行うため、2024年6月25日にオンラインにて各国政府代表者連絡会議を行った。

(1) 議題

第48回事業計画について

- a. 日本国内活動について
- b. 船上活動について
- c. ベトナム及びインドネシアの寄港地活動について
- d. 事後活動組織代表者の乗船について

(2) 議事

まず、内閣府から本事業の実施内容などについて説明を行い、それぞれ質疑応答が行われた。本会議における主な合意事項は次のとおりである。

1. 日本国内、船上、訪問国のプログラムの詳細
2. 事後活動組織代表者乗船の目的や選考の詳細
3. 6つのディスカッション・テーマ
4. 内閣府が事業実施に係る各種資料を作成するため、東南アジア各国政府は、参加者名簿などの提出期限を守る。
5. ファシリテーター会議を8月20日及び9月10日の2日間、ナショナル・リーダー会議を9月3日及び10月4日の2日間、それぞれオンラインで開催する。

(3) 会議出席者

この会議に出席した各国政府代表者は次のとおりである。このほか、参加各国事後活動組織代表者がオブザーバーとして同席した。

ブルネイ	Mr. Muhamad Amirul Syazmie bin Ibrahim (文化青年スポーツ省青年スポーツ部)
カンボジア	Mr. Mel Phanseyha (教育青年スポーツ省青年局長)
インドネシア	Ms. Hasintya Saraswati (青年スポーツ大臣特別補佐官)

ラオス	Mr. Thathsaphone Lerththavone (ラオス人民革命青年同盟国際関係協力局長)
マレーシア	Ms. Wan Azira binti Abd Aziz (青年スポーツ省青年育成課国際担当係長)
フィリピン	Atty. Reena Vivienne Chua Pineda (国家青少年委員会アシスタントセクレタリー、コミッショナー、 PYDPグローバルモビリティ委員会議長)
シンガポール	Mr. Izzat Rusydi Jufri (全国青年評議会国際担当課長補佐)
タイ	Mrs. Apinya Chompumas (社会開発・人間安全保障省子供青年局長)
ベトナム	Mr. Nguyen Huynh Dang Phuc (ベトナム国家青年委員会国際部)
東ティモール	Mr. David Tomas De Deus (青年スポーツ芸術文化省青年局長)
日本	藤森 俊輔 (内閣府青年国際交流担当室参事官) 赤司 智一 (内閣府青年国際交流担当室参事官補佐) 武田 由香子 (内閣府青年国際交流担当室主査) 畠野 恵 (内閣府青年国際交流担当室主査付)

6 ファシリテーター会議(オンライン)

第48回「東南アジア青年の船」事業におけるディスカッション活動の目的などについて、ファシリテーターに共通認識をもってもらうとともに、その運営方法等について協議、情報交換等を行うことにより、ディスカッション活動の円滑かつ効果的な実施に資するため、8月20日及び9月10日の2日間、第48回「東南アジア青年の船」事業ファシリテーター会議をオンラインにて開催した。この会議の議題は次のとおりである。

第1回ファシリテーター会議議題(8月20日)

- ① 第48回事業概要
- ② ディスカッション活動について
- ③ ファシリテーターの役割

- ④ ディスカッションプランについてファシリテーターからの発表及び質疑応答

第2回ファシリテーター会議議題(9月10日)

- ① ディスカッションプランについてファシリテーターからの発表及び質疑応答
- ② ビザと海外旅行保険について
- ③ 感染症対策
- ④ 課題別視察について
- ⑤ オンラインプレ会議について
- ⑥ 成果発表会及びその他プログラム関連事項に関する意見交換

7 ナショナル・リーダー会議(オンライン)

第48回「東南アジア青年の船」事業について、同事業の最高意思決定機関である船内運営委員会(COC)の構成員である参加各国ナショナル・リーダーが一堂に会し、本事業の目的、内容等について十分に理解を深めるとともに、船内活動の基本的事項等について協議を行い、本事業の効果的かつ円滑な実施に資することを目的として、9月3日及び10月4日の2日間、第48回「東南アジア青年の船」事業ナショナル・リーダー会議をオンラインにて開催した。また、ナショナル・リーダー会議に引き続いて、COCの運営方法等について協議するため、COC会議を開催した。この会議の議題は次のとおりである。

第1回ナショナル・リーダー会議(9月3日)

- ① NL間のコミュニケーション方法
- ② 10月20日オンラインプレ会議におけるNL主導のセミナーワークショップについて
- ③ 委員会の割当てについて
- ④ スピーチ割当てについて
- ⑤ 課題別視察の割当てについて
- ⑥ 祈祷室の管理について

- ⑦ 集団生活のためのガイドライン、ルールについて
- ⑧ 消灯時間後の夜間パトロールの実施方法について
- ⑨ 次回会議スケジュール(10月4日)

第1回COC会議(9月3日)

- ① ナショナル・リーダー間のディスカッション

第2回ナショナル・リーダー会議(10月4日)

- ① 挨拶
- ② スピーチ割当て等について
- ③ プログラム期間中の会場予約に関する注意事項等について
- ④ ハラスメント対策を含む安全管理について
- ⑤ 船内郵便局長からのお知らせ
- ⑥ 海外旅行保険について
- ⑦ フィードバック
- ⑧ 閉会

第2回COC会議(10月4日)

- ① ナショナル・リーダー間のディスカッション

8 日本国内活動に関する準備

本事業の日本国内活動は、東京都内及び近郊におけるプログラムと、5県市を訪問する地方プログラム(ホームステイを含む)から成っている。

(1) 東京都内及び近郊におけるプログラム

①課題別視察(ディスカッション活動)

船内におけるディスカッション活動のディスカッション・テーマ別に、1. ソフト・パワーと青年の民間外交、2. 経済成長と持続可能な社会、3. 地球環境と気候変動、4. 防災と復興、5. 健康とウェルビーイング、6. デジタル社会、の6分野における視察コースを設定し、視察を通じて日本における各テーマの現状などを知るための内容を企画し、準備を進めた。

②式典等

参集式、表敬訪問、解散式、解散交歓会などについて準備を進めた。

準備を進めた。

(2) 地方プログラム

内閣府は、6月5日、7月10日及び9月30日、本年度の受入県市に決定した5県市(奈良県、高知県、熊本県、北九州市、函館市)の担当者と、「受入県市担当者等会議」をオンラインで開催した。会議では、内閣府から各県市の担当者に対して、各地方プログラムにおける地元青年との交流や学校などへの施設訪問、表敬訪問などの企画、ホームステイ家庭の手配などを依頼した。これを踏まえて各県市が作成した受入日程案について、各県市と更に調整を重ね最終日程を決定した。また、各県市は、ホームステイ実施の際の受入家庭・PY組合せリストを作成するなど、実施に向けて準備を進めた。

9 事業関係資料の作成

事業を円滑に実施するため、次の資料を作成し、参加者及び関係者に配布した。

- (1) 本年度事業のスケジュール、船内活動の概要等をまとめたハンドブック
- (2) 参加者の氏名や顔写真をまとめた PROFILES OF

PARTICIPANTS

- (3) ディスカッション・グループやソリダリティ・グループごとに参加者をまとめた LIST OF PARTICIPANTS
- (4) 本年度事業についてまとめた広報用リーフレット



10 日本参加青年の事前研修及び出航前研修

(1) 日本参加青年に対する事前研修

日本参加青年の選考試験に合格した20名に対し、8月2日から6日までの5日間、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて事前研修を行った。この研修は、本事業の効果的な目的達成を図るため、日本参加青年に事業の趣旨及び目的を十分に理解させ、PYとしての心構えを養い、東南アジアについての認識と理解を深めさせることを目的として、合宿形式により実施した。

日本参加青年は、船内及び訪問国における諸活動について、説明を受けるとともに、海外渡航のための手続きに関する説明などを受けた。また、船内諸活動の役割分担の決定と準備事項の確認、YL及びAYLの互選、ディスカッション活動・事後活動セッションに向けた準備などを行った。さらに、外務省担当者や元総領事からASEAN及び訪問国の情勢について説明を受け、また訪問国の在京大使館を表敬訪問した。



久保田舞衣外務省アジア大洋州局地域政策参事官室主査によるASEAN情勢及び日・ASEAN関係の講義(8月5日)



横山大樹外務省アジア大洋州局南部アジア部南東アジア第二課主査によるインドネシア情勢及び日・インドネシア関係の講義(8月5日)

月日	時間	活動内容
8月2日(金)	11:00-12:00 13:30-13:45 13:45-15:30 15:45-16:15 16:15-17:45 19:00-20:30	受付・制服採寸 開講式 ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ 日本ナショナル・リーダー紹介・委嘱状交付 ・ 管理部等の紹介 事業概要説明 ナショナル・リーダー講話 在京ベトナム大使館表敬訪問 チームビルディング ・ 個人の目標設定と共有 ・ コンティンジェントのテーマ設定 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
8月3日(土)	9:00-10:30 10:30-12:00 13:30-17:00 18:30-20:30	既参加青年による係、役割分担の説明 自主活動(係、役割分担決定) 自主活動(係ごとの方針・進行表作成・既参加青年との懇談) ディスカッション講座(基礎) 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
8月4日(日)	9:00-9:15 9:15-9:45 9:45-10:45 11:00-12:00 13:30-16:15 16:30-17:30 19:00-20:30	事務連絡 管理官講話 ディスカッション講座(実践) 国際儀礼(プロトコール)とマナー講座 自主活動(活動内容の企画・準備) YL・AYL選出方法検討 IYEO・事後活動について 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
8月5日(月)	9:00-9:15 9:15-9:45 10:00-10:30 10:30-11:00 11:00-11:30 13:00-16:30 16:30-17:00 17:00-17:30 19:00-20:00	事務連絡 安全講話 「ASEAN情勢及び日・ASEAN関係」講義 講師：久保田舞衣外務省アジア大洋州局地域政策参事官室主査 「ベトナム情勢及び日・ベトナム関係」講義 講師：河上淳一元在ホーチミン日本国総領事 「インドネシア情勢及び日・インドネシア関係」講義 講師：横山大樹外務省アジア大洋州局南部アジア部南東アジア第二課主査 自主活動(活動内容の企画・準備) 渡航手続・保険等の説明 健康管理について YL・AYL決定 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
8月6日(火)	9:10-11:30 13:30-14:30 15:00-15:30	在京インドネシア大使館表敬訪問 自主活動(研修のまとめ・各係の今後の進め方) 閉講式 ・ 参加青年代表による決意表明 ・ ナショナル・リーダー挨拶 ・ 写真撮影

(2) 日本参加青年に対する出航前研修

日本参加青年20名に対し、11月1日から4日までの4日間、国際ファッションセンターにおいて出航前研修を

行い、日本参加青年は、船内及び訪問国における諸活動の最終調整を行った。

月日	時間	活動内容
11月1日(金)	13:30-14:30 14:30-15:30 15:45-17:00	オリエンテーション ・ 開講式 ・ ナショナル・リーダー挨拶 ・ 管理部紹介 ・ 出入国書類作成 ・ 日本国内活動説明 ・ 課題別視察説明 質疑応答 自主活動
11月2日(土)	終日	自主活動
11月3日(日)	終日	自主活動
11月4日(月)	終日	自主活動

11 オンラインプレ会議

(1) 日程

月日	時間 (日本時間)	活動内容
10月20日(日)	14:00-14:45 14:45-15:45 16:00-16:45 16:45-17:30	開会 ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ 管理部員紹介 ・ 各国PY紹介 ・ ファシリテーター紹介 ・ 令和6年度「東南アジア青年の船」事業概要説明 NLセッション DGセッション(ディスカッション・グループ(DG)別) SGセッション(ソリダリティ・グループ(SG)別)

(2) NLセッション

NLセッションは、参加青年や参加国をよく知ることを目的とし、ナショナル・リーダー主導の下に開催した。

NLセッションでは、動画や音楽を用いて、各国がそれ

ぞれ自国の地理や文化等を紹介し、また、自国の参加青年も紹介することで、日本とASEAN各国の双方の理解や学びを深めた。



各国の紹介を聴く参加青年



フィリピンの言語を説明

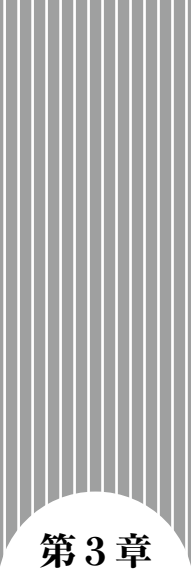
(3) DGセッション

DGセッションは、対面でのディスカッション活動が始める前に顔を合わせることで、よりスムーズにディスカッションがスタートできることを目的とし、ファシリテーター主導の下、開催した。

各ブレイクアウトルームに分かれて行われたDGセッションでは、自己紹介やディスカッション・グループ(DG)に期待することなどの共有がされ、これから始まるディスカッション活動の方向性の確認や共通認識をすることができた。

(4) SGセッション

ソリダリティ・グループ(SG)ごとに船内活動や地方プログラムを行う機会があることを踏まえ、SG内のコミュニケーションを円滑にし、PY同士の結束を高めるため、SGセッションを開催した。各SG担当のナショナル・リーダー主導の下、自己紹介や事業に対する期待を共有する機会となった。

A decorative graphic consisting of a series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect. At the base of these lines is a white semi-circle.

第3章

日本国内活動 1

月日	時間	活動内容
11月4日 (月)	7:00 7:00 7:30 7:40 7:40 7:40 8:40 8:50 9:50 15:05	<ASEAN各国ナショナル・リーダー (NL)、参加青年 (PY)、ファシリテーター> 成田空港又は羽田空港に到着 マレーシア (JL724) 成田空港 ベトナム (VN310) 成田空港 ブルネイ (BI695) 成田空港 カンボジア (TG642) 成田空港 ラオス (TG642) 成田空港 タイ (TG642) 成田空港 東ティモール (GA880) 成田空港 インドネシア (GA874) 羽田空港 シンガポール (JL038) 羽田空港 フィリピン (NH820) 羽田空港 ホテル移動後、到着オリエンテーション 第一ホテル両国泊
		<日本参加青年> 出航前研修 第一ホテル両国泊
11月5日 (火)	9:30-10:30 11:00-11:10 11:20-12:00 14:00-15:15 15:30-17:00	管理部によるオリエンテーション ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ 各国NL、PY紹介 ・ ファシリテーター紹介 ・ 管理部員紹介 ・ 日本国内活動説明 参集式（於 国際ファッションセンター） ・ 由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）挨拶 ・ PY代表ブルネイYL挨拶 国別ミーティング SGミーティング DGミーティング 第一ホテル両国泊
11月6日 (水)	09:00-16:00 16:00 19:45	課題別視察 DG1：国会議事堂、日本アセアンセンター DG2：東京証券取引所、KOITTO TERRACE（一般社団法人小岩駅周辺地区 エリアマネジメント） DG3：環境省、東京都環境公社 DG4：首都圏外郭放水路 DG5：パーソルテンプスタッフ株式会社 DG6：デジタル庁、NEC Future Creation Hub 東京国際クルーズターミナルへ移動、にっぽん丸に乗船 船側オリエンテーション（於 ドルフィンホール） にっぽん丸泊
11月7日 (木)	9:30-10:30 10:45-12:00 13:30-14:45 15:15-15:35 16:00	避難訓練 出国手続き 船内公開 出航式（於 ドルフィンホール） ・ 三原じゅん子内閣府特命担当大臣挨拶 ・ PY代表ベトナムYL挨拶 ・ PY代表インドネシアAYL挨拶 ホーチミン市（ベトナム）へ向けて出航

2 参集式

11月5日11時から、国際ファッションセンターにおいて、第48回「東南アジア青年の船」事業参集式を行った。

参集式では、始めに由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）から挨拶があり、続いてPYを

代表してブルネイYLが挨拶した。

各国NLとPYは、第48回「東南アジア青年の船」事業の始まりに心を新たに参集式に臨んだ。

3 課題別視察

	視察先 (午前)	視察先 (午後)	参照 ^(※)
DG1	国会議事堂	日本アセアンセンター	74ページ
DG2	東京証券取引所	KOITTO TERRACE (一般社団法人小岩駅周辺地区エリアマネジメント)	79ページ
DG3	環境省	東京都環境公社	83ページ
DG4	首都圏外郭放水路		87ページ
DG5	パーソルテンプスタッフ株式会社		92ページ
DG6	デジタル庁	NEC Future Creation Hub	97ページ

※第7章ディスカッション活動・各グループのレポート参照



日本アセアンセンターの職員やインターンを交えてディスカッション (DG1 ソフト・パワーと青年の民間外交グループ)



HITOTOWAが手がけるまちづくりの事例を学び、街歩きを経て意見交換 (DG2 経済成長と持続可能な社会グループ)



環境省にて日本の環境への取組について説明を聴く (DG3 地球環境と気候変動グループ)



首都圏外郭放水路の仕組みを学ぶ (DG4 防災と復興グループ)



心の健康を考えるワークを通じてパーソルテンプスタッフ株式会社の職員と意見交換 (DG5健康とウェルビーインググループ)



デジタル庁を訪問し、講義を聴講 (DG6デジタル社会グループ)

4 船内公開・出航式

11月7日13時30分から、東京港からの出航に先立って、日本参加青年の家族・友人、事業関係者などを対象として、にっぽん丸の船内公開を行った。

その後、15時15分から、にっぽん丸ドルフィンホールにて、在京ASEAN各国大使館代表者及び関係者列席の下、出航式を行った。

三原じゅん子内閣府特命担当大臣から激励の言葉を受け、PYを代表してベトナムYLとインドネシアAYLが挨拶をした。

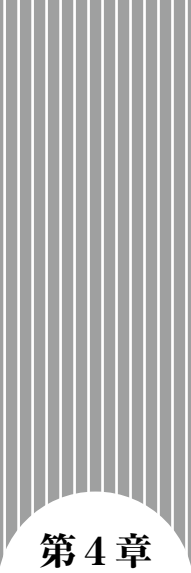
出航式終了後の16時、にっぽん丸はベトナムに向けて東京港から出航した。



ベトナム・ユース・リーダーによる決意表明



インドネシア・アシスタント・ユースリーダーによる決意表明

A decorative graphic consisting of a series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect. At the base of these lines is a white semi-circle.

第4章

運航（船内活動）

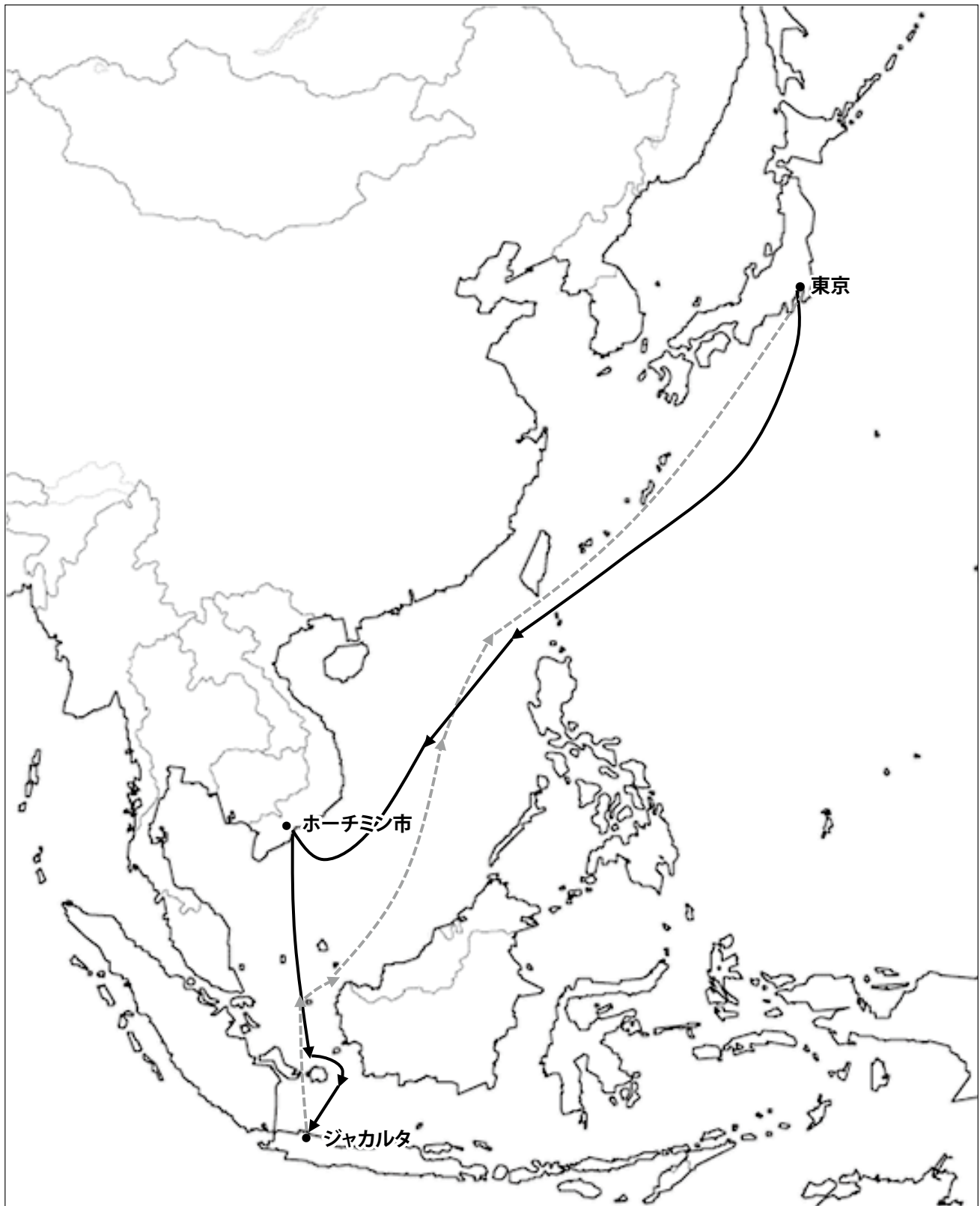
(1) 運航日程

	入港	出航
東京 (日本)		11月7日
ホーチミン市 (ベトナム)	11月14日	11月17日
ジャカルタ (インドネシア)	11月21日	11月25日
東京 (日本)	12月4日	

(注)

- ASEAN加盟国9か国及び東ティモールのナショナル・リーダー (NL) 及び参加青年 (PY) 並びにファシリテーターは11月4日に来日し、翌5日に日本NL及びPYと合流、日本国内活動の後、11月6日に乗船。
- 各国事後活動組織代表者は11月24日に、ジャカルタから乗船。
- ASEAN等政府代表者は12月4日に来日し、乗船。
- ASEAN等政府代表者、ファシリテーター、各国事後活動組織代表者は12月6日に下船、帰国。
- ASEAN加盟国9か国及び東ティモールのNL・PY、日本NL・PYは、12月6日に下船。地方プログラムと解散式、解散交歓会後、ASEAN加盟国9か国及び東ティモールのNL・PYは、12月11日に帰国。
- 日本NL及びPYは12月11日から国立オリンピック記念青少年総合センターにて帰国後研修に参加後、12月12日に解散。

(2) 航路図

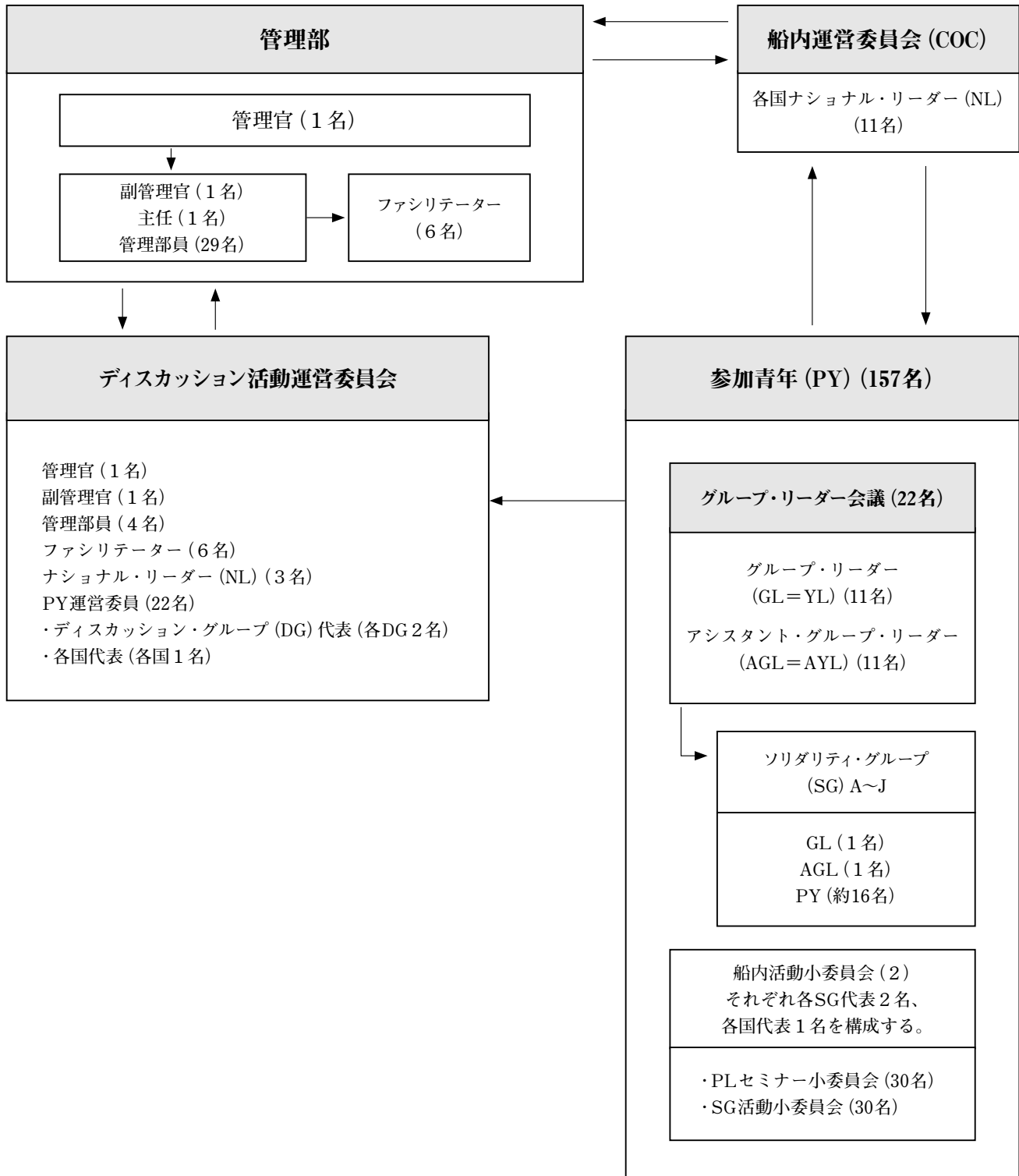


2

船内組織

(1) 船内組織図

第48回「東南アジア青年の船」事業の船内組織は、次のとおりである。



(2) 船内運営委員会(COC)

COCは、NL11名をもって構成し、船内における生活基準、船内活動等の基本的事項について、協議して決定する。また、グループ・リーダー会議、ディスカッション

活動運営委員会、各船内活動小委員会及びPYに対し、指導及び助言を行う。なお、管理官は、COCに対し必要に応じて指導及び助言を行うことができる。

【NL名簿】

国名	氏名	担当会議・小委員会
日本		ディスカッション活動運営委員会
ベトナム		PLセミナー小委員会
インドネシア		PLセミナー小委員会
ブルネイ		ディスカッション活動運営委員会
カンボジア		SG活動小委員会
ラオス		SG活動小委員会
マレーシア		グループ・リーダー会議
フィリピン		SG活動小委員会
シンガポール		グループ・リーダー会議
タイ		PLセミナー小委員会
東ティモール		ディスカッション活動運営委員会

(3) ソリダリティ・グループ(SG)

船内及び訪問国における活動の基礎単位として、各国PYほぼ同数の男女から成る約16名ずつのグループを組織した。これをソリダリティ・グループ(SG)と呼び、SG-AからSG-Jまで計10グループに編成した。各SGには、それぞれグループ・リーダー(GL)及びアシスタント・グループ・リーダー(AGL)を置き、彼らがグループを統率した。GL及びAGLには、各国のユース・リーダー(YL)及びアシスタント・ユース・リーダー(AYL)を充て、かつ、同国のYLとAYLが同じSGに割り当てられないよう配慮して編成した。

また、各種活動・情報伝達を円滑に行うために、船内で

は、なるべく同じSGのメンバーが同室となるよう考慮した。

(4) グループ・リーダー会議(GLミーティング)

グループ・リーダー会議は、それぞれ11名のGL及びAGLにより構成し、NL2名(マレーシア、シンガポール)を顧問とし、必要に応じて船内活動等について協議し、COC等に対して意見を述べた。また、COC又は管理部からのPYに対する連絡事項の伝達やSG間の調整を行った。

PYから提案された様々な自主活動の企画については、必要に応じてグループ・リーダー会議を通して検討・調整し、実施した。

【GL・AGL 名簿】

SG	GL氏名	国名	AGL氏名	国名
A		フィリピン		ブルネイ 東ティモール
B		マレーシア		タイ
C		シンガポール 東ティモール		フィリピン
D		ベトナム		シンガポール
E		ラオス		日本
F		カンボジア		ベトナム
G		インドネシア		カンボジア
H		タイ		マレーシア
I		ブルネイ		インドネシア
J		日本		ラオス

(5) ディスカッション活動運営委員会

ディスカッション活動運営委員会は、ディスカッション活動の適切な運営を図るため、管理官、副管理官、管理部員4名、ファシリテーター6名、NL3名(日本、ブルネ

イ、東ティモール)、PY運営委員22名をもって構成した。

ファシリテーターは、管理官の命を受けて、本事業に係る事務のうちディスカッションに関するものを処理した。

【ディスカッション活動運営委員会名簿】 *国名に下線付きは国代表PY

	ディスカッション・グループ	氏名	国籍／国名
管理官	—		—
副管理官	—		—
管理部員	—		—
ファシリテーター	ソフト・パワーと青年の民間外交		日本
	経済成長と持続可能な社会		日本
	地球環境と気候変動		メキシコ
	防災と復興		フィリピン
	健康とウェルビーイング		フィリピン
	デジタル社会		インドネシア

	ディスカッション・グループ	氏名	国名
NL	—		日本
			ブルネイ
			東ティモール
PY運営委員	ソフト・パワーと青年の民間外交		日本
			ブルネイ
			カンボジア
			マレーシア
			マレーシア
			フィリピン
	経済成長と持続可能な社会		日本
			ベトナム
			インドネシア
			ラオス
			タイ
	地球環境と気候変動		ベトナム
			ブルネイ
			ラオス
			シンガポール
	防災と復興		インドネシア
			ラオス
			フィリピン
	健康とウェルビーイング		マレーシア
			シンガポール
	デジタル社会		インドネシア
			フィリピン

(6) 船内活動小委員会

船内活動小委員会はPYで構成し、NLを顧問とし、各船内活動の実施の細目について協議して決定する機関である。

PLセミナー及びSG活動の各小委員会は、各SG代表

2名、各国代表1名で構成し、それぞれ計33名で構成した。PLセミナー小委員会の顧問をベトナム、インドネシア、タイのNL3名が、SG活動小委員会の顧問をカンボジア、ラオス、フィリピンのNL3名が、それぞれ務めた。

【PLセミナー活動小委員会名簿】 *国名に下線付きは国代表PY

SG	氏名	国名
A		日本
		タイ
B		<u>日本</u>
		日本
		カンボジア
C		日本
		<u>ベトナム</u>
		<u>ブルネイ</u>
		カンボジア
D		日本
		カンボジア
		<u>フィリピン</u>
E		日本
		<u>インドネシア</u>
		<u>カンボジア</u>
		シンガポール
F		日本
		インドネシア
		タイ
G		日本
		<u>ラオス</u>
		フィリピン
H		日本
		ベトナム
I		カンボジア
		<u>マレーシア</u>
		フィリピン
J		カンボジア
		カンボジア
		<u>シンガポール</u>

【SG活動小委員会名簿】 *国名に下線付きは国代表PY

SG	氏名	国名
A		ブルネイ
		ラオス
B		<u>ベトナム</u>
		<u>ラオス</u>
		マレーシア
		シンガポール
C		日本
		タイ
D		カンボジア
		インドネシア
		<u>マレーシア</u>
E		インドネシア
		フィリピン
F		ラオス
		フィリピン
G		ブルネイ
		ラオス
		<u>タイ</u>
H		<u>日本</u>
		ベトナム
		<u>インドネシア</u>
		<u>ブルネイ</u>
		<u>カンボジア</u>
		ラオス
		<u>フィリピン</u>
I		カンボジア
		ラオス
J		日本
		タイ
		<u>シンガポール</u>

3 船内運営委員会(COC)

COCにおける協議事項は、次のとおり、生活規律・船内活動・訪問国活動など、広範多岐にわたった。第1回及び第2回COCはNL会議の際にオンラインで、第3回以降は基本的に各訪問国活動最終日の出航後に開催した。

第1回及び第2回COCの際に協議・決定した事項のうち、PYに周知・徹底すべきものについては「ハンドブック」にまとめ、全参加者に配布した。

また、船内におけるPYへの連絡事項については、モーニング・アセンブリー、国別ミーティングや船内所定の掲示板を利用した。

【COC協議事項】

第1回 (9月3日、オンライン)

「第2章 7. ナショナル・リーダー会議」を参照。

第2回 (10月4日、オンライン)

「第2章 7. ナショナル・リーダー会議」を参照。

第3回 (11月7日、船内COCルーム)

- ① 日本国内活動の振り返り
- ② 船内活動及び船内生活について

第4回 (11月17日、船内COCルーム)

ベトナムにおける訪問国活動の振り返り

第5回 (11月25日、船内COCルーム)

インドネシアにおける訪問国活動の振り返り

4 船内活動

(1) 船内生活

1. 船内生活時間

航海中の船内生活時間は、訪問国における活動を除き、次のとおりである。

時間	活動内容
7:00	起床 (モーニングコール)
7:30- 8:00	モーニングエクササイズ
8:00- 9:00	朝食
9:15- 9:45	モーニング・アセンブリー
10:00-12:45	活動
12:45-14:15	昼食
14:15-17:00	活動
17:00-18:00	自由
18:00-19:30	夕食
19:30-20:45	活動
20:45-23:00	自由
23:00	消灯 (ナイトコール) ナイトパトロール

2. 船内生活のあらまし

- ・ モーニングコール、ナイトコール

モーニングコールは、毎朝7時に、PYが当番制 (SG持

ち回り) で、船内放送を使用して起床の呼びかけや音楽を流す等、趣向を凝らして行った。

また、ナイトコールは、毎晩23時に、基本的にモーニングコールを担当したSGが同様にいった。

- ・ モーニングエクササイズ

毎朝7時30分から8時まで、ドルフィンホール又はスポーツデッキで、PYが当番制 (SG持ち回り) で実施し、内容は音楽を使った体操やダンス等多彩であった。モーニングエクササイズへの参加は任意とした。

- ・ モーニング・アセンブリー

毎朝9時15分から9時45分まで、ドルフィンホールにおいて、SGごとに整列し点呼及び健康確認を行い、その後、当番のNLが当日のスケジュール確認や連絡事項の伝達を行った。

- ・ 活動

午前、午後及び夜の三つの活動時間帯に分けて行われた (詳細は後述)。

午前及び午後の活動としては、ディスカッション活動、PLセミナー及びSG活動等を、夜の活動としてはナショナル・プレゼンテーション (NP) や自主活動を、それぞれ実施した。

- ・ ナイトパトロール

ナイトコール終了後、NLが当番制で、船内各所を見回り、異常の有無を確認し、船内の安全確保に努めた。

(2) 令和6年度「東南アジア青年の船」事業(第48回) 船内活動日程

月 日	10:00～11:15	11:30～12:45	14:15 ～15:30	15:45～17:00	19:30～20:45
11月 6日(水)				乗船(16:00) 船側オリエンテーション	荷物移動
7日(木)	避難訓練 (9:30-10:30)	出国手続 (10:30-12:00)	船内公開 (13:30-14:45)	出航式 (15:15-15:40) 出航(16:00)	国別 ミーティング (17:00-18:00)
8日(金)	管理部 オリエンテーション	GLミーティング／ディスカッション活動運営委員会／ 船内活動小委員会／プレス担当者連絡会			COCミーティング 自主活動
9日(土)	管理官講話 (10:00-10:45)	船長講話 (11:00-11:45)	自主活動		日本紹介
10日(日)	ディスカッション活動 (導入プログラム)		訪問国活動振り返り ＜ソリダリティ・グループ毎＞(1)		ブルネイ紹介
11日(月)	フリーデイ(半日)		ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅠ)		カンボジア紹介
12日(火)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅡ)		ソリダリティ・グループ活動(1)		ラオス紹介
13日(水)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅢ)		PLセミナー活動紹介		ベトナム紹介
14日(木)	ベトナム訪問国活動				
15日(金)					
16日(土)					
17日(日)				国別ミーティング (17:30-18:30)	COCミーティング 自主活動
18日(月)	フリーデイ(半日)		訪問国活動振り返り ＜ソリダリティ・グループ毎＞(2)		マレーシア紹介
19日(火)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅣ)		PLセミナー(1)	PLセミナー(2)	フィリピン紹介
20日(水)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅤ)		ソリダリティ・グループ活動(2)		インドネシア紹介
21日(木)	インドネシア訪問国活動				
22日(金)					
23日(土)					
24日(日)					
25日(月)				国別ミーティング (17:30-18:30)	COCミーティング 自主活動
26日(火)	フリーデイ(半日)		訪問国活動振り返り ＜ソリダリティ・グループ毎＞(3)		シンガポール紹介
27日(水)	ディスカッション活動 (まとめ・DGレポート・成果発表準備)		事後活動セッションⅠ (全体会)		タイ紹介
28日(木)	事後活動セッションⅡ (国別・各国の事後活動紹介)		PLセミナー(3)	PLセミナー(4)	自主活動
29日(金)	写真撮影(ソリダリティ・グループ毎) 船内見学		事後活動セッションⅢ (国別プロジェクト案議論・作成)		自主活動
30日(土)	事後活動セッションⅣ (国別プロジェクト案完成、サマリー・フォーラム準備)		ソリダリティ・グループ活動(3)		自主活動
12月 1日(日)	ディスカッション成果発表		PLセミナー(5)	PLセミナー(6)	自主活動
2日(月)	フリーデイ(半日)		フェアウェル フェスティバル準備	フェアウェルフェスティバル	
3日(火)	下船手続説明	国別ミーティング	荷物移動		
4日(水)	入国手続・荷物審査		サマリー・フォーラム準備(国ごと発表)		
5日(木)	サマリー・フォーラム(国ごと発表)		各国政府代表者連絡会議		
6日(金)	下船・地方プログラムへ出発		地方プログラム(5県市)		

(3) ディスカッション活動

ディスカッション活動は、異なる背景を持つ各国PYが自由に意見交換を行うことによって相互理解を深めるとともに、集団の中での意見のやり取りをする能力の向上及び人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ること等を目的として実施した。

詳しくは、第7章「ディスカッション活動」を参照。

(4) 事後活動セッション

事後活動セッションは、ディスカッション活動の成果を活かし、事後活動への積極的な参加の促進、事後活動組織のネットワーク強化等を目的として実施した。

詳しくは、第8章「事後活動セッション」を参照。

(5) ピア・ラーニング・セミナー(PL セミナー)

PLセミナーは、PYがこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等について比較的少人数の仲間と共有又は議論する活動として、次のことを目的として実施した。

[参加者]

- PYがこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等を仲間と共有することによりお互いのバックグラウンドをより深く知ること。
- ワークショップ、講義やディスカッションの効果的な実施方法を主催者の運営方法から学ぶこと。
- 評価及び価値のあるフィードバックができるようになること。

[主催者]

- 自らの考えや経験等を仲間に伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること。
- セミナーの企画・立案から実施までの一連のプロセスを経験することによりプロジェクトの遂行能力を高めること。

また、PLセミナーの運営は、担当顧問であるNL3名(ベトナム、インドネシア、タイ)の指導の下、PLセミナー小委員会が次の方針に沿って行った。

- セミナーのテーマは「社会をより良くするための取組」を基本とし、知的な学びがある内容とすること。ただし、「東南アジア青年の船」事業の目的に沿った内容であれば、テーマは限定されない。
- セミナーの内容は、PYがこれまでに取り組んできた、

また現在取り組んでいる研究や活動から得られた経験や知見のほか、PYの自国の活動報告で各国と共有する価値があるようなものでも良い。

- 主催者はセミナーのテーマ内容の専門家である必要はない。体験及び知識を共有するに当たり、学術的な内容に限らず日常生活に即した内容でも良い。その場合、主催者はセミナー内容を深めるに当たり、テーマ内容に関連する調査をし、研究すること。
- 各セミナーは、主催者が参加者と協力して運営する。
- セミナーの手法として、ワークショップ方式、講義方式、ディスカッション方式、その他、セミナーのテーマに適した効果的な方法で実施する。
- 主催者は、参加者の好奇心を刺激し、セミナーに参加する経験がより良いものとなるように、相互に交流や対話でき、クリエイティブなセミナーになるよう心掛けて計画すること。
- 原則として活動時間1コマ(75分)又は連続した2コマで一つのセミナーが完結するようにすること。
- 活動時間には、(1) 導入、(2) 活動、(3) 参加者からのフィードバック、(4) 片付けを含めること。
- 前号に掲げる「(3) 参加者からのフィードバック」では、主催者が参加者からセミナーの運営や内容、その他についてフィードバックを受けること。主に、主催者が何を継続、又は改善が必要かという観点からフィードバックを受ける。主催者は、参加者からのフィードバック用の時間を最低でも15分設けること。

セミナーの開催に際し、まず、11月13日に、主催するPYが全PYに対して、各PLセミナーの活動内容を紹介した。PYは、PLセミナー6セッションの全てに、主催者又は参加者として、それぞれ一つずつのPLセミナーに参加した。

開催されたPLセミナーは次のとおりである。



Wau Bulan (マレー風) の紹介

PLセミナー一覧

* B: ブルネイ、C: カンボジア、I: インドネシア、J: 日本、L: ラオス、Ma: マレーシア、P: フィリピン、S: シンガポール、T: タイ、V: ベトナム

セミナーID	セミナーの題名	主催者 *	セミナーの目標	主催者の学び
S1	医師による健康ワークショップ 予防医学とアジアにおける健康問題	J12, J06, J07, J16	・ 第一の目標は、ASEAN諸国と日本における健康問題の傾向と健康習慣の向上促進について説明すること。 ・ 第二の目標は、SSEAYP全体の健康維持のため、船上での基本的な健康習慣を学ぶこと。	・ ASEAN諸国の精神的・身体的健康問題について学んだ。また、他国ではどのように精神的・身体的健康が悪化する前に予防しているのかを学んだ。 ・ 相互作用のある良いセミナーになった。しかし、参加者はより意見を発信したいように思えたので、ディスカッションの時間をもっと取るべきだと感じた。
S2	ブルネイの活動の中での遺産：マレー語から先住民族の言語へ	B04, B05, B06, B09, B14	・ ブルネイの言い回しを紹介することで、参加青年の自国の伝え方を振り返ることを促す。 ・ 様々な言語学的側面を紹介することで、青年の自身の状況や環境にあてはめて考えられるようにする。 ・ 様々なブルネイの言い回しを説明する。	・ 他の参加者から各国の言い回しやイベントスピーカーとしてのプレゼンテーションスキルについて知見を得ることができた。 ・ 他国で見られる様々な文脈が共有され、興味深い異文化体験となった。
S3	クレイアニメーション：アニメ作成アプリと粘土を用いた動画の作り方	C06, C04, C08, C13, C14	・ 粘土を用いた高度な技術を要するコマ撮りの強化セミナー ・ クレイアニメーションを通じてストーリーテリングスキルを向上させる。	・ 教育的・魅力的かつ効果的な活動を開発する必要がある、PLセミナーの運用によって多くの学びがあった。 ・ また、どのように組織し計画するべきか、プロジェクトの目的策定から、スケジューリング、資料準備などについて学んだ。実際のセミナーの間、参加者が楽しめるようサポートをして活動をリードするという経験を得ることができた。
S4	Gen 2 court	L07, L06, L14, L15	法的思考について理解し、法律に親しみを持つこと。	当初は楽しいだけのセッションだったが、進めていくうちに他国の法律についての理解が深まり、各国の法律の違いやそこから来る考え方の違い（財産分与の比率の原則など）について知り得ることができ驚いた。
S5	リーダーシップの声：パブリックスピーキングマスタークラス	S04	・ スピーチの中で考えを明確に伝える方法を学ぶ。 ・ 聴衆を魅了するストーリーテリング技術など影響力のあるスピーチの仕方を学ぶ。	・ 組織化力 ・ 相手を引き込む話の準備 ・ 相手に合わせた話の組み立て方 ・ 長時間相手を引き付ける方法
S6	政策キャンペーン都市、シンガポール	S06, S12	シンガポール政府がこれまで導入した様々な政策キャンペーンやマスコットを紹介し、社会問題や時代に応じた優先事項について新たな視点を示す。	・ 私たち自身も学ぶことができ、興味深いものとなった。 ・ 他国の政策についても知ることができ、シンガポールと違いボトムアップ型が多いと感じた。 ・ 自主学習と魅力的な講義を行うことは全く異なるアプローチが必要であることも学んだ。
S7	タイのハーバルインヘラー（嗅ぎ薬）	T07, T04, T09, T12, T13	・ タイのインヘラーの簡単な歴史とその効果 ・ 青年たちとの時間を有意義なものにすること ・ インヘラーが船酔い対策に役立つことからこのセッションを開催することにした。	・ 各ハーブの効果と異なる目的 ・ 他の参加青年との交流 ・ 伝統的なタイのインヘラー作成スキル

セミナーID	セミナーの題名	主催者 *	セミナーの目標	主催者の学び
S8	ベトナムコーヒー	V10, V01, V04, V08, V11	・ 歴史的ルーツから独特な抽出方法、文化的な重要性にいたるまで、ベトナムコーヒーの豊かで多様な世界を紹介する。 ・ 感覚的な学びを通じ、ベトナムコーヒーの特徴的な風味や抽出方法、その土地について理解を深める。	・ ベトナムだけでなく、他国についても歴史的・文化的な重要性 ・ 伝統的なベトナムの「フィン」フィルターなどの独特な抽出方法 ・ ベトナムコーヒーの力強く、甘く、時にクリーミーな特徴的な味の体験と共有 ・ 文化的要素が食品や飲料に与える影響力
S9	地上のスター：有名でなくてもインフルエンサーになる方法	C08, C02, C03, C11, C12	・ 参加青年がりのままの自分を好きになること。有名でなくてもスターになることができる。彼らの内なる自信を引き出し、情熱があればインフルエンサーにもアイドルにもなれるということを後押し、彼らの自然な才能を認識してもらう。 ・ ストーリーテリングや撮影方法、歌のスキル向上の方法を伝える。限られた道具で創造性を発揮して写真撮影の方法を学び、才能を活かして短いストーリーを作ったり、参加青年たちへ歌を歌うことでスキル向上を目指す。	・ このセミナーから「私たちはこの世界で一人ではない」。時に悲しいことや何かを失うこと、諦めることがあっても大丈夫。何もしたくなったり、何かから逃げたくなる日もある。私たちはそれぞれにユニークさを持っており、それは輝かしいものであると知った。 ・ 有名でなくてもスターになれるということは、他者に影響を与える前向きさと才能があるということを示した。
S10	諸島の味：インドネシアの美食体験	I04, I06, I07, I12	没入型体験を通じてインドネシア料理の多様性や文化遺産を紹介する。	・ 効果的なイベント運営方法 ・ 参加青年それぞれの食についての視点や話 ・ このセミナーを運営することで、プレゼンテーションを準備・実施し、ASEAN諸国と日本の参加青年に伝えるための方法を一から学んだ。
S11	Wau Bulan (マレー風) の紹介	Ma13, Ma07, Ma11, Ma12	・ マレーシアの伝統的な風作り工芸、特にラヤンラヤンについて紹介する。 ・ 伝統的な風作り体験を行う。	・ 参加青年がこのセミナーを楽しんでいることがうかがえた。絵を描くことで自身を見つめ、癒しの時間の一つとなった。それに加えて、ワークショップを通じて国の文化であるワウ・ブランを様々な方法で共有する方法を学んだ。 ・ これらの経験は他の文化を相手に伝える際に役立つと感じた。
S12	シンガポールのアイデンティティ	S11	シンガポールの文化構成を深く探求し、歴史や文化遺産の調査を通じてアイデンティティを紹介する。	それぞれの国によって異なる文化の琴線があることがわかった。
S13	アオザイ裁縫	V07, V02, V04, V08, V14	・ ベトナム縫製の進化と現代の関連について焦点を当て、ベトナム縫製の文化的・歴史的重要性と伝統的な価値について探求する。 ・ セミナーの終わりにベトナムのアイデンティティや伝統、ファッションにおいて縫製への理解を深める。	・ ベトナムの歴史的起源や縫製の文化的意義、ベトナム文化について理解を深めた。 ・ 縫製が国のアイデンティティ、女性らしさ、優雅の象徴としてみなされていると認識した。 ・ 生地選びから縫製ラインのデザインまで、縫製に込められた職人技と芸術性について学び、共有した。 ・ 縫製が文化的な本質を保ちながら、現代のファッションに適応・進化してきたことを理解した。
S14	タイマッサージ	T07, T01, T03, T09, T12	・ 簡単なタイの歴史とタイマッサージの紹介 ・ 各国のマッサージについてディスカッションを行う。	・ ASEAN諸国のマッサージの観点 ・ 国のチームビルディング ・ タイメディカルマッサージスクールで新たなスキルの獲得 ・ 友人作り
S15	75分のラオス体験	L05, L04, L09, L10, L12	・ ラオスの伝統服とそれぞれの民族衣装のユニークさを紹介する。 ・ 「Lam vong」と呼ばれるラオスの伝統的な踊りを体験する。	参加青年たちがセミナーを楽しんでおり、私たちもこのセミナーを通じて私たちの文化を共有し、学んでもらう機会を得た。

セミナーID	セミナーの題名	主催者 *	セミナーの目標	主催者の学び
S16	カンボジアのスパイス：カンボットペッパー（カンボジアの黒胡椒）	C15, C01, C10, C12, C02	- このセミナーでは世界的に有名なカンボットペッパーを地域で広めることに焦点を当てる。フレッシュで柑橘系のフルーティーさ、そしてスパイシーさがあり、力強さと繊細さを兼ね備えた豊かな味わいを持つカンボットペッパーの魅力を共有することを目指す。 - すべてのペッパーは有機栽培で地元の農家によって生産され、地域の最高品質となっている。	オーガナイザーとして、私たちはこの経験から主に二つの点を学んだ。 - 効果的な準備と参加者との関わり方：参加青年は他の参加青年と交流する時間を多く持つことを好むことがわかった。また、セミナーで伝える情報は少なく、簡潔であることが鍵で、長い講義は不要。アクティビティは対話形式で、参加青年が実際に体験できることが重要だと感じた。 - ソフトパワーの共有と地元製品の紹介：この経験を通じて、カンボジアの地元製品をASEAN諸国や日本の参加青年に紹介することができた。中にはカンボットペッパーを家族用に購入したいという参加青年もあり、このセミナーは文化交流だけでなく、地元製品を促進する助けにもなったことが分かった。
S17	アニヤマンとパティック（編込みの手工芸とろうけつ染めの布）	Ma04, Ma05, Ma08, Ma09	- マレーシアのパティックとアニヤマンを紹介 - 参加青年間の関係構築を促進 - 参加青年同士がパティック絵画とアニヤマンを教え合い、ピアラーニングを推奨 - アートヒーリングの重要性の伝達	- リーダーシップスキルの向上 - イベント管理スキルの習得 - コミュニケーションスキルの向上 - 参加青年同士の関係強化 - 他国の文化に対する理解が深まった。 - 国の文化と伝統遺産を尊重することで、参加青年に愛国心を持たせた。 - お互いに助け合いながらセミナーを進行することができた。
S18	プロジェクトミー（メンタル強化）	P15, P04, P11	メンタルヘルスへの認識を高め、参加青年同士の間でメンタルヘルスについての異なる理解を促進することを目的とする。	アクティビティを実施する際には、グループディスカッションに特化することが効果的で、より相互的で実践的な議論ができることが分かった。
S19	タイの特別な蜂蜜	T05, T03, T06, T10, T12	蜂が生態系において果たす重要な役割、農業や経済に与える影響を理解する。また、タイの様々な地域からの特別な蜂蜜を味わい、その違いを話し合い、蜂蜜モクテル（ノンアルコールカクテル）を楽しむ。	コンテンツに加えて、チームワーク、スピーキングスキル、コミュニケーションスキルを実際の経験を通じて学んだ。
S20	プレッシャーからサポートまで	V11, V03, V09, V06, V10, V14, V15	アジア人としての経験について参加青年同士で自由に話し合い、お互いのストーリーに共感し、みんながこの旅路でひとりではないことを理解できる空間を作ること。	参加青年が心を開いて自分のストーリーを楽しんでくれたことに感謝している。また、今後同様のイベントをより良く実施する方法も学んだ。
S21	ミクロ面からの平和構築：広島と沖縄の事例から	J10, J03, J09, J15, J17, J20	広島の前爆投下の影響や沖縄での地上戦、そして安全保障問題について、参加者がミクロの視点で理解し、平和構築の重要な側面と、自分たちがどのように変化をもたらすことができるかを探ること。	- 自身がディスカッションに参加し、ディスカッション結果を聞くことで、日本の問題に対する様々な国々の異なる視点を知ることができ、とても新鮮であった。 - セミナーを主催することで、時間管理、スピーキングスキル、早期の計画など、もっと磨くべきスキルについて認識した。この経験をもとに、より良いセミナーを開催することに意欲を持った。
S22	日本の「道」（茶道、華道、弓道、剣道）の精神を紹介	J16, J08, J09, J15, J19, J20	日本の伝統文化である「道」（茶道、花道、弓道、剣道）のワークショップを通じて、参加青年に日本の伝統文化への理解を深めてもらうこと。また、日本の習慣における礼儀や規範の重要性を伝えること。	- 私たちの説明とワークショップを通じて、参加青年に日本の伝統文化を紹介することができた。「道」文化を体験することで、参加青年は他者を尊重し、礼儀正しくある精神を学ぶことができた。 - プレゼンテーションを準備するためにリサーチを行うことで、私たちが自国の文化への理解を深めた。

セミナーID	セミナーの題名	主催者 *	セミナーの目標	主催者の学び
S23	説得の技術	B15, B03 B04, B05, B12	・ モンローの動機づけの順序を理解し、説得力のあるメッセージを構築する方法を学ぶ。 ・ 返報性、希少性、社会的証明などの技法を学び、説得力を高める方法を習得する。 ・ 討論を通じて、これらの技法を実践的に応用する。	・ オーガナイザーとしての役割は新鮮で、初日は参加青年は聞いていたがうだけだった。 ・ 参加青年が非常に積極的で議論に熱心に参加してくれたことに感謝している。 ・ 主催者として、コンテンツから多くの学びがあった。また、多くの新しい友人と積極的に交流する機会にもなった。 ・ メイン主催者や参加青年からも多くを学ぶことができた。特に、他のイベントでは話せないトピックについてオープンなディスカッションができたことが印象的であった。 ・ 若者たちが成長し、積極的にセミナーに参加する姿を見ることができた。多くの参加青年が初めて知るテクニックもあり、それが彼らのスピーチやディベートスキルの向上に役立たと話してくれた。
S24	遊びの喜び： ゲームがあなたの成長を形作る方法	I10, I05, I07, I11	インドネシアの伝統的なゲームを紹介し、それが感情的スキル（身体的、認知的、感情的）を向上させることを示す。また、様々な種類の異なる遊びが、感情的スキルの発達をどう促すか検証する。	・ イベントを効果的に運営する方法を学んだ。 ・ 他の参加青年たちからインドネシアの様々なゲームに関する洞察や体験談を共有してもらった。 ・ チームワークを向上させ、グループが勝つための方法を学んだ。 ・ 実際にゲームを行ったので、プログラムへの参加がより楽しくなり、アイデアの交換も活発に行われた。
S25	EY!EY!: 先取り行動の主流化	P14, P03, P06, P12, P15	・ 予測行動に関する知識とスキルを提供する。 ・ 予測行動のビルディングブロックを紹介する。 ・ フィリピン赤十字のフレームワークについて議論する。 ・ 4P（製品（Product）、価格（Price）、流通（Place）、コミュニケーション（Promotion））を活用した計画策定の仕方学ぶ。	・ 各国で予測行動や災害リスク軽減について異なる関心があることがわかった。 ・ 特に災害経験の少ない若者に関心を集めるためもっと頻繁に行うべきなどという議論や対話がなされた。 ・ 4Pフレームワークは防災に限らず他の若者支援活動にも活用できる。 ・ 一部の若者は災害リスク軽減や予測行動に関心があるが、学習プラットフォームへのアクセスが十分に知られていない。
S26	日本のアート体験： マンガ、アニメ、水引、風呂敷	J11, J09, J10, J12, J18	水引作りや、風呂敷の包み方体験、マンガ制作、アニメソングに合わせて踊る体験を通じて、日本の芸術文化であるそれらに魅力を感じ楽しみ、理解を深めること。	・ 教える経験を通じて、他国での「風呂敷」を使った異なる包み方についても知ることができた。 ・ 当初、水引で「梅結び」を作るのは参加青年たちにとって難しいと考えていたが、実際には適度な難易度だったようで、30分以上集中して取り組んでいた。 ・ マンガのパートでは、マンガ自体は世界中で人気があるものの、その歴史についてはあまり知られていないことがわかった。このことから、日本の伝統的なアート作品「鳥獣戯画」を現代のマンガのトレンドと結びつけて広める余地があると感じた。 ・ 全体を通じて、教えることで日本のアート文化の価値を再認識することができた。



フィリピンの織物（フィリピン）



クレイアニメーション（カンボジア）

セミナーID	セミナーの題名	主催者*	セミナーの目標	主催者の学び
S27	創造性による癒し	B01, B02	- 参加青年たちが自分の強い感情を安全に表現できる場所を提供する。 - 参加青年たちに感情を表現する新しい創造的な方法を教える。 - ダンスや演劇の技術を癒しの実践に取り入れる。	- 他の参加青年たちが良い感情も悪い感情も抱え込まずに受け入れられるようなサポートができたことはとても励みになった。一部の参加青年たちは、セッションが自分にとって必要なものであることに気づけなかったと話してくれ、このワークショップを自宅でも続けようとする意欲となった。 - 最初は、一部の参加青年たちにとっては心地よくなく恥ずかしさが見られた。人によって異なる快適さのレベルに合わせた準備の重要性を学んだ。この経験を通じて、自分の活動に対する新たな自信を得ることができた。
S28	ボランティアシンクタンク	I03, I09, I14	ASEAN諸国及び日本の異なる地域におけるボランティアの意味について知見を得る。	- 多くのASEAN諸国は同じ問題や課題に直面しており、それに対処するための新たな視点を数多く得ることができた。 - オーガナイザーとして、できるだけ楽しく双方向の交流ができるよう工夫する方法を学んだ。
S29	栄養セミナー	Ma06, Ma01, Ma02, Ma10	- 健康的な食生活、バランスの取れた食事、体重管理、食事の計画、そしてマレーシアにおける健康的な食事習慣について学習する。 - 参加者はクイックメソッドを用いて1日の総カロリー摂取量を計算する方法も学ぶ。	アジア諸国と日本の間には健康的な食事に関する類似点があることを知った。また、セミナーでは相互作用的な活動を取り入れることで、参加青年が楽しいと感じるセッションを作るべきだと学んだ。体験活動を提供することで、主催者が伝えたい内容をより深く理解してもらうことができる。
S30	人を愛するように地球も愛そう：現代のエコ戦士たち	P07, P01, P03, P04, P09	- 環境保護への意識を高める。 - フィリピン若者団体による事例を共有する。 - 若者や地域住民をコミュニティプロジェクトに参画してもらう方法を共有する。 - サンゴ礁や海への愛を育む。 - DYESABEL Philippinesという団体について議論する。	- 環境保護に対する支持者が増えた。 - ASEAN諸国の環境保護活動家とのネットワークが構築できた。 - 環境保護のための変化の波を生み出すプラットフォームを持つことができた。 - 共有や議論を通じてアイデアの幅が広がった。 - 参加青年を通じて、若手リーダーや活動家、そしてボランティアからの支援により、私たちは大きな刺激を受けた。
S31	子ども時代のタイムカプセル	T15, T12, T01, T02, T14	伝統的なスナックやボードゲーム、音楽を通じて、子供時代へ戻ってみることを目的とする。参加青年たちが少しの間だけ昔に戻り、屈託のないストレスのない人生を楽しんだ頃を思い出せる時間にする。また、インターネットが今ほど普及していなかった時代についても共有する。	- ASEAN諸国や日本の様々な国から文化、ボードゲーム、信仰について学ぶことができた。このセッションでは、各派遣団からボードゲームを集め、お互いに遊び方を教え合った。 - 文化交流だけでなく、企画運営スキル、ゲームデザイン、イベント運営、時間管理、プレゼンテーションスキルなど、多くのことを学ぶことができた。



タイマッサージ(タイ)



アオザイ裁縫(ベトナム)

セミナーID	セミナーの題名	主催者 *	セミナーの目標	主催者の学び
S32	にっぽん丸で過ごす旧正月	V06, V03, V04, V05, V11, V15	ベトナムの旧正月(テト)における文化と伝統について伝え、参加青年がベトナム人になったように装飾やお祝いを楽しむ体験をすること。	・ASEAN諸国や日本の友人たちに自国の文化を届ける機会を得られ、とてもエキサイティングであった。 ・また、様々な設営が必要だったため、準備やイベントの段取りについてもより良い方法を学ぶことができた。
S33	ブルネイのアクセサリー作り	B02, B03, B08, B10, B11	ブルネイの伝統的なアクセサリーの豊かな遺産を理解し、その工芸技術や背景にある物語を学ぶことで、これらの伝統を継承していくこと。	・ワークショップやセミナーの運営に関する知識を得ることができた。 ・体験活動を通じてグループワークを行い、コミュニケーションを強化した。 ・ブルネイの文化を他国に広める機会を得た。
S34	マインドフルネス瞑想:内なる平和と自己愛	C15, C01, C04, C10, C13	マインドフルネス瞑想は思考、感情、身体感覚、そして周囲の環境について瞬間ごとの気づきに集中し、優しい気持ちで育む瞑想。 ・瞑想が生活において重要であることを伝える。 ・参加青年がホームシックになった場合、リラックスし、自分の努力を認め、家族との楽しい時間を思い出す場を提供する。 ・瞑想はいつでもどこでもお金をかけずにすることができ、自分自身や周囲の人々を感謝するためのツールであることを話し合う。 ・自己理解、心の平穏、バランスを育み、感情的な健康や全体的な健康に役立つスキルを身につける。	・参加青年たちから、私たちが普段、他人を気遣い注力することに多くの時間を費やし、自分の努力を評価することを忘れがちであることに気づかされた。 ・この経験を通じて、個人的な振り返りの場を提供し、自分自身をケアし、自分や自身の体を思いやる機会を得た。 ・小さなことがタイミングによって大きな影響を与えることを学び、日々の些細なことを大切にし、自己批判を減らすように努めることの重要性を感じた。 ・最終的に、誰もが自分自身の最大の応援者であるべきだということを再認識した。
S35	アートセラピー:マインドフルペインティングで文化遺産を探索	I02, I01, I13, I15	・マインドフルペインティングを通じて参加青年の情緒的な健康と自己認識を高めるとともに、インドネシア文化遺産とのつながりを深めることを目指す。 ・参加者は、パティック・メガメダン、イーナン・ビンティン、マンダラなどの伝統的な柄の作成に取り組む。	・伝統的な柄の作成に取り組むだけでなく、夕日と海の景色を楽しみながら、創造的かつ内省的に感情や文化的アイデンティティを探索した。 ・アートが自己発見と感情の明確化のための強力なツールであることを改めて実感した。 ・インドネシアの伝統的な柄に触れることで、参加者は自身の感情をアート作品に表現し、文化を継承することの重要性を強調した。
S36	ケーン:祝福の音色	L03, L02, L04, L08, L11	・ラオスが誇る伝統楽器「ケーン」について紹介し、才能あふれるラオスの若者による演奏を通じてその魅力を伝えること。 ・ケーンの音を通じて、ラオスの物語や平和を感じてもらうこと。	・参加青年は、メロディーを作るのが難しいながらもケーンの基本的な音階を学び、新しいことを学ぶ姿勢を持っていることが分かった。 ・ある参加青年から「このセッションは他の参加青年にもぜひ体験してほしい」というリクエストもあった。 ・ケーンの演奏や祝福の活動を通じて、楽しい経験や幸福感が共有された。
S37	フィリピンの織物	P05, P02, P08, P10, P13	フィリピン文化、特に伝統織物の豊かさを強調し、ASEAN諸国及び日本の参加青年にフィリピンの芸術への深い理解を促すこと。	・フィリピンの織物文化、特にアクランのピニヤ手織物やマラワムのランキット柄をインタラクティブな形で紹介できたことは非常にやりがいがあった。 ・参加者の熱意と積極的な取組から、文化遺産を発信・促進する重要性を再確認した。 ・このセミナーを通じて、文化交流の企画・プレゼンテーションスキルが強化され、創造的で魅力的な活動をデザインする力を学んだ。 ・ASEAN諸国及び日本の参加青年がフィリピン文化に興味を示してくれたことは非常に励みになり、文化交流が異なるコミュニティ間の理解と強いつながりを築く役割への認識を深めるきっかけとなった。

セミナーID	セミナーの題名	主催者*	セミナーの目標	主催者の学び
S38	セカンドチャンスコーナー	T12, T01, T08, T11, T14	・ファストファッションに関する意識向上と教育 ・繊維廃棄物の管理方法の紹介 ・「クローズスワップイベント」を通じ、服を新たに買うのではなく交換するという新たな方法の提案 ・布によったケア方法を教え、服を長持ちさせる方法の共有 ・持続可能なファッション、SDGs、消費パターンについての教育	・ASEAN諸国及び日本における繊維廃棄物の状況について学んだ。 ・自分たちの経験や廃棄物管理のケーススタディを共有し合う貴重な機会となった。 ・スキル面では、持続可能性に関連する新しいアイズプレイクの方法を学んだ。このゲームは帰国後、他の若者にも共有する予定。 ・組織運営スキルやチームビルディングスキルが強化され、共通項を見つけながら協力する方法を学んだ。

(6) ソリダリティー・グループ(SG)活動

SG活動は、PY相互の理解と友情を深めることを目的とした活動であり、主にSG対抗や全員参加形式のレクリエーションを行った。この活動の運営は、担当顧問であるNL3名(カンボジア、ラオス、フィリピン)の指導の下、SG活動小委員会が行った。

SG活動小委員会は、SG内の団結力や連帯感を高めると同時に、活動を通してPYが心身ともにリフレッシュできるよう多彩な企画を立てた。こうしたSG活動を通して、SG内の結束だけでなくPY全体の一体感も高められた。

<SG活動の日程・内容>

SG活動Ⅰ(11月12日)

- ・チームビルディング

SG活動Ⅱ(11月20日)

- ・SG対抗スポーツイベント

大縄跳び

綱引き

ダックレース

レッドフラッグス(ビーチフラッグスのようなゲーム)

2人3脚

ジェスチャーゲーム／チアー合戦

SG活動Ⅲ(11月30日)

- ・各国の子供時代の遊び体験(11か国のゲーム)

(7) ナショナル・プレゼンテーション(NP)

ナショナル・プレゼンテーション(NP)は、PYが音楽・舞踊・劇・説明・ビデオ等を用いて、自国の文化・伝統・歴史・国民性・現在の青年を取り巻く環境等を紹介することにより、参加各国についての理解を深めること等を目的としている。

準備に当たっては、他の船内活動に支障をきたさないように配慮した。企画・準備から司会進行、パフォーマンス、音響・照明、ステージの飾りつけに至るまで、全てPYが役割を分担して行った。PYたちは、各国の文化の差異を再認識するとともに日本と東南アジア文化圏の中の多様性や類似性について実感した。

また、各国NPが行われる日の昼食には、各国の食文化に対する理解を促進することを目的として、当該国の代表的な料理が二品提供された。

【各国 NP の概要】

日本	テーマ「日の出」 私たちのメインメッセージは、「これからどんな困難が訪れても、全員で楽しく乗り越えよう」というものだ。このメッセージにした理由は、SSEAYP48回がコロナ後最初の船内プログラムのあるSSEAYPだからだ。主人公(のび太)は歴史旅行を通して、困難を乗り越えてきた日本の強さを学ぶ。これは観客に届けたかったものでもある。本NPは日本の歴史的な側面を伝えるものであると同時に、人々の心を前向きにする物語でもある。 まず、オープニングとして書道パフォーマンスを披露した。次に、物語はコロナ禍から始まり、過去に遡る。そして、「日本の誕生」から歴史旅行が始まり、「米作りの時代」「貴族文化の時代」「戦いの時代」「近代国家への一步」「そして今、未来へ」「フィナーレ」と続く。
----	--

ベトナム	テーマ「シャイニング・ベトナム」 伝統的な文化的価値観、現代生活のリズム、情熱的な民族精神に加え、VPY48の才能と誇りを持ち、国としての輝きを表現した。VPY48は、伝統的な要素と現代的な要素を融合させたダンス、歌、楽器を使った演奏など、様々なパフォーマンスを披露した。全てのパフォーマンスに共通するのは、伝統的な民族音楽に革新的で現代的なアレンジを加え、活気に満ちた輝かしいベトナムのイメージを表現していることである。 ベトナムの現代的なイメージを表現したいという思いから、今年、VPY48は以下のパフォーマンスを披露した。 1. シークレット・ガーデン（秘密の花園）：ヴァイオリンのソウルフルな演奏でシークレット・ガーデンの静謐でエモーショナルなエッセンスを表現 2. シンチャオ、シンチャオ：ベトナム人の出会いと挨拶の喜びを祝う陽気で活気に満ちた曲 3. コ・ラ：伝統的な曲、「コ・ラ」にラップの要素を加え、現代的にアレンジした曲 4. ザム・ハノイ：ハノイの伝統音楽「ザム」へのノスタルジックなオマージュ 5. トロン・コム：ベトナムの古典的な民謡「トロン・コム」に遊び心とエネルギーなリズムを加えてアレンジした曲 6. マッシュアップ パウ・ホック・ダウ・ティエンとエム・イエン・トゥリオン・エム：学生時代を懐かしみ、学ぶ喜びを表現したハートフルなアコースティック・メドレー 7. シーティン（リミックス）：ベトナムのポップスとエレクトロニック・ダンスビートが融合した、活気に満ちたアップビートなリミックス 8. セー・チュエン・タン：力強く感動的な演奏による、決意と勝利を表現する賛歌 9. シャイニング・ベトナム：VPY48の誇りと可能性を強調した、活気に満ちた高揚感のある曲 10. ラン・ロ・ベトナム：ベトナム人の高い精神性と団結力を表現した壮大で祝祭的な賛歌
インドネシア	テーマ「ヌサンタラの目覚め」 インドネシアのナショナル・プレゼンテーションは、ブディという登場人物が、人生の意味を見出すために偶然時間をさかのぼるという物語から始まる。ブディは過去で目の当たりにした伝統舞踊や歌の一つ一つに意味を見出す。そして近い将来、国のリーダーになる若年世代の一人として、インドネシアの活力ある伝統を維持し祝う役割があることを認識する。 人生の新時代を迎え、ブディが得た気づきはインドネシアがまさに目覚める時であることと関連している。インドネシアの新たな始まりの象徴である新首都「イブ・コタ・ヌサンタラ（IKN）」は、近代化と伝統の両方を兼ね備えている。進歩のために変化しながらも、過去の教訓や道徳を受け継ぐ青年のインスピレーションとなる。 ナショナル・プレゼンテーションは3つの部分で構成されている。第1部は、ブディが過去に戻りインドネシアの伝統を目の当たりにしたこと、彼が必要としていたものを得たことを描いている。第2部は、ブディがインドネシアの誇りある青年として伝統を守り祝っていた過去を認識したことを描いている。第3部は、ブディの経験とインドネシアでまさに起きんとしている目覚め、つまりインドネシアの新首都設立を関連付けている。新首都には過去と未来の懸け橋としての役割があり、インドネシア青年としてのブディの役割と関連している。
ブルネイ	テーマ「私たちの無限性」 海流とともに時が揺れ、森が忘れ去られた秘密をささやく、偶然の水上村の中心に、ある愛が息づいている。運命や闇と戦いながら、幾星霜を耐え抜いてきた愛。しかし、過去が本当に消えることはない。私たちは、働き者の漁師「アワン・サトリア」と、陽気なバディアン（船で品物を売る人）の「ダン・ケスマ」の物語を追う。そして、多くの秘密を持つ長老で、自身も愛を失った「トゥア・ジャティ」。 影では悪党が狩りをする-破壊によって黒く染まった心。愛によって、時間のように、無限に。これは、新たに生まれながらも、常に大きな闇の力に脅かされている愛の物語である。 劇中では、ブルネイの伝統的、古典的、現代的なダンス、音楽、武術、歌を披露した。
カンボジア	テーマ「繰り広げられるカンボジア」 このNPはロイヤルバレエ、ラボカトルファイト（カンボジアの武道）ラーマーヤナーク物語、伝統儀礼（サン克蘭タ/クメール正月）シャドウダンス、アンコールワットの春分の日などカンボジアの独自性や世界的な文化遺産として知られる魅力的なポイントにスポットを当て、カンボジア王国を紹介、宣伝することを目的とした。 1. オープニング カンボジアの固有の伝統、文化、歴史、国民性、クメール舞踊の近代化など、様々な側面から紹介し解説を加えた。 2. パフォーマンス 1. 紹介動画：カンボジア代表団の紹介 2. イケ ホルム ロン：カンボジアの伝統芸能 3. ポーン ナリー ダンス：世界遺産に登録されているロイヤルバレエを象徴するカンボジアの古典舞踊 4. ラボカトルファイティング：世界遺産に登録されているカンボジアの武術 5. ココナツ シェル ダンス：カンボジアの伝統芸能 6. 伝統儀式（サン克蘭タ/クメール正月）、伝統的なゲームやダンス（トロットダンス） 7. 現代バージョン キャンドル・ダンス：注目の観光地で世界文化遺産であるアンコールワットの春分の日を紹介 8. カンボジアの歓迎パフォーマンス：観光の紹介とプロモーション 9. 48回生の歌：夢に取り組むカンボジアの若者の熱意を強調 3. クロージング NPの最後にはフラッシュモップで、SSEAYPで長年親しまれているカンボジアの有名なポップソング「Philab」の曲をながした。

ラオス	テーマ「母国」 ラオス人民民主共和国は、ラオスの叡智から生まれた世界遺産をケアンやナガをモチーフにした織物の音として届けたいと考えている。ラオスの北部から南部にかけての生活様式、生き方、文化、物語を、舞台劇、ラオスの伝統的な民族音楽、舞踊を通して共有した。新しい世代である全ての青年に、ラオスの文化や伝統についてより深く知ってもらい、理解してもらった。また、VTRを通して、ラオスの自然の美しさ、ラオスの人々が家庭で使う布を作る場所、ラオスの人々の知恵によって世界遺産となった古着を作る知恵を紹介した。ラオスの北部から南部まで、伝統的な食材を使ったユニークな料理や、新しい世代が知っている作り方など、ラオスのすべての世代が、意義深く神聖な生活様式を語り継ぐことができるような、世代を超えて残る独自の歴史や文化を保存することに、私たちは意欲と誇りを持っていることを示したいと思った。
マレーシア	テーマ「多様性のるつぼ」 マレーシア全土に広がるマレーシア文化に焦点を当て、主要民族の文化舞踊、ロダット／ウェルカムダンス（マレー系）、ジョゲット（マレー系）、ファンダンス（中国系）、コラタム（インド系）の3つから始まり、合計11のダンスを披露した。 2つ目のダンス・セットでは、ダトゥン・ジュルド（サラワク州）とスマザウ（サバ州）というマレーシア西部のダンスを紹介した。オラン・アシル・コミュニティのセワン・ダンスや、クランタン・コミュニティの伝統的な月風遊びにインスパイアされたワウ・ブランも披露した。 終盤には、ディキール・バラット・フュージョンとマレーシア・トゥルーリー・アジアのグループ・パフォーマンスに焦点を当てたスペシャル・セットが紹介された。プレゼンテーションの最後は、ジョゲット・ランバックの伝統舞踊で幕を閉じた。
フィリピン	テーマ「フィリピンを愛そう」 フィリピンのナショナル・プレゼンテーションは、Hiraya（チーム名）のオリジナルダンスナンバーで幕を開け、フィリピンの若年層に関わる諸問題に関するビデオ上映、そして国民的な歌であるO Bayan Koの歌唱が続いた。 その後、フィリピン参加青年の願いや夢を語るビデオの上映があり、Mangarap Kaの歌唱があった。フィリピン各地への航海を通してフィリピンを好きになってほしい、というフィリピン参加青年の究極な夢を示す、ルソン、ヴィサヤ、ミンダナオの各地域のパフォーマンスがなされた。 最後にはコンティンジェントのビデオの上映があり、各国参加青年や管理部門、ナショナル・リーダー、船のクルーも加わったダンスSayawで幕を閉じた。
シンガポール	テーマ「シンガポールの多文化的なアイデンティティと歴史」 I. オープニング 物語は、伝統的なマレー村での生活を探求するところから始まり、コミュニティ精神を称賛しつつ、中国人とインディアン移民がもたらしたユニークな習慣や祭りの到来を描いている。そして最終的には、文化的統一を鮮やかに表現した。 祖母の孫が、当時の話を聞かせてほしいと促す。物語は祖母が経験した困難の時代へと移り、若いマレーの少女が送った希望のメッセージがコミュニティを再建する力となり、世代を超えて受け継がれる希望と強さの象徴となった話が、この作品（NP）で鮮やかに描かれる。 II. パフォーマンス 孫の旅は続き、シンガポールを探索する中で一人の観光客と出会う。彼は彼女をシンガポールの象徴的な名所へ案内し、地元の食文化を紹介しながら、二人で親しみと友情を育んでいく。また、このNPでは、歌やダンス、パフォーマンスを通じてシンガポールの豊かな文化遺産を称えつつ、多様性によるシンガポール独自の強さと、シンガポールのアイデンティティを形作る共同体精神を強調している。
タイ	テーマ「タイ・タイム～伝統と夢をめぐる旅～」 タイの豊かな文化遺産を讃えると同時に、現代社会に生きる私たちのアイデンティティや夢をテーマにしたパフォーマンス。物語は、伝統的なタイ舞踊の家系に生まれた一人の少女が、自分の夢と家族の期待の間で葛藤しながら、自身の居場所を探す旅に出る姿を描いている。その中で、彼女は時間や伝統、そして自己発見という深いテーマに向き合っていく。 この作品では、伝統的なタイ舞踊と現代的な演出を融合させ、視覚的にも感情的にも見ている人たちの心に響くステージを目指した。過去と現在をつなぐ架け橋として、伝統舞踊と現代のダンススタイルが共存する演出が特徴で、若者が抱える社会的な問題や夢への葛藤を描いたシーンを通じて、観客の心を動かす内容である。 このパフォーマンスは、見ている人たち自身がそれぞれのルーツや文化の大切さを振り返りながら、夢を追い求める勇気について考えられるきっかけとなるだろう。タイの文化がもつ美しさと時代を超えた普遍的な価値を感じてもらえる、感動的な舞台である。



ナショナル・プレゼンテーション(日本)



ナショナル・プレゼンテーション(インドネシア)

(8) 自主活動 (VA)

自主活動 (VA) は、PY個人又は数名のグループにより、自らが行いたいと思う活動を自由に企画し、参加者を募り、実践する活動である。これによりPYは自らの考えや思いを発信、企画、実践する力を養うことができ、国やSG、DGの枠を超えて活発に交流することができた。

<自主活動の例>

- ・ 映画鑑賞会
- ・ ベトナムダンスパーティ
- ・ ディーパバリ (バリの伝統文化に触れる)
- ・ ベトナム講座
- ・ ベトナムカフェ
- ・ プロムナイト
- ・ ヌードルパーティ
- ・ 日本ナイト (日本の文化紹介)
- ・ カラオケナイト
- ・ 中国ナイト (中国の文化紹介)
- ・ キラーゲーム (推理ゲーム)
- ・ チャンパーピン (ラオスの国の花であるチャンパーをモチーフにしたブローチを作成)
- ・ SSEAYPタレント・ショー
- ・ 世界教会礼拝ナイト
- ・ トリビアナイト
- ・ ミス&ミスター「アボン・ラーオ」コンテスト
- ・ ベトナムとインドネシア
- ・ ブルネイの伝統ダンスクラス

(9) 訪問国活動振り返り

訪問国における活動や経験を振り返り、SGごとに共有した。活動や経験を他のメンバーに伝え、コメントをもらうこと等を通じて、一人ひとりの経験等を異なる観点から見直すことができた。

(10) フリーデー

船内及び訪問国で密度の濃い活動をこなす中、PYの体調管理のため、公式な活動を行わない半日フリーデーを4回設けた。また、フリーデーは、PYが自発的に自由に参加者同士の交流を深める機会でもあった。フリーデーとした日はモーニングコールやモーニングエクササイズは行わず、モーニング・アセンブリーは通常よりも時間を遅らせ、12時から12時30分の間に行った。

(11) その他の活動

① 避難訓練 (11月7日)

ドルフィンホールでにつぼん丸乗組員から説明を受けた後、各自室に戻り、船内放送と非常ベルを合図に、各自救命胴衣を着用し、指定の避難場所に迅速に集合し、担当の乗組員から緊急事態発生時の対応方法について説明を受けた。

② 管理官講話 (11月9日)

藤森俊輔管理官がPYに講話を行った。自身の経歴や、第48回「東南アジア青年の船」事業を実施するにあたり、どのような準備を行ってきたのか等について述べた。

③ 船長講話 (11月9日)

につぼん丸の内田船長が船の設備や航海に必要な専門知識について説明し、PYの船及び航海に対する認識を高めた。

④ 船内見学 (11月29日)

SGごとに、操舵室を見学し、備えられている機器やその操作方法等について乗組員から説明を受けた。

5 下船

12月6日、地方プログラムの行き先別に、順次2階に集合した後、それぞれバスで東京駅、羽田空港に向かい下船した。



第5章

ベトナムにおける活動

訪問国における活動は、訪問国の政府及び受入委員会が計画し、実施した。受入委員会には、各国の事後活動組織のメンバーも含まれており、訪問国活動の実施に当たり既参加青年が中心的な役割を担った。

東京港を出航し、最初の訪問地ホーチミン市（ベトナム）

に寄港した。寄港中、参加青年は、歓迎式やホーチミン像への献花式のほか、ナショナル・リーダーはホーチミン市人民委員長を表敬訪問した。また、各ディスカッションテーマに関連した複数の大学におけるワークショップ等に参加したほか、一般家庭でのホームステイを体験した。

1

活動日程

月日	時間	活動内容
11月14日 (木)	7:30-8:00	ベトナム国旗掲揚式（於 ドルフィンホール）
	9:30	入港（ホーチミン市、タンカン・ヒエップフオック港）
	10:20-12:00	ベトナムにおける活動についての受入委員会によるブリーフィング（対COC）
	13:00-14:00	受入委員会によるオリエンテーション（対PY、於 ドルフィンホール）
	14:00-16:00	到着歓迎式（於 タンカン・ヒエップフオック港） • PYによるフラッグ・チアー • Ms. Nguyen Pham Duy Trang ホーチミン共産青年同盟中央委員会書記挨拶 • 藤森俊輔管理官挨拶 • PY代表カンボジアYL挨拶
	17:00-17:30	ホーチミン大統領記念像への献花式（於 グエンフエ通り） • PY代表ベトナムAYL、日本AYLによる献花
	17:45-18:30	統一会堂見学
	18:30-20:30	歓迎夕食会（於 統一会堂） • Mr. Vo Van Hoan ホーチミン市人民委員会副主席挨拶
11月15日 (金)	20:30-21:30	二階建てバスに乗車して市内周遊
	7:00-7:30	ホームステイ説明（対PY、於 ドルフィンホール）
	7:30-12:00	課題別視察（DG別） DG1：ホーチミン市人文社会科学大学 DG2：ホーチミン市経済大学 DG3：トンデュックタン大学 DG4：ホーチミン市工科大学 DG5：ホーチミン市医科薬科大学 DG6：ホーチミン市情報教育大学
	14:00-15:30	ホームステイ・マッチング
	18:00-20:00	＜管理官、NL＞ Mr. Ngo Minh Hai ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記主催夕食会 • Mr. Ngo Minh Haiホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記挨拶 • 藤森俊輔管理官挨拶 • 記念品交換
11月16日 (土)		＜PY＞ ～終日ホームステイ～
	8:00-9:00	＜管理官、NL＞ ホーチミン市人民委員長表敬訪問（於 ホーチミン市人民委員会庁舎） • Mr. Phan Van Maiホーチミン市人民委員長挨拶 • 藤森俊輔管理官挨拶 • 記念品交換
	18:00-21:00	既参加青年のつどい（於 ドルフィンホール及びダイニングルーム）

月日	時間	活動内容
11月17日 (日)	11:30-13:30 14:00-15:00 15:30-16:30 17:00	PYホームステイから帰着 船内公開 出航式（於 タンカン・ヒエップフォック港） ・ Mr. Ngo Minh Hai ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記挨拶 ・ PY代表日本AYL挨拶 ・ PY代表インドネシアYL挨拶 出航

2 歓迎式典

11月14日14時から、タンカン・ヒエップフォック港において、歓迎式典を行った。

歓迎式典では、国ごとにフラッグ・チアー（手旗を使ったチアー）を行いながら下船した後、各国NLとPYはベトナムからのパフォーマンスで、温かい歓迎を受けた。

その後、Ms. Nguyen Pham Duy Trang ホーチミン共産青年同盟中央委員会書記から歓迎の挨拶があり、続いて、藤森俊輔管理官が挨拶をした。その後、PYを代表してカンボジアYLが挨拶した。



カンボジア・ユース・リーダーによる挨拶

3 献花式・歓迎夕食会

11月14日17時から、ホーチミン大統領記念像への献花式を行った。PYを代表してベトナムAYLと日本AYLが献花し、これに続き、藤森俊輔管理官が拝礼を行った。

その後、統一会堂に移動し、統一会堂の見学を行った後、歓迎夕食会が行われた。

歓迎夕食会では、Mr. Vo Van Hoan ホーチミン市人民委員会副主席が挨拶した。



歓迎夕食会にて、Mr. Vo Van Hoan ホーチミン市人民委員会副主席挨拶

	視察先	参照※
DG1	ホーチミン市人文社会科学大学	76ページ
DG2	ホーチミン市経済大学	80ページ
DG3	トンデュックタン大学	84ページ
DG4	ホーチミン市工科大学	89ページ
DG5	ホーチミン市医科薬科大学	93ページ
DG6	ホーチミン市情報教育大学	98ページ

※第7章ディスカッション活動・各グループのレポート参照



ホーチミン市人文社会科学大学
(DG1ソフト・パワーと青年の民間外交グループ)



ホーチミン市経済大学
(DG2経済成長と持続可能な社会グループ)



トンデュックタン大学
(DG3地球環境と気候変動グループ)



ホーチミン市工科大学
(DG4防災と復興グループ)



ホーチミン市医科薬科大学
(DG5健康とウェルビーインググループ)



ホーチミン市情報教育大学
(DG6デジタル社会グループ)

5 ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記主催夕食会

11月15日18時から、Mr. Ngo Minh Hai ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記主催の夕食会が開催され、藤森俊輔管理官と各国NLが出席した。

始めにMr. Ngo Minh Hai ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記から挨拶があり、続いて、藤森管理官が挨拶をした。その後、記念品の交換を行った。



6 ホーチミン市人民委員長表敬訪問

11月16日8時から、藤森俊輔管理官と各国NLが、ホーチミン市人民委員会庁舎にて、Mr. Phan Van Mai ホーチミン市人民委員長への表敬訪問を行った。

始めに、Mr. Phan Van Mai ホーチミン市人民委員長から挨拶があり、同人民委員長自身の既参加青年として思い出についての言及があった（第29回「東南アジア青年の船」事業）。続いて、藤森管理官が挨拶をするとともに、同人民委員長が参加した当時の事業報告書の写しを手交した。その後、藤森管理官、各国NLと懇談し、記念品の交換を行った。



7 船内公開・出航式

11月17日14時から、ベトナムからの出航に先立って、ホストファミリーや課題別視察先の関係者などを対象として、にっぽん丸の船内公開を行った。

その後、15時30分から、タンカン・ヒエップフォック

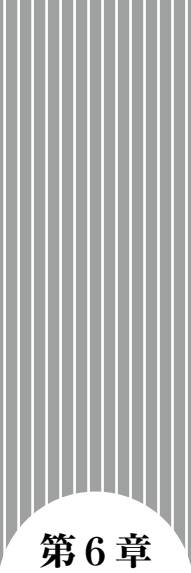
港にて、ベトナム受入委員会や招待関係者列席の下、出航式を行った。出航式終了後の17時、にっぽん丸はインドネシアに向けて出航した。



Mr. Ngo Minh Hai ホーチミン共産青年同盟ホーチミン市常任委員会書記挨拶



ベトナムからの出航

A decorative graphic consisting of a series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect. At the base of these lines, a white semi-circle is positioned, which serves as a background for the chapter title.

第6章

インドネシアにおける活動

ホーチミン市(ベトナム)を出航して、次の訪問地ジャカルタ(インドネシア)に寄港した。寄港中、参加青年は、インドネシア青年スポーツ省やASEAN事務局を表敬訪

問した。また、各ディスカッションテーマに関連した政府機関や企業等を訪問したほか、一般家庭でのホームステイを体験した。

1 活動日程

月日	時間	活動内容
11月21日 (木)	7:30-8:00	インドネシア国旗掲揚式(於 ドルフィンホール)
	9:00	入港(インドネシア・タンジュンプリオク港)
	9:30-11:00	インドネシアにおける活動についての受入委員会によるブリーフィング(対COC)
	11:00-11:20	受入れ委員会によるオリエンテーション(対PY、於 ドルフィンホール)
	11:00-12:00	記者会見(於 ラウンジ「海」)
	13:00-13:45	到着歓迎式(於 ドルフィンホール) ・ Mr. Esa Sukmawijaya 青年スポーツ省青年国際交流担当補佐官挨拶 ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ PY代表ラオスYL挨拶
	16:30-17:30	青年スポーツ省副大臣表敬訪問(於 青年スポーツ省) ・ Mr. Taufik Hidayat 青年スポーツ省副大臣挨拶 ・ 記念品交換
	19:00-21:30	歓迎夕食会(於 Travel Heritage Hotel) ・ Ms. Suharini Eliawati, M. Si. ジャカルタ特別区地域長官代行挨拶 ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ 記念品交換 ・ 受入委員会によるパフォーマンス ・ PYによるパフォーマンス
11月22日 (金)	10:00-11:45	ASEAN事務局表敬訪問 ・ 藤森俊輔管理官挨拶 ・ Mr. LEE Yoong Yoong ASEAN事務局地域社会部長講義
	11:45-13:00	<ムスリムPY> 金曜礼拝
	13:00-17:00	課題別視察 DG1: インドネシア銀行 DG2: GoTo Group DG3: インドネシア環境フォーラム (WALHI) DG4: ASEAN防災人道支援調整(AHA) センター DG5: Menjadi Manusia DG6: Traveloka (オンライン旅行会社)
11月23日 (日)	8:30-9:00	受入委員会によるホームステイ説明(対PY、於 ドルフィンホール)
	11:00-13:00	ホームステイ・マッチング ・ パフォーマンス
11月24日 (日)		<PY> ～終日ホームステイ～
	18:00-21:00	<管理官、NL> 既参加青年のつどい(於 ドルフィンホール及びダイニングルーム)

月日	時間	活動内容
11月25日 (月)	11:30-12:30	PYホームステイから帰着
	13:30-14:30	船内公開
	15:00-16:30	出航式(於 タンジュンプリオク港) • PYによるフラッグ・チアー • Mr. Ario Bimo Nandito Ariotedjo 青年スポーツ大臣挨拶 • PY代表日本YL挨拶 • PY代表ベトナムAYL挨拶
	17:00	出航

2 共同記者会見・歓迎式典

11月21日11時から、ラウンジ「海」において、共同記者会見を行った。記者会見には、Mr. Esa Sukmawijaya 青年スポーツ省青年国際交流担当補佐官、藤森俊輔管理官、内田幸一船長、インドネシアNL、インドネシアYL、インドネシアAYL、日本YL、日本AYLが参加した。

その後、13時からっぽん丸のドルフィンホールにて、多くの地元青年や関係者に出迎えられ歓迎式典が行われ

た。歓迎式典では、Mr. Esa Sukmawijaya 青年スポーツ省青年国際交流担当補佐官から挨拶があり、続いて、藤森管理官が挨拶を行った。また、PYを代表してラオスYLが挨拶した。



共同記者会見



Mr. Esa Sukmawijaya 青年スポーツ省青年国際交流担当補佐官挨拶

3 青年スポーツ省副大臣表敬訪問

11月21日16時から、青年スポーツ省にてMr. Taufik Hidayat 青年スポーツ省副大臣への表敬訪問を行った。

表敬訪問では、Mr. Taufik Hidayat 青年スポーツ省副大臣から挨拶があり、続いて、Mr. Taufik Hidayat 青年スポーツ省副大臣と藤森俊輔管理官、各国NLが記念品交換を行った。その後、質疑応答があり、最後に記念撮影をした。



4 歓迎夕食会

11月21日19時から、歓迎夕食会が開催された。

歓迎夕食会では、Ms. Ir. Suharini Eliawati, M. Si. ジャカルタ特別区地域長官代行と藤森俊輔管理官が挨拶し、続いて、Ms. Ir. Suharini Eliawati, M. Si. ジャカルタ特別



Ms. Ir. Suharini Eliawati, M. Si. ジャカルタ特別区地域長官代行挨拶

区地域長官代行と藤森管理官、各国NLが記念品交換を行った。

その後、インドネシアの受入委員会側からのパフォーマンス、各国PYのパフォーマンスが行われた。



PYによるパフォーマンス

5 ASEAN事務局への表敬訪問

11月22日10時から、各国NL、PYはASEAN事務局への表敬訪問を行った。

各国NL、PYはASEAN事務局内を見学した後、Mr. LEE Yoong Yoong ASEAN事務局地域社会部長よりASEANの歴史や各加盟国の状況などの講義を受けた。



6 課題別視察

	視察先	参照※
DG1	インドネシア銀行	76ページ
DG2	GoTo Group	81ページ
DG3	インドネシア環境フォーラム (WALHI)	85ページ
DG4	ASEAN防災人道支援調整センター (AHAセンター)	90ページ
DG5	Menjadi Manusia	94ページ
DG6	Traveloka (オンライン旅行会社)	99ページ

※第7章ディスカッション活動・各グループのレポート参照



インドネシア銀行
(DG1 ソフト・パワーと青年の民間外交グループ)



GoTo Group
(DG2 経済成長と持続可能な社会グループ)



インドネシア環境フォーラム (WALHI)
(DG3 地球環境と気候変動グループ)



ASEAN防災人道支援調整センター (AHAセンター)
(DG4 防災と復興グループ)



Menjadi Manusia
(DG5 健康とウェルビーインググループ)



Traveloka (オンライン旅行会社)
(DG6 デジタル社会グループ)

11月25日13時30分から、インドネシアからの出航に先立って、ホストファミリーや課題別視察先の関係者などを対象として、にっぽん丸の船内公開を行った。

その後、15時から、タンジュンプリオク港にて、Mr.

Ario Bimo Nandito Ariotedjo 青年スポーツ大臣出席の下、出航式を行った。出航式終了後の17時、にっぽん丸は日本に向けて出航した。



船内公開にてにっぽん丸を視察するMr. Ario Bimo Nandito Ariotedjo 青年スポーツ大臣



日本・ユース・リーダー挨拶



インドネシアの人々に別れを告げる



インドネシアからの出航

A decorative graphic consisting of a series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect. At the base of these lines, a white semi-circle is positioned, which serves as a background for the chapter number.

第7章

ディスカッション活動

1 ディスカッション活動の概要

(1) 目的

ディスカッション活動は、各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業終了後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせるとともに、参加青年（PY）に具体的な事後活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

(2) テーマ

本年度のディスカッションでは、日ASEAN友好協力に関する共同ビジョン・ステートメント2023実施計画（2023年12月17日）にて各国首脳が合意した事項を基に、6つのディスカッション・テーマを設けた。PYは、ディスカッション・テーマごとに各国ほぼ同数のPYで構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

ディスカッション・テーマ

- DG1 ソフト・パワーと青年の民間外交
- DG2 経済成長と持続可能な社会
- DG3 地球環境と気候変動
- DG4 防災と復興
- DG5 健康とウェルビーイング
- DG6 デジタル社会

(3) 実施方法

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定した。所属DGの決定後には、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各ディスカッション・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施し、日本の事例を学び、各テーマに対する知見を深めた。

船内活動では、各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、各DG及び各国で選出されたPY運営委員がファシリテーターを補佐した。

ベトナム及びインドネシアにおける訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、ディスカッション・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における理解を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。これは、事後活動セッションI（全体会）の中に組み込まれ、各国事後活動組織代表者と協力して実施した。

今年度の成果発表会はディスカッション活動運営委員会によって運営され、各DGがセッションで議論した内容や学びをまとめ、プレゼンテーション方式で発表した。PYは説明を聴くだけでなく、発表内容に関して積極的に質問した。

(4) ファシリテーター

ディスカッション・グループ	氏名	国籍
DG1 ソフト・パワーと青年の民間外交		日本
DG2 経済成長と持続可能な社会		日本
DG3 地球環境と気候変動		メキシコ
DG4 防災と復興		フィリピン
DG5 健康とウェルビーイング		フィリピン
DG6 デジタル社会		インドネシア

(5) プログラムの流れ

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
日本国内活動	11月5日 19:45～21:00	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出)
	11月6日 9:00～16:00	ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション活動	11月10日 10:00～12:45	導入
	11月11日 14:15～17:00	グループ・ディスカッションI
	11月12日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションII
	11月13日10:00～ 12:45	グループ・ディスカッションIII
ベトナム 訪問国活動	11月15日	ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション活動	11月19日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションIV
	11月20日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションV
インドネシア 訪問国活動	11月22日	ディスカッション・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション活動	11月27日 10:00～12:45	ディスカッションプログラム (まとめ、DGレポート、成果発表会準備、自己評価)
	12月1日 10:00～12:45	成果発表会

(1) ソフト・パワーと青年の民間外交グループ

PY: 28名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年が自国の文化や価値観の強みや魅力を発見し、ソフト・パワーで国際社会に貢献する方法について議論する。

b. 期待される成果

- “ソフト・パワー”と“青年の民間外交”の定義や課題を理解し、諸問題に対応する方法を精査する。
- 理想とする成果達成を目指した実生活での実践を通して、“ソフト・パワー”や“青年の民間外交”の概念を体験する。
- 自国や他国の文化の違い、価値観、視点に関する意識を高める。
- 他国や他グループに対する受入れ、理解、戦略を育む。

c. 身につく能力

知識

- “ソフト・パワー”と“青年の民間外交”の概念を理解する。
- 青年が本テーマの概念を利用して変化を発展させることができるかを認識する。
- ASEAN諸国の経済的及び社会的な事情の違いを理解し、重要な問題を認識する。
- 文化による違いがソフト・パワー等の影響を識別する。

スキル

- 文化の違い・価値観に関する評価スキル
- 自己分析スキル
- ディスカッションスキル
- 批判的思考スキル

行動

- 自身の文化を超え、他文化の視点を経験することで理解する能力を身に着ける。
- 他文化の視点を受け入れる容認力の向上

B. 事前課題

課題1

課題図書:

- Soft Power: The Means to Success in World Politics
by Joseph S. Nye, Jr.
- 外務省ウェブサイト (<https://www.mofa.go.jp>)
 - 文化交流の広報文化外交
 - ポップカルチャー外交

c) 日ASEAN友好協力50周年共同ビジョン・ステートメント

- 米国外交人権研究所, “How Can Youth Get Involved in Diplomacy?” (<https://usidhr.org>)
- ASEAN事務局公式ウェブサイト:
 - “ASEAN SG Expects Canada to Invest Education to Promote People to People Connectivity” (<https://asean.org>)
 - “ASEAN ROADMAP 2025 to realize a common higher education space in Southeast Asia” (<https://asean.org>)
- March for Our Lives, (<https://marchforourlives.com>)
- Indonesian Youth Diplomacy, Y20 Indonesia 2022, (<https://www.youtube.com>)
- AMP Global Youth, (<https://www.ampglobalyouth.org>)

課題2

国別課題:

青年外交プログラム(または異文化交流プログラム)を調査、一つ選択し、以下を分析する: 1) 主催組織・団体について、2) ミッションステートメント、3) 目的、4) 目標、5) 活動内容、6) 成果を発表

研究発表時に、なぜ本プログラムを選んだのかを説明すること。

発表時間は5分以内

プレゼンテーション形式はPowerPoint、デジタル映像、またはその他の手法でも構わない。

課題3

個別課題:

1) 「ソフト・パワー」、2) 「青年外交」を自分の言葉で定義(英語300語以内)

C. 活動内容

課題別視察(日本)

施設1: 国会議事堂

活動

国会議事堂での建物視察及び職員による案内及び歴史背景の説明

視察から学んだこと

- 日本の政治制度の設立に関する歴史
- 日本と自国の統治制度の違い

施設2:日本アセアンセンター**活動**

- 「ソフト・パワー」及び「ASEAN諸国と日本のソフト・パワーにおける強み」に関するミニ講義
- チェンジメーカーとして青年が担う役割
- 「ASEAN-日本関係の歴史」に関する情報セッション
- 日本アセアンセンターの活動紹介
- グループ・ディスカッション

視察から学んだこと

- PYは、ASEAN諸国と日本の関係の設立及び歴史背景について学んだ。
- PYは、次世代への期待についての認識を深めた。

ディスカッションの導入**ねらい**

- DG1グループの場づくり・文化を設定する。
- 異文化環境においての表現方法を学ぶ。
- 異文化環境での感性を向上

活動

- ファシリテーター紹介
- DG1グループの場づくりと文化設定
 - 基本ルールの紹介
 - 目標と目的の紹介
- アイスブレイキング活動
“Who am I”シートを利用し自己紹介及びDG1に対する期待を共有
- 運営委員会の選出

成果

- 他のDGメンバーの個々の個性を学び、お互いの理解を深める機会となった。
- “Who am I”シートは、PYが自己紹介をし、異なる文化背景を持つ一方で、共通点も多く見つける助けとなった。
- PYは、多言語・多文化環境において他者に対して配慮及び寛容に接する方法を学んだ。

グループ・ディスカッション I**ねらい**

ソフト・パワーと青年外交の概念の理解を深め、PY各々の視点の違いを共有する。

活動

- 日本課題別視察のディブリーフィング
- グループワークを通じて個別課題を共有。自身の言葉で「ソフト・パワー」と「青年外交」を定義
- ソフト・パワーの例を用いたミニ講義
- 国別課題プレゼンテーション
 - 青年外交に関する調査の国別発表
 - 大きな会場のステージ上で5分間の発表練習を行う

成果

- PYは「ソフト・パワー」と「青年外交」の概念を学んだ。
- PYは、青年外交に関連する多くのプログラム調査結果を探求し、各プログラムによって築かれた草の根運動、共感の促進、国境を越えて文化的理解が深められていることを学んだ。
- 交流、グループ・ディスカッション、プレゼンテーションを通じて、PYは異なる視点を学んだ。

グループ・ディスカッション II**ねらい**

- フレームワークを用いて「文化」の概念と複雑さを学ぶ。
- 自身の文化的価値観から自身のアイデンティティを学び、さらに他者を理解する。

活動

- ミニ講義
文化モデルの紹介 (Geert Hofstede and Edward T. Hall)
 - “文化”の定義
 - “Cultural Onions”
 - “Tip of Iceberg”
- 異文化コミュニケーション&文化と価値観について
 - 異文化アクティビティ: “Visit and Meet people from SSEAYP-land”
 - “Value Lens Sheet”の記入及び共有、グループ・ディスカッション

成果

- アクティビティを通じ、PYは文化の違いによる異なるコミュニケーション方法の存在を学んだ。
- PYは文化の定義と、文化モデルの各概念を学んだ。
- PYは文化概念が社会の規範、信念、習慣とどのように関連しているかについての理解を深めた。

グループ・ディスカッション III**ねらい**

- 異文化環境で自身の表現方法を学ぶ。
- 異文化環境での寛容性を高める。
- 批判的思考能力を育む。
- 分析スキルを身につける。
- 口頭で伝えるコミュニケーションスキルの向上
- 文化的な違いや価値観における洞察能力のスキル向上
- 異なる視点や価値観を受け入れるための寛容性の意識を高める。

活動

- 「ソフト・パワー」と「青年外交」をテーマにした異文化間アクティビティ
- 異文化コミュニケーション上のコミュニケーション・スタイルの紹介
- 文化的観点や視点を通じたケーススタディ分析

d. ベトナム参加青年による異文化オリエンテーション

成果

- PYは、異なる文化的背景の存在を学び、コミュニケーションスタイルが異なることを学んだ。
- アクティビティを通じて、PYは適材適所に異なる姿勢で関わり、適応する方法を学んだ。

課題別視察 (ベトナム)

施設: ホーチミン市人文社会科学大学

活動

- a. ゲストスピーカーによるソフト・パワーに関する講義
- b. ホーチミン市人文社会科学大学の教授による講義及びグループ・ディスカッション

視察から学んだこと

- ベトナムから見たソフト・パワーと外交の視点について
- エスノセントリズム (自文化中心主義) がソフト・パワーに与える影響
- 地元の学生との共同ディスカッションを通じて、PYはソフト・パワーと視点についてより深く理解した。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

- 文化的な違いを理解する
- 若者がソフト・パワーの概念を活用してよりよい社会を促進する方法を理解する

活動

- a. ベトナム課題別視察のディブリーフィング
- b. エスノセントリズムと文化相対主義についてのフォローアップ
- c. 「ソフト・パワーの力」に関するミニ講義
- d. 「ポップカルチャー、サブカルチャー、ソーシャルメディア、伝統、歴史がソフト・パワーと青年外交にどのように影響を与えるか、またそれらの利点と欠点は何か？」についてのディスカッション

成果

- PYは、このトピックについて自分の視点を共有し、長所と短所を分析することができた。
- 施設訪問やホームステイを通して、習慣や価値観の違いを共有することができた。
- PYは、パワーの概念、特に「ソフト・パワー」と「ハード・パワー」の違いを学ぶことができた。

グループ・ディスカッション V

ねらい

- 第二言語でのスピーチスキルを習得
- 第二言語でのプレゼンテーションの準備

活動

- a. グループ・ディスカッションIVから続きディスカッ

ション成果のプレゼンテーション

b. 成果発表会の準備

- c. DG1グループ・ディスカッション全体の振り返り
- d. Kohlのラーニングスタイルに関するフォローアップ
- e. インドネシア参加青年による現地オリエンテーション
- f. 運営委員会メンバーによる成果発表会のオリエンテーション

成果

- PYは、グループ・ディスカッションで議論されたトピックに関する自身の視点をグループに共有できた。
- PYは、「青年外交」を個人及び社会的立場で推進する利点や方法を学んだ。
- Kohlのラーニングスタイルの効果を学んだ。

課題別視察 (インドネシア)

施設: インドネシア銀行

活動

インドネシア銀行が先進的なデジタル中央銀行を目指すビジョンに関する講義

視察から学んだこと

- インドネシアのデジタルバンキングシステム
- インドネシア銀行のGenZに向けたマーケティング

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

- 自身の言葉で学びの成果を定義できる。
- ディスカッションプログラムの参加について自己振り返り
- 事後活動に向けての準備

活動

- a. インドネシアでの課題別視察の報告
- b. ディスカッションプログラムの概要の振り返り
- c. 自己評価
- d. JPYによる事後活動紹介
- e. ディスカッション成果発表の準備
- f. 第二言語でのスピーチのポイント
- g. プレゼンテーション準備

成果

- PYは各ディスカッションプログラムで学んだことを振り返ることができた。
- PYは「ソフト・パワー」と「青年外交」について理解を深めた。

D. 成果発表会

PYたちはDG1セッションで学んだことを全体会セッションのショーケースで共有した。

- 「ソフト・パワー」と「青年外交」の概念、重要性を理解する。
- 「ソフト・パワー」と「青年外交」の原則に基づき、実

実践かつ現実的な演習を通じて学ぶ。

- 異文化コミュニケーションを通じて、自国及び他国における文化の違いや価値観、視点についての理解を深める。
- 異国間やグループ間で効果的に関わるための受容力や思いやりを育み、戦略を構築する。

今後の活動計画

ディスカッションを通じ、PYはソフト・パワーと青年外交が国家間の草の根的な友情を育むための効果的なツールであることを深く理解し、価値を認識した。いくつかの提言を行い、将来の取り組みに向けた個人の目標を明確にした。

青年の力を認識

- 若者がグローバルでポジティブな変化を生み出す鍵であることを認識し、その役割を受け入れる。
- 他者をインスパイアし、変化を促す力を活用する。

ソフト・パワーの活用

- ソフト・パワーを理解し、それを理解促進のツールとして学び続け、実践する。
- 文化交流や共有される価値観を通じて協力関係を築く。

青年外交を通じた草の根的な交流の推進

- 人と人との交流を促進：文化イベント、若者フォーラム、ソーシャルメディア、国際共同プロジェクトなどを通じて交流を深める。
- 若者主導の活動を奨励：共感や理解、国境を越えた協力を推進する若者の取り組みを支援する。

多様性を尊重

- 文化の多様性を認め、価値あるものとして尊重する。
- 小さな違いを乗り越え、共通の目標に向けて協力する。
- 他のPYの生活、文化、環境から学び、相互理解を深める。

E. PYの声

PYたちのコメントは以下のとおり：

「ディスカッション・グループのセッションでは、ソフト・パワーと青年の民間外交について多くのことを学びました。他の国のPYと自国のソフト・パワーや青年の民間外交について意見交換できたことは非常に有益でした。」

「異文化コミュニケーションを通じて文化や価値観について学び、ステレオタイプを持たないことを教えてくれました。」

「ケーススタディは文化が持つ側面について考えさせ、文化的規範が日常的な行動にどのように影響を与えるかを考えるきっかけを与えてくれました。」

「セッションは本当に楽しかった。特にグループ・ディスカッションやプレゼンテーションのようなインタラクティブな要素が楽しかったです。」

「セッションはどれも非常に楽しく、情報豊かでした。DGセッションでは、調査結果を簡潔に発表し、自分の考

えやアイデアを表現する自信を高め、意見の違いにどう対処するかを練習することができました。」

「DGの経験を通して、ポジティブな変化を作り出すという若者のパワーに対する私の信念が強められました。本物の繋がりを通して、世界における協働や理解を促進する私の歩みにおいて、ソフト・パワーを活用していくことの刺激を受けました。」

「私の母国ではソフト・パワーの定義について誤解がありましたが、DG1に参加することで、ソフト・パワーとは他の人やコミュニティに影響を与えるすべてのものだという事に気付きました。そして、各国がどのように自国の魅力と説得力を使って目標を達成するかが課題だと理解しました。」

「DG1のグループ・ディスカッションに参加することで、様々な方法で学びました。知識だけでなく、将来の変革者として自信を持って共有する力を得ることができました。」

F. ファシリテーター所感

"Ship for Southeast Asian Youth" — "The experience of communal life aboard the ship would enable the youth of Asia to learn the true value of friendship and mutual understanding through frank discussions, thereby developing the spirit of mutual trust and cooperation that will sustain the world of tomorrow."

これは1974年1月、当時の日本の田中角栄首相が、シンガポールのリー・クアンユー首相主催の夕食会で述べたスピーチの一節である。

本プログラムの参加は私と青年達にとって忘れることのできないものとなった。1974年にSSEAYPの創設者たちが思い描いた精神と目標を見事に体現した旅であったと確信している。

DG1セッションの最初のオンラインのミーティングから、参加青年達は学問的、知的、感情的に勤勉であることが私の目には明らかだった。ファシリテーターの直感は正しく、彼らは学ぶ意欲に満ち、ディスカッションに大きな情熱を持って参加し、互いに美しい絆を築き上げることができた。

ディスカッションを開始するにあたり、取り組んだことはグループの構造を整え、DG1の文化を作り上げる場づくりだった。彼らは他者を思いやり、共感を示し、必要な時は助けを提供することを約束。スローガンは「誰も取り残さず、助け合いながら支え合うこと」。多くの参加青年が英語を第二言語であることを認識し、SSEAYPのニューノーマルであることを受け入れること。私は彼らに間違いを恐れず、寛容になって理解を示すよう励ました。彼らは本プログラムに参加するためにコンフォートゾーンから一歩踏み出すこと自体が勇気あること、参加青年全員にとって学びの機会であることをリマインドした。

彼らの優しさのお陰で、DG1の青年達は最初から最後までお互いを尊重し合い、グループ内だけでなくDG外でも価値観を体現してくれた。私が望んでいたこと―彼らは私達の価値観のアドボケートとなってくれた。

DGでは、青年はトータル5回に渡るディスカッション、4種のアクティビティ、10回のプレゼンテーションをまとめ上げた。扱ったトピックは幅広く、ソフト・パワー、青年外交、異文化コミュニケーション等をはじめ、日本、ベトナム、インドネシアの寄港地での課題別視察の施設訪問についての振り返りも行った。

青年達のバックグラウンド、年齢、職業が多様であったため、まず扱う用語について共通理解・意識を認識することが重要だった。私は青年達がソフト・パワーと青年外交の定義を完全に理解し、自身の言葉で説明できることを目指した。施設訪問では、多くのゲストスピーカーや講師の方々がDG内で話し合った用語や事例を用いていたこと、また、寄港地訪問前に文化的な理解を高めるための異文化アクティビティを行ったことは彼らに大きな助けとなった。

文化の違いの美しさを実感できた経験と「気づきの体験」を共にした数々の瞬間が我らの絆を強めた。

DG1にて安全な場づくりは非常に大切で、個人的なアイデンティティ事柄に取り組むいくつかのアクティビティの実施ができた。また、文化や価値観が人々の心にどう影響を与え、ソフト・パワーの使い方が国によってどのように異なるか理解を深める機会も設けた。

船酔いと過酷な状況にもかかわらず、青年達のDGへの参加に私は心から感謝している。全員の知恵の成長を見届けることができ、青年達を誇りに思う。各DGで共有した一瞬一瞬、青年それぞれと交わした個別の会話は私の記憶に残ることは間違いない。参加青年達の今後の将来の成功を心から願ってやまない。

最後に、内閣府ににっぽん丸に再び乗船する機会を頂けたことに感謝の意を表します。また、素晴らしいチーム、ファシリテーターの皆に感謝する。彼らは強く、賢く、そしてユーモアもある。彼らと共有した全ての瞬間に感謝している。

(2) 経済成長と持続可能な社会グループ

PY:28名

A. ディスカッショントピック

a. テーマ概要

経済成長の様々な側面と持続可能なコミュニティを築くための新しいアプローチを理解する。参加青年は自分たちのコミュニティの問題を解決するため、様々な形態の持続可能なビジネスモデルを探求する。人間中心設計(human-centered design)に基づいてビジネスモデルキャンパスを作成する。

b. 期待される効果

- 参加青年は、ソーシャルビジネスモデルキャンパスを作成し、持続可能なソーシャルビジネス計画をピッチ形式で発表する。
- デザイン思考を通じて、参加青年はコミュニティの具体的な課題に対処するため、人間中心設計に基づき解決策を開発する。
- 参加青年は、持続可能なプロジェクト計画を立てる上で、コミュニティの声をいかに反映するかを学び、よりインクルーシブなコミュニティデザインを行う。

c. 身につく能力

知識

- 国連の現在の動向とソーシャルビジネスによるコミュニティ開発全般を理解する。
- NPO、NGO、社会事業、マイクロファイナンスなど、持続可能な経済開発の様々なビジネスモデルと、持

続可能な社会を促進する役割について認識を深める。

スキル

- エレベーターピッチを習得することで、ビジネスアイデアを簡潔かつ説得力を持って伝えることに慣れる。
- 実際にビジネスモデルを評価し改善策を考えることで、批判的思考能力を高める。
- デザイン思考とソーシャルビジネスモデルキャンパスを用いて、今後様々なプロジェクトに応用できるようにする。
- チームワークとリーダーシップに欠かせない人間関係で、個人や集団の「強み」を探し、理解し活用する。

行動

- 自分自身の幸福感に焦点を当て、日常の様々な側面で幸せを見つける能力を育む。
- 異文化への理解と感受性を発展させ、多様な環境で効果的に働くための適応能力を高める。

B. 事前課題

参加青年は、自分のコミュニティ(例: 自分の地区や学校/職場)に影響を与える社会的または経済的課題を選び、その影響と現在の取り組み(もしあれば)を調査する。

課題1: 調査結果をまとめた包括的なレポートを作成する(A4 1ページ以内)。

課題2: 選んだ社会問題をパワーポイントや写真を用い

て1～2分のエレベーターピッチの準備をし、その問題の重要性と取り組む必要性を明確にする。(セッションIで発表)

C. 活動内容

課題別視察 (日本)

施設 1: 東京証券取引所

活動

- 東京証券取引所の会場を見学し、以前まで対面で使われていた取引所を見る。
- 東京証券取引所からESG投資やサステナビリティについての講義を受けた。

視察から学んだこと

参加青年は東京証券取引所におけるESG投資や各社の持続可能なプロジェクトなど、現在の持続可能性に関する動向を学んだ。更に、日本はジェンダーギャップ指数が118位と世界から比べて低い中で、東京証券取引所ではジェンダー平等を目標にして、中間管理職の女性の人数を年々増加させていることを学んだ。参加青年は、意識的にそのような取り組みがされていることを知り、日本のジェンダーギャップ指数が低いことに驚いていた。

施設2: KOITTO TERRACE (一般社団法人小岩駅周辺地区エリアマネジメント)

活動

- 高村一明氏による会社紹介とプロジェクトのプレゼンテーションを聞く。
- 小岩駅や商店街、再開発エリアを見学し、地域問題解決のために進行中の新しい開発の状況を視察と共に参加青年は印象に残る物を写真に収める。
- 参加青年が撮影した写真を振り返り、写真を撮った意図を発表、高村氏からの解説を受ける。

視察から学んだこと

- 企業(町の開発)が政府、企業、コミュニティと協力し、支援している利益と持続可能なビジネスモデルを構築していること。
- 成功の鍵となるのは、コミュニティの結束と持続可能な関係である。
- 感情的価値と経済的価値(無形 vs 有形)のバランスを取ることが課題である。

ディスカッション導入

ねらい

自己紹介を通してお互いを知り、安心して意見を交換できる場を作ることで、今後のセッションが活発に進むようにする。また、目標設定を行うことで、参加青年が主体的にプログラムに関わる意識を高めるとともに、学びの方向性を明確にする。さらに、自身の強みや価値観を理解することで、成長の機会を最大限に活かし、自信を

持って取り組めるよう準備を整える。

活動

- 参加青年は東京を出発する前にオンラインの強み診断テストで確認した自分の強みのTOP5とそれに関わるエピソードを共有。
- ポジティブ思考と自己肯定感を育むため、毎日の振り返りとして、3つの良いことを書くことを課題にし、その練習。
- 参加青年は、このDGセッションの目標を設定し、ウェルビーイングの自己評価を行う。

成果

参加青年は個々の強みを含んだ自己認識を高めた上で、プログラムの目標を設定した。それが自信とコースに対するモチベーションへと繋がった。

グループ・ディスカッション I

ねらい

- 多様な意見を交換することで、各々のコミュニティの課題、背景、そこに潜在する機会を発見・理解する。
- 自分たちのコミュニティに共通する課題や違いを認識し、問題解決のために知恵を共有し合う。

活動内容

- 参加青年は事前プログラムの課題であるエレベーターピッチを行い、各自のコミュニティにおける問題、それに対しての解決案を発表した。
- プレゼンテーション後のグループ・ディスカッションを通じて、自分たちのコミュニティが直面している課題の共通点や違いを認識すると同時に、世界のつながりや地域の独自性への気づきを醸成した。

成果

参加青年はエレベーターピッチを通して全体の前で自分の考えを伝える自信を深め、限られた時間で効果的に持論を展開する方法を学んだ。またディスカッションを通じて、地域が抱える課題とその共通点を理解し、新しい解決策を多様な視点で考えることができた。更に、相互理解が深まり、その後に続く議論と集団的な問題解決の基盤ができた。

グループ・ディスカッション II

ねらい

- 社会・経済課題とサプライチェーンの影響について理解を深める。
- 社会の問題に対して様々なビジネスモデルがあること、また人間中心設計の基礎を理解する。

活動

- 一つの例として、ビデオを視聴し、サプライチェーンの課題について議論した。
- NPO、社会企業、クラウドファンディングなど、様々なビジネスモデルを紹介。

- c. 少人数グループのディスカッションで、ビジネスモデルを分析し、各コミュニティの事例を共有し、人間中心設計とデザイン思考について理解を深めた。

成果

このセッションを通じて、参加青年は様々なビジネスモデルとコミュニティ特有の社会的・経済的課題にどのように応用できるかについて学んだ。ディスカッションでは、様々なアプローチがあることを理解し、批判的な思考を持って議論することができた。また、ファシリテーター自身が行うソーシャルビジネスを具体例としてイノベーションモデルを考えるきっかけとなった。更に人間中心設計とデザイン思考のミニレクチャーを通じて、参加青年はコミュニティの課題に創造的にかつ協働的に取り組むための実践的な手法を学んだ。このセッションは、コミュニティへ意味のある変化をもたらすため、集団的な取組として、創造的なアイデアを融合させることの重要性を強調した。

グループ・ディスカッション III

ねらい

1. ソーシャルビジネスモデルキャンパスを理解し、活用できるようにする。
2. 批判的思考を養い、仲間とディスカッションを通して問題解決に向けてアイデアを共有する。
3. コミュニティの課題に対して持続可能で型にはまらない、新たな解決策を考える。

活動

- a. ソーシャルビジネスモデルキャンパスの作成方法を学び、実践として、各チームのテーマの社会課題に対応するためのアイデア出しをした。
- b. 丁度時期が重なっていた、2024年の「おにぎりアクション」キャンペーンに参加し、ソーシャルインパクトを与えるNPOと企業とのハイブリッドモデルを体系的に理解した。

成果

社会課題に対して持続可能な解決としてソーシャルビジネスモデルキャンパスを活用することで、各コミュニティの課題に適した解決方法が得られることを学んだ。グループ内でのディスカッションは、社会起業のダイナミクスや、社会的インパクトと経済的持続可能性のバランスについての批判的な考察を行った。参加青年はハイブリッドビジネスモデルの実例の実践として2024年の「おにぎりアクション」キャンペーンに参加した。このキャンペーンは、企業の社会的責任(CSR)と非営利活動を組み合わせたビジネスモデルであり、段ボールを使ってインスタグラムフレームを作成し、写真撮影を行った。参加青年は自分のSNSアカウントで写真を投稿し、その投稿1件ごとにアジアやアフリカの学校給食への寄付が行われる仕組みに貢献した。この実践的な取り組みにより、

イノベーションとビジネスモデルに関する理論と実践(具体的な社会的インパクト)を結び付けることができた。このセッションを通じて、参加青年は新しい発想を持ちつつも現実的な解決策を考え、社会貢献しながらもビジネスとして確立できるハイブリッド(ビジネス)モデルに対する理解を深めた。

課題別視察(ベトナム)

施設: ホーチミン市経済大学(UEH)

活動

- a. ホーチミン市経済大学の教授による2つの講義: 1つはメコンデルタ地域の発展におけるデジタルアプローチについて。もう1つは持続可能なキャンパスモデルに関して。
- b. 地元の学生とのグループ・ディスカッションを通じて、持続可能なキャンパスまたはコミュニティモデルを設計。
- c. 講義やグループワークで得た学びを合わせ、持続可能な社会(キャンパス)をテーマに発表。

視察から学んだこと

参加青年は、デルタ河口のデジタル開発プロジェクトや持続可能なキャンパスモデルについて学んだ。地元の学生とグループに分かれて議論し、持続可能性に関する課題に対する実践的な解決策を試行錯誤して発表した。このプロセスを通じて、異文化間の学びが深まると同時に、地域社会開発における批判的思考能力が強化された。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

1. 経済トレンドがどのように作られているのか、動画を参考に批判的思考を得る。
2. 各テーマ課題を解決するためのビジネスモデルアイデアを練り、ビジネスコンテストでのピッチ内容を考える。

活動

- a. 経済トレンドがどのように発生し、世界規模の意思決定に影響を与えているか、別の見方でどのようなアプローチができるのかをビデオを通して学んだ。
- b. ディスカッションでは、経済動向が世界にもたらす影響とそれが地域にどのように当てはめることができるかを議論した。また、ビデオの主要なポイントを分析し、持続可能な地域社会の発展に向けたイノベーションとレジリエンスを促進するための方法を模索した。
- c. これまでに取り組んだソーシャルビジネスモデルキャンパスを基に、ビジネスモデルコンテストに向けて、地域のニーズと持続可能な開発に合わせた提案の準備をした。

成果

参加青年は経済動向とそれが地域開発に及ぼす影響についての理解を深めた。更に、批判的に考えることで批判的思考スキルを強化し、イノベーションを踏まえた新しいモデルでのアプローチを模索した。ビジネスモデルコンテストに向けて、ソーシャルビジネスモデルキャンパスを活用した実践的なビジネスプランを練った。この活動を通して、理論と実践を組み合わせ、実現可能で持続的なビジネスモデルプランを熟考した。

グループ・ディスカッション V

ねらい

1. ビジネスモデルコンテストを通して、プレゼンテーションスキルとコミュニケーションスキルを向上させる。
2. 審査員として他のグループのピッチプレゼンテーションに対して建設的なフィードバックをすることで批判的思考を養う。
3. フィードバックを基に、よりよいビジネスモデルアイデアを議論し改善思考を養う。

活動内容

- a. ソーシャルビジネスコンテスト：参加青年は、地域社会の課題に対してイノベーションアプローチを盛り込んだソーシャルビジネスモデル計画を発表した。
- b. 相互評価：審査員として他グループのプレゼンテーションを事前に定められた基準に基づいて採点し、モデルを改善するための建設的なフィードバックを提供した。

成果

ソーシャルビジネスコンテストは、イノベーションを念頭にビジネスアイデアを発表し、他のプレゼンテーションを批判的に分析する良い機会となった。審査員として参加青年は評価能力を養い、発表モデルについて深く考え、改良・提案を踏まえた建設的な批評を行った。相互評価をすることで、多方面から再考することができ、よりよい計画が作られるプロセスを学んだ。プレゼンテーションとフィードバックの双方に積極的に参加することで、コミュニケーションスキル、批判的考察力、自分のアイデアを効果的に表現する方法を学んだ。また、このコンテストのために発表内容を練り上げる過程で仲間同士のサポートが必須であることを体験した。

課題別視察 (インドネシア)

施設: GoTo Group

活動

- a. プログラム責任者のレベッカ・S・アンジェリン氏による、プロジェクトの進展と地域社会との関わり方に関するプレゼンテーションを聞く。
- b. オフィスツアー：休憩室、音楽室、ゲームルームなどの充実した設備を見学した。また、社員がチームや部署を越えて協力し、優勝チームのプロジェクトが実

際に採用されるというビジネスアイデアコンペの様子を視察した。

視察から学んだこと

PYは、GoTo Groupが地域社会の発展にどのように取り組んでいるか、またイノベーションとコラボレーションを重視する企業文化について貴重な学びを得た。この訪問を通じて、会社としてどのようにイノベーションとチームワークを促進し、インパクトのあるプロジェクトを運営しているかを垣間見ることができた。

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

5つのセッションと課題別視察を含めた、プログラム全体を振り返り、学びを整理すること。また、PYからのアンケートを取り、今後のプログラムに繋げる。

活動

- a. すべてのセッションの重要なポイントを振り返り、参加青年からの疑問点・不明点を解消し、挙がったテーマに沿ったディスカッションを実施。
- b. DG運営員会が中心となって、全体発表に向けた準備を行った。

成果

セッションの振り返りを通じて、参加青年は理解を深め、疑問点を解消することができた。ディスカッションを通じて、様々なトピックに対して多角的な視点をもって議論し、課題には正解や間違いがないことを再認識した。

D. 成果発表会

参加青年の代表が、上記に記述したセッション及び課題別視察のまとめと主な学びを発表した。さらに、グループ・ディスカッションや課題別視察での活動をビデオにまとめて放映した。

PYのアクションプラン

各参加青年による具体的なアクションプランの設定はしていないが、コース全体を通じて学んだ方法や視点を各々が自分の地域に戻った後の生活でいかす予定である。重要な点は、繰り返し行ってきた議論や学んだ視点をどのように将来の活動にいかすかである。

E. PYの声

「重要な学びは、物事を様々な視点から見ることです。」
「ファストファッションを通じてグローバルイノベーションや消費主義、経済トレンドの形成、人間中心設計による持続可能なコミュニティ作りについて学びました。」「深堀をするディスカッションや講義、課題別視察を通じて、多様な観点から一つの物事を捉えることができました。視野を広げる機会となり、世界に影響を与える行動を起こす原動力となりました。これらの経験ができてDG2を選んで正解で、後悔はありません。」「Rikaさんのセッショ

ン全てをととても楽しみました。特に現場での経験談に刺激を受けました。セッションは自分の視野を広げさせてくれるもので、多くを学びました。」（以上、PYのコメントより抜粋）

F. ファシリテーター所感

DG2プログラムは、「経済成長と持続可能なコミュニティ」がテーマであり、経済成長と持続可能を同時に考えるチャレンジングな内容であった。「世界青年の船」事業でファシリテーターを務めた経験をいかし、SSEAYP独自の文化に合わせてセッションを構成した。ディスカッションは、多様な背景を持つ参加青年(大学生、政府関係者、NGO職員、デザイナーなどのフリーランス)によって深まり、対話の質を高めることができたと思う。また、それぞれの視点からコミュニティが直面する課題や解決策についてPY同士で貴重な学びを得ることができ良かった。ディスカッションのセッションの回数が増えるにつれ、皆が積極的にディスカッションをリードしたり、グルー

プ内でビジネスプランを作成したりする姿を見て、個々の成長を実感し、微笑ましく感じた。学ぶことに意欲的で、吸収力の高いDG2のメンバーとともに取り組めたことは、非常にやりがいのある経験であった。

さらにDGセッションをよりよいものとするために、他のディスカッション・グループとのコラボレーションの機会を設けることを提案したい。例えばDG2のテーマに密接に関わる「DG3：地球環境と気候変動」や「DG6：デジタル社会」とのコラボレーションセッションを導入することで、各DGとの接点を考え、また他DGの視点を入れた議論が可能になるであろう。DGセッションIII辺りの前半等をこのコラボレーションに充てることで、より深い対話や新たな視点を得て、プログラム全体のインパクトをさらに高めることができると考える。

最後に、このプログラムを企画、運営して下さり、ディスカッション・セッションを円滑に進められるよう、サポートして下さった管理部員の皆様に感謝申し上げたい。

(3) 地球環境と気候変動グループ

PY: 25名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

参加青年 (PY) は、現在の環境状況について理解し、東南アジア各国及び日本における気候変動と生物多様性の問題を認識する。その上で、PYは、開発、都市化、持続可能な社会の構築のバランスをとるために青年がどのように貢献できるか議論する。

b. 期待される成果

- ・ 気候変動の原因と影響を含む気候科学に関する包括的な知識を習得する。
- ・ 現実世界の環境問題に焦点を当てた双方向的なアクティビティとシミュレーションを通じて、問題解決スキルを身につける。
- ・ 地域社会において持続可能な取組を推進及び実施するためのリーダーシップとアドボカシーのスキルを身につける。

c. 身につく能力

知識

- ・ 気候変動とその影響に関する基本的な概念を理解する。
- ・ 温室効果ガスの排出を削減し、環境保全を促進するためのベストプラクティスを分析する。

スキル

- ・ 双方向的な活動を通じて問題解決能力を高める。
- ・ 地域・コミュニティレベルの環境に関する取組に向けた戦略計画を策定する。

行動

- ・ グループプロジェクトやディスカッションで仲間と協力することで、コラボレーションとコミュニケーションスキルを強化する。
- ・ コミュニティ内で持続可能な取組を推進及び実装するためのリーダーシップとアドボカシースキルを構築する。

B. 事前課題

課題:

「気候について探る：地域の環境課題を明らかにする」:

地域社会における特定の環境問題を調査し、記録すること。この事前課題の目的は、PYが地域社会の視点から地球環境と気候変動について考え始める助けとなることである。周囲の特定の環境問題を調査して記録することで、PYは地球規模の気候変動が地域環境にどのように影響するか、また地域の活動が地球規模の解決策にどのように貢献できるかについて理解を深めることが出来る。この双方向的な事前課題は、PYが「気候についての探偵」となり、地域社会における特定の環境問題を調査して理解することを奨励する。それにより、本コースの準備を整え、コース全体を通じて生産的な議論と活動の土台とすることが可能となる。

C. 活動内容

課題別視察(日本)

施設 1: 環境省

活動

環境省地球環境局の檜田美羽氏による地球環境と気候変動に関する基調講演。

視察から学んだこと

環境省からは、気候変動の影響を緩和するために政府機関が行っている取組について学び、地球の限界について取り上げられた。PYと環境省との対話から、PYが気候変動という特定の課題に重要な支援を提供する上で個人の行動を模索することの重要性が明らかになった。

施設 2: 東京都環境公社

活動

- アルフォ株式会社による会社概要のプレゼンテーション
- アルフォ株式会社の会社見学と産業プロセスの説明
- リーテム株式会社の電子廃棄物リサイクルに関するプレゼンテーション
- リーテム株式会社の会社見学と産業プロセスの説明

視察から学んだこと

東京都環境公社から廃棄物管理の業界について深く学び、具体的なケーススタディから循環型経済への新たなアプローチや、廃棄物管理から新たな持続可能なビジネスモデルを生み出す方法を学んだ。

ディスカッション導入

ねらい

プログラム及び参加者同士を紹介する時間をとり、ディスカッションのトピックと目的の概要を説明し、基本ルールと期待することを決める。

活動

- プログラムの概要と目的に関するプレゼンテーションでは、目標、構造、主要テーマなど、プログラムについて概説する。
- 期待することと基本ルールの設定に関するグループ・ディスカッションでは、参加者同士でプログラムに対する期待について話し合い、協力して基本ルールを決定する。
- 質疑応答のセッションでは、各自が抱く可能性のある初期の質問や懸念について対処する。
- セッションで話し合った内容を要約し、次のセッションの概要を説明する。まとめと次のステップの確認

成果

- 参加者同士及びプログラムについての紹介が行われた。
- ディスカッションのトピックと目的の概要を説明した。
- グループでのやり取りと期待についての基本ルールを確立した。

グループ・ディスカッション I

ねらい

気候変動の科学的根拠を探り、気候変動の証拠と影響を世界規模で議論し、気候変動における人間の活動の役割を理解する。

活動

- 気候変動の原因、影響、証拠に関する包括的な理解を提供するための気候変動の科学に関するプレゼンテーション
- 気候変動の影響に関する個人的な観察と経験についてグループ・ディスカッションを行い、各自がどのように気候変動を観察し影響を受けたのかについて共有する。
- 様々な地域における気候変動の影響に関するケーススタディ分析により、各地域での気候変動による影響の実例を通じて理解を深める。
- 気候変動に関する双方向的なアクティビティでは、PYが実践的なワークに参加して理解を深め、意識を高めることができる。「気候ジェンガとジェパディゲームが融合した」このアクティビティでは、様々なセクター（市民、政府関係者、活動家/NGO、企業オーナー）を代表するチームが協力して気候関連の質問に答え、タワーを建設することが目標となる。各チームの目標はタワーを建設して「世界を救う」ことで同じだが、質問への回答を通じてタワーのピースを獲得することで競争する必要もある。このアクティビティは、環境を安定させるための共同の取組を模している。

成果

- 気候変動の科学的根拠を探り、気候変動における証拠、影響、人間の役割についての基礎理解を盤石にした。
- 気候変動の証拠と影響について、世界規模での議論を行った。
- 気候変動における人間の活動の役割を理解した。
- ケーススタディにより、多様な地域的影響が明らかになり、世界的課題と地域的課題の相互関連性が強調された。
- 協力ゲームではチームワークが大事になり、気候変動に対処するために必要な共同の取組について疑似体験となった。

グループ・ディスカッション II

ねらい

気候変動の社会的文化的側面について調べ、様々なコミュニティが気候変動によってどのように影響を受け、それにどのように対応するかを議論し、環境と気候変動の課題の原因と影響を分析する。

活動

- 気候変動が生態系と社会文化的慣習にどのような影響を与えるかについて知るための、気候変動の生態

系と社会文化的影響に関するプレゼンテーション

- b. コミュニティベースの気候適応と対応に関するグループ・ディスカッション
- c. 気候変動の原因、結果、及び可能な解決策に関するワークショップ
- d. 「安全に向けた旅」東南アジアの気候難民シミュレーションは、安全と新たな機会を求める東南アジアの気候難民が直面する課題を25人のPYが理解するのに役立つ、魅力的で感情に訴求する教育的な体験を創出する。
- e. インタラクティブなアクティビティ「エコシステム・アーキテクト」では、実際の東南アジアのバイオーム（森林、湿地、サンゴ礁など）に基づいてエコシステムを作成し、生物多様性の課題に対処し、様々な脅威からエコシステムを保護する方法を戦略的に考える。

成果

- ・ 気候変動の社会的文化的側面を検討した。
- ・ 様々なコミュニティが気候変動の影響を受けており、その対応策について議論した。
- ・ 環境と気候変動の課題の原因と影響を分析した。
- ・ 難民シミュレーションは感情的な共鳴を生み出し、PYが気候難民とその苦難について共感する助けとなった。
- ・ 生態系を構築する活動では、生物多様性の脅威に対する理解を促し、持続可能な保全のための革新的な解決策を模索した。
- ・ 文化的及びコミュニティベースのアプローチが気候適応の取組をどのように強化できるか検討した。

グループ・ディスカッション III

ねらい

意識を高め、気候変動対策を促進する戦略を探り、環境保全のための効果的な戦略を見つけ、温室効果ガスの排出削減の重要性と再生可能エネルギーの役割について議論する。

活動

- a. 気候変動の緩和に向けた戦略に関するプレゼンテーションでは、政策、技術の進歩、コミュニティの取組など、気候変動を和らげるための様々な戦略について説明する。
- b. 共同で気候変動の緩和を行うプロジェクト及び成功事例に関したグループ・ディスカッションでは、共同の取組が効果的な気候変動の緩和にどのようにつながるかを探る。
- c. 気候変動シナリオIに関する双方向的なアクティビティ:「廃棄物管理チャレンジ」では、都市環境における廃棄物管理の複雑さを探り、参加者が創造的かつ協力的に考え、持続可能な解決策に繋げるようにする。
- d. 気候変動シナリオ II に関する双方向的なアクティビ

ティ:「エネルギー対決」シミュレーションでは、再生可能エネルギー源に投資しながら炭素排出量を削減する。

成果

- ・ 意識を喚起し、気候変動対策を促進するための戦略を模索した。
- ・ 環境保全に向けた効果的な戦略を探った。
- ・ 温室効果ガス排出削減の重要性と再生可能エネルギーの役割について議論した。
- ・ 再生可能エネルギーへの投資を優先し、政策上の課題を乗り越える方法を学び、創造的な問題解決の道を見出した。
- ・ 廃棄物管理のアクティビティでは、都市の持続可能性の複雑さを示し、実用的で協力的な解決策に繋げた。
- ・ 小さいが実行可能な変化が大きな影響を与えるという考えを持つに至った。

課題別視察 (ベトナム)

施設: トンデックタン大学

活動

- a. ホーチミン市天然資源環境局水文気象学並びに気候変動部門副部長のグエン・デュイ・ビン (Nguyen Duy Binh) 博士による、2021年から2030年にかけてのホーチミン市における気候変動への対応継続に関するプレゼンテーション
- b. 同大学環境労働安全学部環境科学学科長のトラン・ティ・フオン・クイン (Tran Thi Phuong Quynh) 博士による、地球環境と気候変動に関する東南アジアの現状と解決策に関するプレゼンテーション
- c. 地元の若者との地球環境と気候変動に関するグループ・ディスカッション

視察から学んだこと

- a. 気候変動の緩和に資する重要な戦略を学んだだけでなく、市民、企業、NGO、政府関係者など、あらゆるレベルでの協力の重要性も学んだ。
- b. 地元青年と交流し、ベトナムにおけるその経験を聞き、気候変動の課題を取り巻く新しい視点について学んだ。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

気候変動に対する取組における政策とガバナンスの役割について議論し、気候変動に関する国際協力と協定を検討し、回復力のあるコミュニティを構築し、持続可能な生活習慣をとることの重要性を理解する。

活動

- a. 戦略に影響を与える主要な世界の気候に関する政策、協定、枠組み（パリ協定、京都議定書など）について理解するため、世界の気候に関する政策と協定に関するプレゼンテーションを行う。

- b. リソース管理のための「漁業ゲーム」に基づく回復力のあるコミュニティに向けたクリエイティブデザインに関するワークショップを行う。クラウド研究所のアプローチに触発され、現実世界の漁業に関するプレッシャーをシミュレートし、持続可能性の原則を教え、プレイヤーが当面のニーズと長期的なリソース保護のバランスをとることを奨励するものである。
- c. エコ・リフレクションとレジリエンス・サークルによる適応、自然に根ざしたソリューション、持続可能な慣行に関するディスカッションを行う。気候変動と保護についての感情を探り、環境不安を認識し、それを管理するための個人レベルでの戦略を探る上で役立つ。

成果

- 気候変動への取組における政策とガバナンスの役割について議論した。
- 気候変動に関する国際協力と協定についてリサーチした。
- 回復力のあるコミュニティを構築し、持続可能な生活習慣をとることの重要性について理解した。
- 漁業ゲームでは、当面のニーズと長期的な持続可能性のバランスをとることの重要性が示された。
- レジリエンス・サークルでの考察は、PYが環境面の不安に処し、関与し続けるための個人レベルでの戦略を探るのに役立った。
- 議論では、気候に関する回復力の創出におけるガバナンスと国際協力の重要な役割が強調された。

グループ・ディスカッション V

ねらい

環境問題に対して行動を起こして主張し、世界的な協力及び地域活動の重要性を理解し、地域社会で活動し続けることの重要性について考える機会を提供する。

活動

- a. ネットワークとリソースの構築に関するグループ・ディスカッション：「気候関連の職業のネットワーキングビンゴ」では、楽しく双方向的なビンゴゲームを通じて、気候関連分野における互いのスキル、専門知識、アイデアについて発見する。
- b. レジリエントなコミュニティ、政策立案、気候協定に関するワークショップ：「持続可能な都市構築チャレンジ」では、協力して持続可能な都市を設計及び構築し、現実世界の課題に直面しながら、様々な立場の利益を代表する。目標は、持続可能性と競合する優先事項のバランスをとることである。

成果

- PYは環境問題に対して行動を起こし、提唱する力を得た。
- グローバルな協力とローカルな活動の重要性を理解

した。

- 地域社会で活動し続けることの重要性について考えた。
- ネットワーキング活動により、国境を越えて有意義なつながりを築き、協力するためのツールを身につけた。
- 持続可能な都市に関するチャレンジでは、これまでの学びをすべて結集し、共通の目標に向けて競合する利益について交渉し、革新し、バランスをとるPYの能力が示された。

課題別視察 (インドネシア)

施設: インドネシア環境フォーラム(WALHI)

活動

- a. 環境保全とWALHI研究所の活動に関するプレゼンテーション
- b. 林業と環境保全に関するレセプション及びフォーラム

視察から学んだこと

- a. 森林と環境保全に関する重要かつ新しい事実について学んだ。
- b. 議論を通じて、持続可能なプロジェクトの原則とNGOの参加について学んだ。

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

すべてのディスカッション・セッションの要点と結果をまとめ、ディスカッション・セッションの有効性について評価し、PYから学習体験に関するフィードバックを収集し、今後のプログラムについて改善余地を探る。

活動

- a. 双方向的なアクティビティ「リフレクション・ウェブ」では、全体を通じた経験及び重要なポイントについてグループで話し合い、PYが協力的かつインタラクティブな方法で自らのパフォーマンス、貢献、成長分野を自己評価できるようにする。
- b. PYに評価フォームを提供し、フィードバックする機会を提供する。
- c. 成果発表会のプレゼンテーションの形式と内容に関してグループで話し合う。

成果

- すべてのディスカッション・セッションの要点と結果をまとめた。
- ディスカッションの結果を効果的に伝えるための戦略を練った。
- ディスカッション・セッションの有効性を評価した。
- PYから学習体験に関するフィードバックを収集した。
- プログラムについて、今後、改善すべき領域を特定した。

D. 成果発表会

PYは、ディスカッションの成果発表を無事に行い、そ

の中で議論したトピック及び学んだ内容を聴衆に対して紹介した。気候変動とは何かを「ある場所における気温と気象パターンの長期的な変化」と定義し、非常に明確に説明することができた。続いて、ディスカッション・グループの期待される成果について共有し、気候変動の科学、緩和に向けた戦略、世界レベルでの政策、気候への適応、東南アジア地域の生物多様性と保全、社会的及び文化的課題など、より詳細なトピックを例示した。PYは、シミュレーションゲーム、共同で行うゲーム、創造的な共有セッションに重点を置いた、従来とは異なる魅力的な表現方法について学び、議論した内容を共有することができた。

プレゼンテーションでPYは、化石燃料の燃焼、農業における慣行、森林破壊、温室効果ガスの排出、産業活動と人間活動など、議論した諸原因について言及し、気候変動が起こっている理由を概説した。そして、気候変動による難民などの特定の脆弱なグループに言及し、気候変動の影響を最も受けるのは誰かを学んだ点についても共有した。気候変動に対して行動を起こすべき時は今だと語り、気候変動を緩和し、それに対して適応するにはどうすればよいかという質問にも回答できた。

PYは、課題別視察によって、この課題に立ち向かうために何ができるかについての知識が深まったこと、日本の詳細な国家計画と国際協力について学んだこと、廃棄物がどのように役立つかを目の当たりにできたことなどについて述べた。ベトナムの課題別視察では都市部のコミュニティに対する意識を高めることが最優先事項の1つであることを学び、インドネシアでは、解決策がすでに地域社会に存在することを認識した。

最後に、PYは気候変動の緩和と適応に向けた適切な解決策に取り組むための提案を発表した。個人、青年に対する啓発、国や地域社会のレベルでさらなる行動がとられることについて共有し、最後は、自分たちで考えた鼓舞のメッセージを聴衆に伝えた。「どんなに小さな行動でも、すべての行動が私たちの集団としての回復力に繋がる。」こうした言葉には、PYによる議論の結果が込められていた。

今後の活動計画

- PYは今後、意味のある変化を促進し、気候にまつわる問題に取り組むために、あらゆるレベル（組織、コミュニティ、政府）でのさらなる協力を提唱する。これは、セッションやコンテンツを通じてだけでなく、課題別視察で政府代表者の視点を紹介され、国家間の協力の課題を認識したことに基づく。PYは、持続可能な変化と気候問題への対策を実現するために、国家間の協力と情報交換の必要性を理解した。
- PYは、気候変動について啓発し、備えを行うために「青年の擁護者」としての術をとりたいと考えている。
- 国際的なレベルでは、オンライン共有セッション、ウェ

ビナー、ワークショップに基づくコラボレーションに重点を置き、グリーン・プロジェクトに関心を持つ若いリーダーを結び付けて「グリーン・ネットワーク」を構築したいと考えている。

- PYは、循環型経済を促進し、廃棄物から革新的な製品を作るプロジェクトを推進する必要性を強調した。例としては、カンボジアでの未熟なマンゴーをお茶に変えるプロジェクト、マレーシアでのリサイクルボトルインセンティブマシン、ベトナムでのネットゼロビルなどが挙げられる。
- 最後に、PYは、どんなに小さな行動であっても、あらゆる行動が私たちの集団としての回復力に寄与することを認識している。

E. PYの声

「自分の意見や声が聞き入れられたと感じた。また、気候変動の話題についてさらに学ぶことができた。」- ベトナムPY

「セッションの終わりには、もっと自己認識を深めたい、地球を救うために貢献したいという意欲が湧いた。」- ブルネイPY

「このディスカッション・グループのおかげで、地球環境と気候変動の問題が互いに相互に関連しているかを理解できた。」- シンガポールPY

「グループで最もありがたかったのは、異なるバックグラウンドを持つ私たちが一緒に座って話し合うことができたことだ。そうすることで、自分の視点を伝え、気候関連の問題に対する解決策を見つけることができた。」- マレーシアPY

「このプログラムで学んだことを、日常生活で知識とスキルを応用して、自分の生活、仕事、コミュニティに応用したい。」- フィリピンPY

F. ファシリテーター所感

上記のセッションを終えて、PYは以下のことができるようになった。

- 気候への適応と気候変動の緩和を促進するため、コミュニティに根差した取組を主導する。
- 科学的及び文化的視点を用いて、気候変動対策の緊急性について他者を啓発する。
- 多様な利害関係グループ間で協力し、革新的で持続可能なソリューションを開発する。
- 政策の変更を提唱し、回復力と創造性をもって世界及び地域の気候変動対策に取り組む。

このグループは知識を身につけただけでなく、意味のある変化をもたらす意欲も身につけることができた。PYたちが地域社会やその先にもたらす素晴らしい影響を目にするのを心待ちにしている。

(4)防災と復興グループ

PY:23名

A. ディスカッション・トピック**a. テーマ概要**

PYは、政治、社会、教育などの分野において、青年がどのように防災と災害後の復興に貢献し、その成果を最大化できるかについて議論する。その後、様々な観点から現在の災害を取り巻く状況について話し合い、東南アジア及び日本の課題と機会について認識する。

b. 期待される成果

ディスカッションプログラムの最後には、日本及び東南アジアの参加青年 (PY) は、防災と復興戦略の評価、開発、提案に不可欠なスキルを発揮できるようになる。学習成果の詳細は以下の通り。

- ・ 災害リスクを生み出し、維持するものについての幅広い知識:参加青年は、災害リスクと防災アジェンダを定義する基本的な概念と戦略について幅広い理解を得る。
- ・ 日本及び東南アジアにおける災害リスクプロファイルと防災・減災システム:参加青年は各国の災害リスクプロファイルを評価し理解するための視点を養う。
- ・ 防災及び分野横断的な災害の影響に対する青年の関与: PYは、選択した分野 (健康、教育、家庭) における災害による影響のパターン、ベストプラクティス、課題、及び防災と復興活動に対する青年の関与の機会について話し合い、マッピングする。
- ・ 批判的な思考と発想: PYは与えられた状況に適した防災戦略を評価し、提案する。
- ・ 国際協力とネットワーク構築:参加青年は、防災と復興の取組において永続的な成果を達成するために、協力と有意義なパートナーシップを確立することの重要性を認識し、スキルを習得する。

c. 身につく能力**知識**

- ・ 防災と復興の基本概念 (危険、脆弱性、能力、復興、対応、備えなど)
- ・ 災害リスクの社会的側面 (力関係)
- ・ 日本と東南アジアの災害リスクプロファイル
- ・ 防災と復興における青年の貢献または取組
- ・ 社会的イノベーション (アイデア創出)

スキル

- ・ 批判的思考と分析
- ・ 問題解決
- ・ コミュニケーションとプレゼンテーション
- ・ 積極的な傾聴

行動

- ・ 共感力
- ・ チームワークとコラボレーション
- ・ 時間管理
- ・ 創造性
- ・ リーダーシップ

B. 事前課題**課題1 (国別)**

参加国ごとに、防災における青年の取組について調査する機会が与えられた。取組の範囲が災害発生後の影響に根ざし、リスクの社会的側面を軽減する、防災におけるハザード・パラダイムの観点がすべてのポスターには反映されていた。

課題2 (個人)

課題図書: 現地視察に備えて、PYは推奨文書を読むことが奨励された: コラム第85号: ASEAN防災人道支援調整センター (AHAセンター) リンク:

<https://ahacentre.org/publications/>

シチュエーション・アップデート:

<https://ahacentre.org/situation-updates/>

C. 活動内容**課題別視察 (日本)**

施設: 首都圏外郭放水路

活動

- ・ 地下放水路の仕組みを説明するビデオプレゼンテーション
- ・ 放水路の地図と小型シミュレーションモデルを使用した説明
- ・ 地下放水路の見学

視察から学んだこと

- ・ 適切なガバナンス、防災に向けた資金の適切な配分と支出、政府主導のインフラにより、洪水被害と被害を最大80~90%まで大幅に削減できる。
- ・ マルチステークホルダーアプローチ (連邦、地方、コミュニティ) による説明責任は、被害緩和に関する取組の規模を拡大し、成果を達成するための鍵となる。
- ・ 早期警報システム、特に予測とタイムリーな情報発信は、洪水緩和プロジェクトの要となる。

ディスカッションの導入**ねらい**

- ・ 信頼関係及び友情を築く。
- ・ PYが仲間同士で友情と、建設的な議論、協力関係を

築くことを促す学習空間を提供する。

活動

- ・ 簡単な自己紹介
- ・ スティンキー・フィッシュ・エクササイズ
- ・ ハート・コントラクト

成果

- ・ 秘密のアイテムやぬいぐるみの持ち主を見つけたり、PYについての第一印象を書いたりといった活動を通じて信頼関係を築いた。
- ・ ディスカッション・セッションへの参加レベルに影響を与える恐れのある不安や躊躇について検討し、特定することができた。それらは、(1)防災・減災に関する知識が少ない、または基礎的な知識しかないために、個人またはグループ活動に貢献できないのではないかという不安、(2)英語力が弱い、または基礎的なスキルしかないこと、(3)他のPYからどう見られるかという不安、であった。
- ・ ファシリテーターとPYで、期待値(内容とプロセス)及びグループ内でのルールをマッピングして基準とした。

グループ・ディスカッション I

ねらい

- ・ PYが仲間同士の友情、建設的な議論、協力関係を築くことを促す学習空間を提供する。
- ・ 防災と復興計画の推進における青年の関与についてのベストプラクティス、課題、機会のパターンを特定し、分析することを促す。
- ・ 防災と復興計画の推進に重要な批判的思考、プレゼンテーション、コミュニケーションスキルを刺激し、向上させる。

活動

- ・ 日本と東南アジアにおける防災と復興へ青年が関与することの意味づけ及びパターンを知る。

成果

- ・ 各参加国の事前課題ポスターについての議論に重点が置かれた。議論の結果、ほとんどのPYがハザード・パラダイムの見方を持っていること、つまり、災害の影響のほとんどがハザード(例:暴風雨、地震、洪水)への備えに起因することが明らかになった。
- ・ 参加青年は小グループに分かれ、(1)活動範囲の類似点と相違点、(2)青年の参加における課題についてマッピングした。グループ・ディスカッションのテーマ分析により、(1)すべてのプロジェクトの中心にある青年の利他主義とボランティア精神、(2)防災における第一防衛線としての優れたリーダーシップとガバナンス、(3)日本と東南アジアには安全と規律に関する類似点と相違点がある、(4)防災への青年による参加のための場と対話を生み出す法律と政策の重要性、(5)

日本と東南アジア全域における災害関連イベントに関する多様な慣行が明らかになった。

グループ・ディスカッション II

ねらい

- ・ 防災と復興における意思決定権と利害のパターンを特定し、分析することをPYに促す。
- ・ 防災戦略を策定する上で重要な基本的な社会分析ツールを紹介する。
- ・ 防災と復興の課題を推進する上で重要な批判的思考、プレゼンテーション、コミュニケーション・スキルを刺激し、向上させる。

活動

- ・ マーケットデーゲーム: 力関係のゲーム
- ・ フィッシュボーンテクニク: 災害後の影響の原因と結果を描く。

成果

- ・ マーケットデーゲームを通じて、参加青年たちは、他者の脆弱性につながる社会の力関係の不均衡と、災害リスクを大幅に軽減するための基盤として力関係の共有の重要性和難しさを認識した。
- ・ 社会と災害の影響(医療従事者の不足、学校の閉鎖、レプトスピラ症の症例の増加)を踏まえ、参加青年はフィッシュボーンテクニクを用いて犠牲者を特定した。この演習を通じて、参加青年は差別と社会不安、不十分な統治と政策の不徹底、労働者への不当な賃金と補償、インフラの維持管理の欠如など、災害リスクの社会的側面を特定した。

グループ・ディスカッション III

ねらい

- ・ 防災の社会的側面(権力構造、政治、社会的誘因)に関するPYの理解を強化する。
- ・ 災害の基本的な概念(危険、脆弱性、能力)と戦略(準備、対応、復興)について議論し、理解を深める対話の場を設計する。

活動

- ・ 写真による分析: 防災の基本概念(4グループ)と災害リスクの記録方法の紹介
- ・ 盲点や意識外の内容を理解する(防災と復興はあなたにとって何を意味するだろうか。最も危険にさらされている人々は誰か。なぜ彼らは危険にさらされているのか。防災と復興における主な利害関係者または強力な意思決定者は誰か。その理由は何か)。

成果

- ・ 写真による分析と災害リスクの記録方法は、何が災害リスクを生み出し、それを持続させるのかについて、PYに幅広い視点を提供した。社会政治的及び経済的要因が個人、家庭、コミュニティレベルでのリスク度

合いにどのように影響するかについては特にそうだった。結論として、防災は、特に最もリスクにさらされている人々を含むすべての人々の生活の質を担保するリーダーシップの視点をもたらすものである。

- 続く演習では、PYが防災と復興を(1)あらゆるレベル(個人、家庭、地域社会、政府)にわたる安全と説明責任の文化、(2)持続可能な開発を達成するための鍵としての防災の原則と、誰も取り残されないより良い復興のための指針、(3)人間の活動が災害リスクの一因となっていること、が示された。
- 個人、コミュニティ、政府、国際社会など、防災と復興の主要なステークホルダーをマッピングした。PYは、政府と国際社会が法律、プログラム、ガイドラインを策定し、資金へのアクセスを持っているため、防災分野で最も強力な主要なステークホルダーであることを強調した。
- 最も高いリスクにさらされている存在として、農業従事者、身体障害者、子ども、移民、高齢者、労働者(工場働く人々)、地理的に孤立した地域に住む人々などを見出した。さらに重要なことに、PYは自分たちの脆弱性の持つ社会的側面がどのようなものかも発見した。それは、不十分な政策、基本的なニーズへのアクセスやそれを実現することの難しさ、孤立につながるコミュニティの規範やつながりにおける障壁、人々を危険にさらしたりサービスへのアクセスを困難にする地理的要因などが挙げられる。

課題別視察(ベトナム)

施設: ホーチミン市工科大学

活動

- ソーシャルイノベーションラボへの訪問と質疑応答
- 廃棄物管理イノベーションプロジェクトと経済的持続可能性についての講義
- 地元の大学生との対話

視察から学んだこと

- 広範な研究に基づく解決策は、長期的な廃棄物管理の問題を解決することができるが、結果を達成するには政府の賛同と緊密な協力が必要となる。
- 革新的なソリューションは地域に収入をもたらし、地域経済を振興することができる。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

- 防災と復興計画の評価、開発、推進に関する理解とスキルを実証し、仲間同士の国際協力を促すための基本的な評価及び設計ツールを提供する。
- 防災と復興計画の推進に重要な批判的思考、プレゼンテーション、コミュニケーションスキルを向上させる。

活動

- ステークホルダーのマッピングと分析
- 重要なライフラインとアクセス経路のマッピング

成果

- セッション2における災害の影響シナリオ(洪水による教育の中断、火災による難民テントの焼け落ち、医療従事者の不足、レプトスピラ症患者の増加)を振り返り、防災における権力と関心のレベルごとに主要な関係者をマッピングした。ほとんどのアウトプットで、地元住民または最もリスクの高い人々は防災への関心は高いものの権力は弱いことが示された。対照的に、政府と大企業は権力は強いものの防災と復興への関心は低いと認識した。さらに重要なのは、防災における正式な権力構造が防災関係者間における権力の不均衡を生み出すことである。
- 災害による影響の原因と結果(フィッシュボーンテクニック)とステークホルダーの分析を振り返り、問題のステートメントと、優先して取り組む主なステークホルダー(少なくとも2者)及び被害の緩和戦略を下書きした。ほとんどのPYは、災害の影響や脆弱性の原因を軽減または抑制するために取り組むべき主要なステークホルダーとして政府(保健省、害虫駆除機関、地方自治体など)を挙げた。提案された解決策の一部には、包括的な医療政策、公平で公正な補償と給付、税金の適切な使用、政府資金の拡大(外部スポンサーシップ)、強力な早期警報システムなど、長期的な改革が見られる。

グループ・ディスカッション V

ねらい

- 交渉力と提案力を向上させる。
- 防災と復興の課題を推進する上で重要な、批判的思考、プレゼンテーション、コミュニケーションスキルを向上させる。

活動

- 机上での演習・シミュレーション: 台風及び洪水後のシナリオ

成果

- 災害(カテゴリー4の台風)発生後48時間の影響を振り返り、PYは取り組むべき主要セクター(避難所、教育、保健、工学、市長室、農業)を特定した。また、各セクターの被害とニーズをマッピングし、災害発生後の最初の3か月、早期復旧と復興を含む解決策を提案した。
- PYは、(1)防災には多様な関係者の手立てが必要であるが、限られた予算で大規模な被害や競合するニーズに対処することは難しい、(2)資源配分はロジスティクス、政治的影響、予算、国際関係、災害のリードタイムや規模に大きく依存する、(3)防災計画におけるすべての情報(予算、資金、情報源、施設など)の透明

性が重要である、などについて議論した。

課題別視察（インドネシア）

施設：ASEAN防災人道支援調整センター（AHAセンター）

活動

- AHA センターの任務と主要プログラムに関する概説とビデオプレゼンテーション、及び質疑応答
- 緊急オペレーションセンターへの訪問と質疑応答

視察から学んだこと

- AHA センターは ASEAN を守る機能を持つ一方、国家は国民の生存、参画、育成、保護について一番の責任を負う。
- AHA センターは、情報とリソースの管理、知識、救急の調整機関（戦略、運用、現場）として機能する。この組織は、今後数年間で災害復興プロジェクトを拡大し、支援することを検討している。
- ASEAN-ERAT は、国際連合やその他の国々と提携して、ASEANにおける緊急対応への従事者を訓練する地域的なアカデミーとして機能する。

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

- 基本的なデザイン思考ツール（アイデア創出）とテクニックを紹介する。
- 日本、ベトナム、インドネシアでのディスカッション・セッションと現地訪問から得た重要なポイントをまとめる。
- 個人及びグループのマイルストーンを評価する（うまくいった点と改善が必要な点）。
- ディスカッション・グループの全員に対する締めくくりと感謝の気持ちを伝える。

活動

- 主なポイントのマッピング：ディスカッション・セッション 1 ～ 5 と課題別視察
- ミニ講義：ソーシャルイノベーションの基本原則
- グループ評価：(1) 内容とプロセス、(2) 課題別視察、(3) ファシリテーター、(4) 仲間のPY

成果

- 災害の現実を理解するための第一のレンズとして「共感」の重要性について考えた。
- 小グループに分かれて、交代でディスカッション・セッションと課題別視察から得た重要なポイントをマッピングした。また、ディスカッション・セッションでうまくいった点と改善すべき点をマッピングした。
- チーム全員に感謝と締めくくりのメッセージを伝えた。

D. 成果発表会

プレゼンテーションの内容については、まとめのセッションでの「グループ・リフレクション」の結果に基づく

と強調することが重要である。したがって、成果発表会でこのグループの代表者が共有した内容は、メンバー23人のPY全員の総意であった。プレゼンテーションでは、学習ツール（パワーダイナミクスに関する市場ゲーム、フィッシュボーンテクニク、ステークホルダー分析、災害シナリオなど）、プロセスまたはアクティビティ（グループ・ディスカッション、ビデオプレゼンテーション、対話、ミニ講義）、ディスカッション・セッションと課題別視察から得た主要なポイントが強調された。プレゼンテーションの主な内容は、防災プロセス、ディスカッション・セッションと課題別視察で得た主要なポイント、事後活動の候補という4部から構成された。

プレゼンテーションの冒頭では、防災の原則とプロセスに関するPYの視野を広げるためのディスカッション・グループの設計について詳しく説明した。防災プロセスの構成要素は、評価、分析、意思決定である。PYは、防災の究極の目的として、(1)変革的な参加を促すこと、(2)社会正義を達成することを強調した。次に、(1)脆弱性を生み出し維持する災害リスクの社会的側面、(2)説明責任を果たすべき主体を知ることの重要性、(3)災害における権力の共有と青年の参画の場と機会、(4)防災戦略の設計には多様な利益と権力の調和が必要であることに触れた。3番目のセクションでは、(1)堅牢なインフラと政策を構築するための防災関連資金を調達することの重要性、(2)廃棄物管理などの社会問題を解決するためのプラットフォームとしての社会的イノベーション、(3)減災のためのASEANの協調的取組の重要性について詳しく説明した。そして、PYが個人、コミュニティ、及び国単位の3領域に防災の原則と実践をどのように組み込むかに焦点が当てられた。

最後に、成果発表では、PYの防災と復興に対する理解と認識が広がり、防災の基本原則に対する理解が深まり、災害リスクの根本原因を理解し、防災戦略（復興など）を効果的に推進するスキルが身に付いた。さらに重要な点は、協力によって災害リスクを大幅に軽減し、すべての人にとって質の高い生活を実現できることにある。

今後の活動計画

個人単位

- 得られた知識と概念を復習する。
- 意思決定プロセスに防災の視点と概念を適用する。
- 強い個人レベルでの説明責任を果たす。
- 自国の防災機関やボランティアネットワークをマッピングし、参加する。

国単位

- 自国の青年に対して防災に関するゲームを用いた学習を導入する（例：マーケットゲーム、机上でのシミュレーション）。
- 防災の議論や意思決定の場への積極的な参加を通じて、説明責任をより積極的に行い、促す。

コミュニティ単位

- 複数の利害関係者（または国全体）を主体とした包括的な防災アプローチを提案する。
- 利害関係者との協議に積極的に参加する。

E. PYの声

良かった点（内容、プロセス、ツールの関連性及び適切性）

- フィッシュボーンテクニック、ステークホルダーマッピング、マーケットゲーム、アクセス経路の特定、机上シミュレーションなどのツールは、PYが災害リスクについてより深く理解することと、防災戦略の設計と推進方法を発見する上で役立った。
- 脆弱性パラダイムは、災害リスクには社会の政治的及び経済的側面があるというように、PYの視野を広げた。
- ゲームとエナジャイザーを用いることにより、チームは互いをよりよく知り、協働することに安心感を覚えた。
- 優れたサポートシステムとディスカッション・グループは、自らの意見を表明する上で安全な場所を形作った。

改善の余地がある点

- 課題別視察、災害や防災に関する個人的な経験の共有のための時間と場所を増やす。
- 各国における防災の課題と法律に関するより深い議論
- 机上の演習やシミュレーションを行う時間を増やす。
- PYに対するプレゼンテーションスライドの共有

F. ファシリテーター所感

- ハザード・パラダイムと脆弱性パラダイム：初回のディスカッションの前に、個人エッセイと国別ポスターの事前課題から、ほとんどのPYが災害の現実と防災戦略（復興など）を見る際にハザードパラダイムの見方を持っていることが分かった。個人エッセイで災害の影響の要因としてリスクの社会的側面に言及したのは1人のPY（日本人）のみだった。ハザードパラダイムは、ハザード固有の影響に対する準備と予測の失敗による災害の影響の根本原因をたどるものである。

しかし、セッション2と3では、PYは災害リスクの社会的側面（脆弱性パラダイム）を発見し、解明することができた。PYは、権力の不均衡、重要なライフライン（医療、安全な避難所、水、食糧安全保障）へのアクセスの難しさ、孤立、不十分なガバナンス、差別、不当な賃金と補償など、リスクの社会的要素を特定し、議論した。上記を経て、「災害は自然現象ではない」ため、重要なライフラインに関する権力の共有と公平なアクセスと手頃な価格を通じてのみ、災害リスクを大幅に削減することができる。

- **事前対応型と事後対応型の防災管理：**国別のポスター発表では、防災と復興に関する参加青年の視点は、災害発生後の救急及び備えに対して重点が置かれていた。しかし、セッション3と4では、防災と復興はすべての人の生活の質を目的としていることが説明され、すべての人が日常的にも緊急時にも生き残り、参画し、スキルを身に付け、保護されるためには、社会保護メカニズム（政策、プログラム、防災資金）を整備する必要があることが分かった。セッション4では、参加青年が、長期的な発展（公正な補償と政策）について反映した一連の防災戦略と、各グループに割り当てられた災害の影響に即した備えについての戦略を提案することができた。
- **健康的で互いを助け合うチームダイナミクス：**安心して意見を共有できるグループダイナミクスが見られた。さらに重要なことは、グループ作業やチームディスカッションを誰かが過度に支配することがなかったため、PY間で有意義な議論が行われたことである。
- **地元青年との対話：**PYと地元青年との間で、より長く、没入感のある体験をすることを強く推奨したい。ベトナムの課題別視察は、互いに学び合う素晴らしい機会であることが判明した。しかし、時間の制限があるため、時間を最大限に活用し、両者が自分たちに影響を及ぼす社会問題についてより深い議論を行えるようにするには、適切な方向性とディスカッション・グループの目的との整合性について考慮する必要があるだろう。

(5) 健康とウェルビーインググループ

PY: 27名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

青年の健康を身体的、精神的、社会的観点から考察し、また青年のメンタルヘルスの状況と課題についても議論する。同時に、青年にとっての理想的なウェルビーイングとは何かを定義し、その達成方法についても検討を加

える。

b. 期待される成果

- 東南アジアと日本における健康を取り巻く状況に対する認識と理解の向上。
- 健康促進と保護、疾病予防に関する国レベルの現状の取組について詳細を把握する。

- ・ セッションでの学びを活用し、青年が主導する健康促進に関するプロジェクトを提案する。

c. 身につく能力

知識

- ・ セルフケアの枠組みを用いた健康とウェルビーイングの定義と概念
- ・ 東南アジアと日本における健康促進と疾病予防に関する既存の戦略と介入手段

スキル

- ・ 目標設定と優先順位付けを含むプロジェクトの計画
- ・ 明確さと正確さを含む良好なコミュニケーション

行動

- ・ 個人と文化の違いを尊重し、促進する。
- ・ 感情的知性、特に自己認識とチームワークを発揮する。

B. 事前課題

課題1 (個人)

最大2分間で自分に関するインフォーマルなビデオを録画すること。なお、課題は次の内容を含める必要がある。(1) 現地語での挨拶、(2) 呼んでほしい名前、(3) 国、(4) 職業、(5) 1 (最低) から5 (最高) のスケールで、自分の健康スコアは何点だと思うか。なぜそう思うか。(6) 健康とウェルビーイングを連想させる曲は何か。

課題2 (個人)

身体的、精神的、感情的、精神的に体調不良な際にとる対処法のリストを持参すること。

課題3 (国別)

El-Osta らによる2019年のジャーナル記事「セルフケア・マトリックス: セルフケアの統一フレームワーク」を読むこと。El-Osta 10.3.38-.indd (selfcarejournal.com)

セルフケアの4つの基本(表2、47ページ)とセルフケア・マトリックス(図1、48ページ)の特徴を理解すること。これは、参加青年(PY)がグループ・ディスカッションをしたり、臨時のプロジェクト提案を設計する際にガイドとして役立つ。

課題4 (国別)

最新の国別データに関する調査(結果は、セッション内で使用予定)

1. グループ・ディスカッション II
 - a. 人口統計(人口、年齢、性別の分布)
 - b. 罹患率上位20の一般的な原因(報告された症例の数及び/または割合を記載)
 - c. 死亡率上位20の一般的な原因(報告された症例の数及び/または割合を記載)
2. グループ・ディスカッション III
 - a. 青年に影響を及ぼす最も一般的な精神衛生上の問題(それぞれの精神疾患の症例数と症例)
3. グループ・ディスカッション IV
 - a. 身体活動、健康的な食事、リスク回避(喫煙、アル

コール、嗜好用薬物)、良好な衛生状態を促進するための既存の政府及び民間の取組

C. 活動内容

課題別視察(日本)

施設: パーソルテンプレスタッフ株式会社

活動

- a. 会社の概要や従業員の健康増進の取組、日本の主要な健康課題、アートセラピーによるストレスの定義とストレス管理に関する講義
- b. 日本の伝統的なラジオ体操、盆踊り(炭坑節)、同社の年次ストレスチェックテストに関するワークショップ

視察から学んだこと

- a. パーソルは、「はたらいて、笑おう」をビジョンに掲げ、部下のメンタルケアを担う管理職向けのラインケア研修、適正な労働時間の確保、時間外勤務者への指導カウンセリング、年次有給休暇取得促進や復職支援制度、柔軟な勤務形態の提供、年1回のストレスチェックなどを通じて、社員のメンタルヘルスに対する意識向上に努めている。
- b. ストレスは理性と本能の間にギャップがあるときに発生する。ストレスは個人の心理的及び身体的反応によって引き起こされるため、それぞれに個性があり、まったく同じストレスは存在しない。ストレスを解消する良い方法は、アートセラピーを通じて自分の感情を表現することである。

ディスカッション導入: お互いを理解すること

ねらい

- ・ ディスカッション・グループ(DG)5及びメンバーのPYの紹介
- ・ DGに期待することと、DG内でのルールของการ作成

活動

- a. ロールプレイングのアクティビティ(メリーゴーランドJASEAN)
- b. ヒューマン・ビンゴ

成果

PYたちは、透明人間になる、時間を止める、いくらでも食べられる胃袋を持つ、願いを叶える、幸せと優しさを与える、テレポートする、タイムトラベルする、形を変える、すべてのスーパーパワーを手に入れるなど、自分が欲しいスーパーパワーについて共有した。その後、2つのグループに分かれ、船上での生活にスーパーパワーを応用した寸劇を演じた。さらに、PYたちは、お互いのヒューマンビンゴカードに記入することで、互いについて知ることができた。いくつか例を挙げると、バイクに乗る人、フットボールをする人、2月生まれの人、ピザが嫌いな人、数学が好きな人、楽器を演奏する人、東南アジア青年の船事業(SSEAYP)に参加する前に飛行機に乗ったことがなかった人、左利きの人、などだ。PYたちは、

自分が共感した事柄に関してストーリーを共有する機会を得ることができた。最後に、DGのハウスキーピングガイドラインと期待を定義し、全員が合意とコミットメントの印として紙に署名した。

グループ・ディスカッション I: 健康とウェルビーイングの定義

ねらい

- 健康とウェルビーイングを定義する。
- PYの健康とウェルビーイングに対する理解と解釈を知る。

活動

- 個人作業: 絵を描く。
- 小グループ及び全体でのディスカッション

成果

参加青年が事前課題として提出した自己紹介ビデオ 3本を上映することから始まった。ビデオはランダムに選択されたため、参加青年は驚きとともに喜びと不安が入り混じった気持ちになったようだ。その後、参加青年は健康とウェルビーイングについての個人的な解釈に基づいて、自分たちで作品を描いた。その後、小グループに分かれて作品を説明し、健康とウェルビーイングについての類似点や独自の定義について指摘を行った。議論の要約は、指定された報告者によって全体に対して発表された。

グループ・ディスカッション II: 知識とヘルスリテラシー

ねらい

- セルフケアの7つの柱のフレームワークを説明する。
- 東南アジア及び日本における国別人口統計、罹患率と死亡率の共通要因について説明する。

活動

- セルフケアフレームワークの紹介
- 国別の小グループによるディスカッション
- 国別の小グループによるプレゼンテーション

成果

国際セルフケア財団が開発し、セルフケアの取組の促進と実施のために世界保健機関によって認められているセルフケアの7つの柱の枠組みについて学んだ。セッションでは最初の柱である知識と健康リテラシーに焦点が当てられ、国別に年齢と性別の分布を含む自国の人口プロフィールについて共有を行った。PYが発表したデータによると、インドネシアは人口が最も多く、ブルネイは最も少ないことが判明した。さらに、PYは自国における罹患率と死亡率の上位に関する一般的な要因について共有した。がんや糖尿病などの非感染性疾患は、東南アジア及び日本での罹患率と死亡率の両方において主要なものであった。高血圧、呼吸器感染症、精神疾患が罹患率の上位5に関する一般的な原因であり、交通事故、結核、心血管疾患は東南アジア及び日本における高い死亡率の一因

となっている。

グループ・ディスカッション III: メンタルヘルスとウェルビーイング

ねらい

- メンタルヘルスとウェルビーイングを定義する。
- 東南アジア及び日本の青年に影響を与えるメンタルヘルスの問題に関する国別データを比較する。
- メンタルヘルスへの対処戦略を説明する。

活動

- 「あなたの数字は？」
- 小グループでのディスカッション
- 絵を描く。

成果

このセッションでは、2番目の柱である「精神的なウェルビーイング」に焦点を当てた。PYは、精神的なウェルビーイングと健康は「自分の可能性を実現し、生活のストレスに対処し、生産的に働き、コミュニティに貢献すること」(世界保健機関)であると学んだ。さらに、各国の代表者からなる2つのグループが、最も低い数字から最も高い数字、またはその逆の順に順位を競う数字ゲームを通じて、各国の精神的ウェルビーイングにまつわる問題に関するデータにつき学んだ。東南アジア及び日本でよく報告されたものに、うつ病、不安障害、自殺念慮、薬物乱用障害が挙げられる。PYはまた、精神的ウェルビーイングのピアカウンセラーやコーチとしてのアドボカシーとボランティア活動、及びそれぞれの国での精神的なウェルビーイングに対する介入について共有を行った。最後に、睡眠、音楽鑑賞、ダンス、歌、運動、ヨガ、祈り、目的地を持たないドライブ、一人の時間、日記など、精神的に疲れたときの対処法を互いに比べた。そして、ライブギャラリー用の絵を描くように、これらについて行った。

課題別視察 (ベトナム)

施設: ホーチミン市医科薬科大学

活動

- 人体解剖学研究所のツアー
 - 地元青年との大小グループでのディスカッション
- 視察から学んだこと**
- PYは、医学生が人体の解剖を研究するために使用する献体を間近で観察した。彼らは、家族や患者が学術目的のために遺体を提供することに同意する方法、死体が冷凍または防腐剤の混合物に浸すことによってどのように保存されるか、そして使用後にどのように埋葬されるかを学んだ。また、成人の骨格系の各部分につき直接観察した。
 - PYは地元青年たちとグループを組み、自国の戦略を共有し、ベトナムのメンタルヘルス、ユニバーサルヘルスケア、ヘルスケアにおけるテクノロジーに関す

る取組について学んだ。また、メンタルヘルス問題に対する偏見の軽減、価格統制、ヘルスケア介入の推進におけるテクノロジーの適切な使用について共同で提言を作成した。

グループ・ディスカッションIV: 健康における各国の戦略と介入

ねらい

東南アジア及び日本における運動、健康的な食事、そして喫煙・アルコール・嗜好用薬物からのリスク回避、良好な衛生習慣を促進するための既存の国レベルの戦略と介入について説明する。

活動

- a. 国ごとに分かれた小グループのディスカッション
- b. ワールドカフェ形式の発表

成果

このセッションでは、3番目の柱「運動」、4番目の柱「健康的な食事」、5番目の柱「リスク回避」、6番目の柱「良好な衛生状態」に重点を置き、PYは各テーマのグループ内で自国の取組について順番に共有を行い、グループ・プレゼンテーションで類似点と相違点をまとめた。

- 3番目の柱「運動」
動機づくりとしての万歩計（ブルネイ、カンボジア、日本、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ）、無料のスマートウォッチ（シンガポール）、車を運転しない週末（ブルネイ、マレーシア）、スポーツ施設やコミュニティセンターの公共利用（すべての国）、青少年のためのスポーツフェスティバル・スポーツの日（マレーシア、フィリピン）
- 4番目の柱「健康的な食事」及び6番目の柱「良好な衛生状態」
バランスのとれた食事、健康的な献立、食事バランスガイド、食育運動、栄養失調に対する食糧補助、ソーシャル・メディア・キャンペーン（すべての国）、砂糖税（ブルネイ、マレーシア、フィリピン、タイ）、ふるさと納税による優遇（日本）、ヘルシーチョイスロゴ（ブルネイ、マレーシア、タイ）、ウェブサイトでのインフォグラフィックキャンペーン（ブルネイ、マレーシア、フィリピン、ベトナム）、健康モニターアプリ（マレーシア、シンガポール、ベトナム）、学校菜園（カンボジア、フィリピン）、学生への無料ランチ（インドネシア）、飲料に対する栄養評価（シンガポール）、衛生についての研修、感染予防と管理、口腔衛生（ラオス）、その他の病気に関する啓発キャンペーン（ロードショーなど）（ブルネイ、カンボジア、シンガポール）、水と衛生（WASH）プログラム（すべての国）、屋台の食品衛生に関する政府発行の許可証（日本、フィリピン）、罰則制度（ブルネイ、カンボジア、マレーシア、フィリピン、シンガポール）、衛生度ランキング（ブルネイ、

マレーシア、シンガポール）、公衆トイレに関するランキング（ブルネイ）

- 5番目の柱「喫煙、アルコール、嗜好用薬物に由来するリスクの回避」
タバコとアルコールに対する課税、任意での薬物検査スクリーニング、意識向上キャンペーン、タバコ製品のパッケージへのインフォグラフィックを用いた警告、規制の執行（すべての国）、喫煙：午後11時から午前5時までの販売禁止（インドネシア）、黄色いボックスの喫煙エリア（シンガポール）、「スナップして報告」（マレーシア）、喫煙専用の厳格な指定エリア（非遵守の場合は罰則あり）（日本）、アルコール：特定の月の販売禁止（タイ）、学校での販売禁止（フィリピン、タイ）、午後10時30分以降の販売禁止（シンガポール）、大学からの退学（日本）、薬物：メディアとの国家レベルでの連携（ベトナム）、死刑（マレーシア、シンガポール、タイ）

グループ・ディスカッションV: 健康問題に対処するための革新的なアプローチ

ねらい

- a. セルフケアフレームワークを適用し、プロジェクト・ロジック・マップを用いて青年主導のプロジェクトを設計する
- b. 国に固有の健康問題に対処するプロジェクトを提案する

活動

- a. プロジェクト・ロジック・マップの紹介
- b. 国ごとに小グループでのディスカッション
- c. 全体ディスカッション

成果

プロジェクト・ロジック・マップを用いてプロジェクトを起案する方法について学んだ。実現したい姿、SMARTフレームワークを用いた目標と成果を明記し、リソース（関係者、予算、インフラ、テクノロジー）を特定し、適切な戦略を選び、成果物と評価基準を定義した。各グループは、自国における特定の健康問題及び、セルフケア・フレームワークのどの柱を重点的に取り組むか選択した。プロジェクト提案については、セクションD（PYの行動計画）で説明する。

課題別視察（インドネシア）

施設: Menjadi Manusia

活動

- a. 企業概要及びメンタルヘルスへの取組に関するプレゼンテーション（質疑応答を含む）
- b. 国別にどのような取組があるかの共有

視察から学んだこと

同視察先は、ネットでのいじめを直接体験した地元の若いプロフェッショナルたちによって設立されたもの

であった。彼らは、この問題に関する意識向上プラットフォームを築き上げ、インドネシアでデジタルリテラシーを促進する決意を持っている。ソーシャルメディアは、個人の精神的健康とウェルビーイングを左右する強力なツールである。主流のソーシャルメディア・チャンネルを用いたコンテンツ作成を通じて、ここでは何千人もの青年にリーチし、彼らの対処に関する戦略に対して良い影響を与え、サポートシステムと専門家の紹介を提供している。PYは、ネットいじめを阻止することの緊急性と、自分の問題を共有できる信頼に足る誰かを見つけることの重要性を理解するに至った。

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

- DGで得られた結果についてどのように発表するかを計画し、準備する。
- グループ・ディスカッションから得られた重要なポイント振り返る。

活動

- a. DG プレゼンテーションの計画と準備
- b. 小グループでのディスカッション

成果

成果発表会の運営委員がグループ・プレゼンテーションの計画と準備を牽引した。タスクを分担した後、PYは小グループでセッションと課題別視察から得た重要な教訓について話し合い、それをプレゼンテーションで強調した。

D. 成果発表会

ディスカッション・グループの代表者として4名のメンバーが、セッション及び課題別視察から得られた主なポイントをまとめたプレゼンテーションを行った。PYは、健康とウェルビーイングの普遍的な定義と、ネットワークを通じて出した自分たちの定義における類似点と相違点について学んだ。PYは、セルフケアの7つの柱のフレームワークをセッションで参照するマトリックスとして使用し、各国の人口の年齢と性別の分布、罹患率と死亡率の主な原因(柱1:知識と健康リテラシー)、最も一般的なメンタルヘルスの問題(柱2:精神的ウェルビーイング)、精神的ウェルビーイングを促進するための既存の戦略と介入(柱2:精神的ウェルビーイング)、運動(柱3)、健康的な食事(柱4)、喫煙、アルコール、嗜好用薬物使用に由来するリスクの回避(柱5)、良好な衛生環境(柱6)について話し合った。さらに、PYは東京のパーソルテンプスタッフ株式会社、ベトナムのホーチミン医科薬科大学、インドネシアのジャカルタのMenjadi Manusiaでの課題別視察の体験を紹介した。学習した内容と経験をまとめるために、PYはプロジェクト・ロジック・マップを用いて、選択したテーマ(柱)と健康問題に焦点を当て

た国別のプロジェクト提案・行動計画を作成した。

今後の活動計画

2番目の柱にあたる「精神的ウェルビーイング」に焦点を当てたプロジェクトが、8か国を対象に提案された。ブルネイは3番目の柱「運動」に、ラオスは4番目の柱「健康的な食事」に焦点を当てた。各プロジェクトのタイトルと目標・目的の概要は以下の通りである。

(カンボジア) ストレスフリーキャンペーン: ストレス管理を改善するための対処メカニズムを導入

(インドネシア) ガトカカ: 中学生のいじめを減らす

(日本) ヘルシージャパン SSEAYP48: 昼休みに運動を取り入れることで健康的な職場を促進する。

(マレーシア) HIDUP: 孤児を対象に、運動を促進し、メンタルヘルスを改善する3日間のキャンプ

(フィリピン) プロジェクト ME: カイシパン パンカルスガン、カバタアン、キナブカサン: メンタルヘルス問題に関する意識を高めるために青年のリーダーを支援する。

(シンガポール) iCare: 高齢者のデジタルリテラシーを高めることに対する青年の関与を増やす。

(タイ) ヒューマンリスナー: メンタルヘルスの専門家への意識を高め、アクセスできるようにすることで、精神科に助けを求めることへの偏見を減らす。

(ベトナム) ティーントーク: 100人のティーンエイジャーと親が安全に会話できる場を作る。

(ブルネイ) フィット・フォー・ユー: 学校を基盤とした6か月間のプログラムで、青年の肥満について減らし、教育し、健康的なライフスタイルを実践するよう学生を指導する。

(ラオス) バイバイ、ソルティ: 塩分摂取量を追跡するアプリを通じて塩分摂取量を減らす。

E. PYの声

成果発表会の運営委員を通じて、PYは以下のフィードバックを共有した。

- 日本での課題別視察: 「グループ・ディスカッションを増やし、講義を減らすべき」
- 導入プログラム: 「賞賛に値するアクティビティで、理解しやすく参加しやすかった」、「アクティビティを行うためのスペースが狭かった」(会場はスタジオ)、「セッション開始時のエナジャイザー・アイスブレイカーを増やすべき」
- セッションIII: 「このようなインタラクティブなセッションを増やすべき」

さらに、健康に関して知識を持ち合わせていなかった参加青年たちは、セッションが親しみやすく、理解しやすいと高く評価した。別の参加青年は、セッションがリラックスした雰囲気ですトレスフリーだったと述べた。全体的に、参加青年たちは各セッションを楽しみにし、それが参加への意欲をさらに高めていた。

F. ファシリテーター所感

PYは多様なバックグラウンドを持ち、中には健康を扱うことに関係のなかった者もいた。しかし、いずれにせよ、各自が最善の方法で議論に積極的に参加し、自信と適切な知識をもって自国を代表することができた。事前課題に取り組むことで、セッションに備えることができていたようだ。PYの中には、英語力を主な理由として、小グループまたは全体での発言や発表に当初は消極的だった者も見られた。しかし、他のPYやファシリテーターからの適切な後押しと継続的なサポート、そして全員が発言

する役割を担えるようにセッションが設計されていたため、最終的には勇気を奮い起こして自分の考えを表現し、前に立って効果的に発表することができた。プロジェクトの起案はファシリテーターの期待を上回るもので、特にPYが行動計画を起草する際にプロジェクト・ロジック・マップをうまく適用した点は期待以上であった。全体を通して、ファシリテーターは各PYの素晴らしいパフォーマンスとセッションへの貢献を高く評価する。これらは、グループ・ディスカッションを正しい方向に導くのに大いに役立った。

(6) デジタル社会グループ

PY: 26名

A. ディスカッション・トピック

a. テーマ概要

デジタル技術が活用されている世界各国の好事例や、ASEAN加盟国及び日本の現状と課題を理解する。これに基づき、青年がデジタル社会の促進にどのように貢献できるか議論する。

b. 期待される成果

- デジタル技術が用いられた世界中のベストプラクティス、及び東南アジアと日本の現状や課題に関する理解と知識を深化させる。
- 「デジタル・インクルージョン」と「デジタルデバイド」の取組に関する共通理解を身につけ、コミュニティでデジタル社会の概念を推進する。
- 実践的な知識を向上させ、共通の課題を特定し、将来にわたる協力と共同の成果を促進する、永続的で実用的な解決策を提案する。

c. 身につく能力

知識

- 「デジタル社会」についての一般的な理解と、誰も取り残されないよう、インクルーシブかつデジタルでアクセス可能な環境及びコミュニティが果たす重要な役割についての知識
- デジタル・インクルージョンと、それがコミュニティ内でデジタル社会を推進する上でどのような意味があるか（アクセシビリティ要件、ユニバーサルデザイン原則）についての理解
- デジタルデバイドを埋めるための様々なステークホルダー（CSO、政府、国際連合、民間セクターなど）の役割に関する理解

スキル

- デジタルリテラシー及び様々なデジタルツールの使用
- 問題解決のための批判的かつ創造的な思考

- ディスカッション、アイデアのプレゼンテーション、提案スキル

- プロジェクト設計及び管理スキル

行動

- 異文化コミュニケーションとコラボレーション
- 自己リーダーシップとチームワーク

B. 事前課題

課題 1

「デジタル社会」とその意味に関する理解についてPYの足並みを揃えるため、各自、ITU (International Telecommunication Union) アカデミーの2つの必修コースのうち1つを修了し、主要なポイントについて短い要約を作成することが求められた。「スマート・フォー・オール：スマートシティを超えて、インクルーシブでデジタルにアクセス可能な環境とコミュニティを構築する」コースでは、インクルーシブで持続可能なコミュニティに必要なデジタル技術の構成要素についての基礎知識がPYに提供された。2つ目のコース「「アフリカの女性に対するプログラミング教育に関するイニシアチブ」に即したテクニカルスキル及びソフトスキル入門」では、教育イニシアチブにおける主要なテクノロジーの適応と実装に関する知識がPYに提供された。

課題 2

「デジタルデバイド」がコミュニティの様々なグループに影響を及ぼしていることを認識する目的で、PYは、日常生活をサポートするサービスに導入されているが、特定のグループの人々を排除しているようなデジタル技術の例を集め、「デジタルデバイド」に対して理解した。日本の例では、スマートフォンを所有している顧客のみがサービスを利用できるQRコードをベースとした傘のレンタルステーションが挙げられた。ここでは、デジタル対応のサービスにアクセスしたり使用したりするための

「利用可能性」の概念が示された。

DG6 オンラインミーティング

26名のPYが参加し、自己紹介、アイスブレイキングゲーム、学習プレゼンテーションを通じて、初めての交流を行った。2名のPY(インドネシアと日本)が、各自選択したオンラインコースで得た主な成果を発表し、他のPYはそこから学び、またコメントし、さらに感想を共有した。

C. 活動内容

課題別視察(日本)

施設 1: デジタル庁

活動

行政手続きの簡素化を実現するデジタル庁の背景、歴史、進行中の取組について紹介された。

視察から学んだこと

コンビニエンスストアとの連携を含め、ワンクリックでオンライン行政手続きや取引(健康保険、個人識別、税など)を「簡素化」することでインクルーシブなデジタル・トランスフォーメーションを推進するための「人間中心設計」に基づいた日本政府の取組(マイナポータル、ビジット・ジャパン、マイナンバーIDなど)について学んだ。

施設 2: NEC Future Creation Hub

活動

様々な技術を応用してプロセスの簡素化と合理化を実現し、多様な能力を持つ人々など特定のニーズを持つグループに対して「インクルーシブな」技術の使用を促進するショールームの見学

視察から学んだこと

セキュリティ、電子政府、エンターテインメントから教育目的まで、様々なニーズを持つ個人やグループにサポートを提供できる人工知能(AI)、生体認証システム、アイセンサー技術などの使用に関する双方向的なデモンストレーションに取り組んだ。

ディスカッションの導入

ねらい

- PY間のオーナーシップ、積極的な参加、異文化理解を促進するための基本ルールを一緒に確立する。
- PYによる事後活動に向けて、分析スキルとツールを適用する素地を提供する。

活動

- PYの紹介、基本ルールの設定、パディシステムの導入
- SOAR分析の紹介と適用: 先を見据えて考える。

成果

PYはSOAR分析及びそのSWOT分析に対する利点について理解を深めた。SOAR分析では、強みに注目し、現状のリソースや能力(イノベーション)を強化して、結果を重視した実行可能な計画を特定することに向いている。

SOAR分析のテンプレートを用いて、PYは様々なシナリオ下で社会経済問題に対処するための実行可能なデジタルソリューションと実用的なアプローチ及びアクションの特定ができることがグループ・ディスカッションとプレゼンテーションを通じて示された。

グループ・ディスカッション I “ASEANと日本のデジタル社会と現状の紹介”

ねらい

- 東南アジア及び日本のデジタル社会と現状の概要
- デジタル社会の概念を理解し、地域におけるベストプラクティスを探り、東南アジア及び日本のデジタル技術の現状について深掘りする。

活動

- 新たなデジタルデバイド、デジタル・ビルディング・ブロック、ユニバーサルデザインの原則、インターセクショナルアプローチの理解
- 東南アジアにおけるコネクティビティ(地域及び国家の枠組み)と人間中心の社会5.0ビジョンに関する日本の参加型アプローチの拡大
- 東南アジアと南アジアにおけるデジタル介入の優良事例
- グループアクティビティ: 教育、ヘルスケア、デジタル経済のシナリオに対するデジタル介入について

成果

- 個人、家庭、企業、地理間の格差に着目して、アクセス、リテラシー、用途、能力、参画、成果(便益や利益)の格差を伴う「新しいデジタルデバイド」に関する最新の不平等問題について知識を得た。
- インターセクショナルアプローチについて理解した。これは、(i) インクルーシブで持続可能なデジタル・トランスフォーメーションに必要なデジタル・ビルディング・ブロック、(ii) 公平なアクセスのためのユニバーサルデザインの原則、及び(iii) 構造的な不平等によりデジタルデバイドに直面している疎外されたグループに適した介入を特定するためのものである。
- 東南アジアにおいてデジタルアクセスを推進する地域全体の枠組みと国家戦略の現状、及び安全性、ウェルビーイング、世代間の配慮を重視した日本による参加型アプローチの技術進歩について理解した。
- サービスが行き届いていないコミュニティからの分野横断的なデータの取得、シンガポールにおける「人生のためのデジタルスキルフレームワーク」、南アジアにおける児童婚の根絶に向けた意識向上のためのデジタルキャンペーンなどの取組から、デジタル介入のベストプラクティスや、そのアプローチ、関連する利害関係者について学んだ。

グループ・ディスカッション II: “デジタルヘルスとウェルビーイング”

ねらい

- 健康とウェルビーイングの向上におけるデジタル技術の役割について探る。
- プロジェクトの設計と計画についての概念を理解する。

活動

- ヘルスケアにおけるフロントエンドのデジタル化とバックエンドの強化
- 世界中の健康問題と非感染性疾患 (NCD) に対するデジタル介入とAIの適応
- 架空の健康危機を題材にした、プロジェクト設計と管理及びプロジェクト計画の演習について概説する (グループ活動)

成果

- ケアの提供を強化するための患者向けデジタルアプリケーション (生成AI、予測AI、クラウド、アプリケーション、モノのインターネットなど) の採用と、遠隔患者モニタリング、医療機器としてのソフトウェア、電子医療記録、情報システムなどの医療システムプロセスを最適化するためのバックエンドの拡張に関して理解した。
- インドでの遠隔医療による不公平な結果とアクセス状況、フィリピンとインドネシアでの患者データとモニタリングなど、アフリカでの低コストな薬の調達と医薬品ソースの最適化によるリソース制約に関した医療従事者と薬局のサプライチェーン向けのバックエンドソリューション、世界保健機関 (WHO) による禁煙のケーススタディを通じた、増加するNCD症例に対処するためのチャットボットとモバイルアプリケーションの実装など、医療課題に対するフロントエンドソリューションの使用に関して洞察を得た。
- ストレスに関する情報をユーザーに提供し、ストレスを管理するスキルを実践するチャットボットの使用を知り、デジタル介入が健康に及ぼす2つの側面について学んだ。また、デジタルの進歩による影響を回避しているシンガポールの移民労働者のデジタルデバイドについてドキュメンタリーで紹介されているように、人間の「触れ合い」を完全に代替することができないデジタルソリューションの限界についても学んだ。
- 核となる問題の特定、目標や目的の設定、活動の設計、利害関係者の分析を含むプロジェクト設計と計画についての基本的な理解をし、水系感染症、青少年のメンタルヘルス危機、密集した都市部における呼吸器に影響する新型ウイルスの発生など、架空の健康問題に対処するためのデジタルソリューションを用いたプロジェクト計画を提案するグループ活動を行った。これを通して、プロジェクトを計画するためのス

キルを発揮する準備ができていることが示された。

グループ・ディスカッション III: “格差を埋める – 疎外されたコミュニティにおけるデジタル・インクルージョン”

ねらい

デジタル・インクルージョンの重要性と、デジタル技術への公平なアクセスを確保するための戦略について話し合う。

活動

- 恵まれないグループ (先住民族コミュニティ及び能力に多様性のある人々) に対する、公平なアクセスのためのデジタル的な介入
- デジタル・インクルージョンのシミュレーション (グループアクティビティ・寸劇) と、シミュレーションからの考察

成果

- 青年の健康や教育などの基本的なサービスへのアクセスが限られている南米のグランチャコでデジタルスキルを開発するITUによる現行の取組をケーススタディとして学んだ。これを通して、先住民コミュニティのデジタル・インクルージョンに関するイニシアチブについて実践的な理解と洞察を得た。
- 複数の障害を持つ人々に対するICTへのアクセスの制限とそれが日常生活にどのように影響しているかについてのシンガポールのデジタルデバイドに関するドキュメンタリーに集中した。ユニバーサルデザインのICTデバイスのニーズと手頃な価格に対応するべく、ICT開発部門の喫緊の需要について理解した。
- デジタルへのアクセスから取り残されてサービスが行き届いていないコミュニティ (移民労働者、能力に多様性のある人々、先住民コミュニティ) の個人に関して、特定のシナリオでデジタル・インクルージョンのシミュレーションに参加し、各シナリオに対処するために必要な主要テクノロジー (ビッグデータ、IoT、決済ソリューション、AIなど) を探るうえで共感力と知識を活用し、様々な利害関係者の役割がどのように事態を悪化させるか、またはデジタルの介入を通じてインクルージョンを促進するかについて、うまく演じることができた。

課題別視察 (ベトナム)

施設: ホーチミン市情報教育大学

活動

- デジタル社会と市民権に関する入門的講義
- (i) デジタル社会における青年の責任、(ii) 教育とデジタル社会などのテーマについて、地元の大学生とグループ活動を行う。

視察から学んだこと

特に青年の視点からベトナムのデジタル・トランス

フォーメーションについて理解を深めた。グループ活動や現地の学生との交流を通じて、青年にとって必須のデジタルスキルに関するデジタル・ソリューションの考案、信頼できる情報と誤情報への対応に関する意識の向上、前向きでプロフェッショナルなデジタルアイデンティティの構築、東南アジアの差し迫った社会問題への取組におけるソーシャルメディアの活用など、協力的に活動する様子が見られた。

グループ・ディスカッション IV: “教育における人工知能” ねらい

より良い教育と青年のエンパワーメントにおける、デジタル技術(特にAI)の役割を探る。

活動

- デジタル・スキル・ショーケース: データサイエンスとAIを大学3年生として専攻するカンボジアPYのMengthong (MT) による「人工知能の基礎」
- 教育におけるAI
- 東南アジアにおけるAIの未来 (AIに関する国家戦略や政策)
- 教育におけるデジタル・ソリューションに関する最悪のシナリオ

成果

- デジタル・スキル・ショーケースでは、「人工知能の基礎」に関して青年同士でデジタルスキルが目の前で共有された。PYは、AIの仕組みと、自然言語処理チャットボット、アルゴリズムとデータ構造のためのコンピューターサイエンス、予測と意思決定、経験から学ぶシステム(機械学習)、人間の思考プロセスの理解におけるAIの使用について、理解を深め、包括的な知識を身に付けた。
- 教育におけるAIの採用(人間中心のアプローチとAI、拡張と自動化、AI対応の評価、個別化された学習コンテンツなど)について理解を深め、AIによる不正行為や誤情報の生成、データのプライバシー、人間同士の相互作用の欠如など、AIがもたらす課題についても理解を深めた。
- タイ、シンガポール、ベトナム、フィリピンで実施されているAIに関する政策や国家戦略に基づいて、日本と東南アジアにおけるAIを採用することの準備度合いが異なることが分かった。また、学生の学習経路を個別化するためのAI対応のアダプティブラーニングシステムに関して、シンガポールでの優れた実践について知った。日本で不登校の可能性が高い生徒を特定するためのAI対応のシステムについて学んだ。

グループ・ディスカッション V: “デジタル世界の高齢人口” ねらい

デジタル技術が高齢化社会に与える影響を理解し、倫

理的及び社会的影響について議論する。

活動

- ドキュメンタリー作品「古い技術と新しい技術」
- デジタル世界における高齢化社会の理解及び高齢者のデジタル包摂の前提条件としてのICTアクセシビリティ
- ディスカッションの成果発表に関する準備: これまでのセッションでの学びをまとめる

成果

- 地域全体の高齢化する人口に関しての資料や統計、及びWHOが予測する2025年の高齢化のペースを基に、ICTの急速な変化が高齢化する人口に対してどのような影響を与えるか、理解を深めた。
- 高齢者のデジタル・インクルージョンを促進するために必要なICTアクセシビリティに関する技術的なスキルを習得した。これには、視力、聴力、運動能力、認知能力の低下、社会的孤立、活力の低下に対処することが含まれる。
- 成果発表の準備のために、デジタル社会に関する、これまでのセッションから共通する、または共有された学びと行動計画をうまく見出した。

課題別視察(インドネシア)

施設: Traveloka (オンライン旅行会社)

活動

視察先の歴史について紹介を受け、デジタル化とメタ検索を活用して旅行情報の取得、チケット購入などのプロセスを自動化し、「旅行を簡素化する」という目標についてのプレゼンテーションから学んだ。また、キャンパス・オフィスの見学を行った。

視察から学んだこと

旅行と観光に関する取引プロセスを簡素化し、地元の企業を支援し、持続可能な観光を促進するデジタルソリューションについて知見を得た。

ディスカッションのまとめと評価

ねらい

- 特にデジタル社会を推進するための社会的な取組やプロジェクトを実施する文脈において、PYがアイデアを発表し、提案するスキルを磨く。
- 自信を強め、好意的な環境でアイデアを発表する準備が十分に整っているか確認する。
- ダイナミックかつ内省的な学習及び評価プロセスを踏む。

活動

- 自己評価(ディスカッション・グループの評価)
- 成果発表に向けたコンテンツ準備及びリハーサル(グループ活動)

成果

- PYは、事前活動、ディスカッション・グループの内容（プログラム中の活動）、ファシリテーターのパフォーマンス、ディスカッション・グループにおけるセッションの設計と進行、課題別視察、セッション中に獲得した能力を含む自己啓発の関連度合い、貢献、有効性、満足度を含む、全体的なディスカッション・グループへの評価アンケートに回答した。
- PYは、成果発表に向けた草稿を提出することができ、効率的なチームワークが発揮された。

D. 成果発表会

インクルーシブで持続可能なデジタル社会を構築するための中核概念となる4つの要素を中心に、学びの成果と推奨するアクションプランを発表した。基礎となる「アクセス」から始め、PYはアクセスとネットワークインフラの重要性に関するこれまでのセッションでの理解を、日本のNECへの訪問と関連付けた。さらにPYは、2つ目の要素としての「データ保護」と、エンドユーザーの個人情報とデータを保護できる既存の法律に関する意識向上の重要性について理解を示した。さらにPYは、ユニバーサルデザインの原則の概念と高齢者向けのICTアクセシビリティ要件、及び行政手続きを簡素化する人間中心設計のアプローチに関する日本のデジタル庁訪問での感想を発表して、「アクセシビリティ」に関する理解を示した。また、人々がヘルスケアサービスなどの利用可能なデジタルサービスの恩恵を受けるために、ICTデバイスを「購入できる」ことの重要性が強調された。さらに、電子商取引業界のサービスについても、インドネシアでの課題別視察中には、旅行のプロセスを簡素化するアプローチと、観光業における中小企業のビジネス促進や地域社会での雇用創出といったトリクルダウン効果についての知見を得た。手頃な価格であることはインクルーシブなデジタル社会における主要な課題の1つであり続けるため、PYは「新たなデジタルデバイド」について、また様々な分野でAIを活用してデジタル包摂を促進する方法について説明を行った。

今後の活動計画

PYたちは、結果に重きを置いた姿勢で、青年、高齢者、障害者、その他の疎外されたグループの意識を高め、デジタルリテラシーとスキルを向上させるための推奨事項を作成する。また、次のモジュールを開発する前に、ニーズ評価と協議プロセスを実施して関連性を確保することも推奨された。

- デバイスとインターネットの利用に関する基礎知識
- 電気通信とコミュニティネットワークに関する基礎知識
- デジタルで利用できる政府サービスにアクセスする方法
- フェイクニュースやフェイク情報を検証する方法

- デジタルデータ及び情報を保護する方法

E. PYの声

- PYの61%は、ディスカッション・グループのセッション内容によって、様々な社会経済問題に対する実用的なデジタルソリューションを見出すための実践的な知識が向上すると強く同意した。さらに、PYの50%は、セッション内容と事後活動のアイデアとの関連度合いが非常に強いと回答し、61%が、セッションの設計によって、デジタル社会をより深く理解するのに役立つ、有益で双方向的で魅力的なアクティビティが提供されたと同意した。
- 「デジタル社会には、デバイスやインフラだけでなく、様々なバックグラウンドを持つ人々がデジタルデバイスのメリットを享受できることも含まれる。IT以外のバックグラウンドを持つ私にとって、多種多様な業界がデジタル社会に貢献していることを理解するのに役立った。ありがとうございます!」（ブルネイPY）
- 「ディスカッション・グループは、船上での私のお気に入りのアクティビティの1つだ。楽しさと学びが同じく含まれている。各種活動は、PYが互いのアイデアを学ぶのに役立った。ファシリテーターがセッション中で紹介してくれたゲームのおかげで、エネルギーレベルは高く維持された。最後に、ディスカッション自体が私にとっては大きな発見であった。ディスカッション・グループから得た最大の学びは、デジタルの世界でも、一般の人々と弱者との間には隔たりがあるという事実だ。」（フィリピンPY）
- 「私が最も気に入った学びは、デジタルデバイドの回だ。デジタルへのアクセスは生活の様々な側面でどのように異なるかということを考えさせられた。障害のある人たちは今では様々な方法でアクセスできるようになり、私たちは誰も取り残されないように隔たりを埋める手助けができるということ、自分の生活の中で改めて考えるきっかけとなった。」（ベトナムPY）

F. ファシリテーター所感

当初、このディスカッション・グループのPYたちは、テーマ及びデジタル社会の重要概念を理解するにあたって知識や能力のレベル差が幅広かった。様々な分野や社会経済問題におけるICTの適応により、アクセス、手頃な価格、用途、持続可能性の面でデジタルデバイドやギャップを伴う。セッション全体を通して、PYはグループ・ディスカッション、グループアクティビティ、様々なデジタルデバイドの問題に対するアイデアや解決策を提示する上で創造的な思考プロセスに積極的に参加した。インクルーシブなデジタルコミュニティに対する進歩的

な理解を示し、特定のニーズ及び能力に多様性のあるグループにおけるデジタルリテラシーとデータ保護の意識向上を中心に据えた、東南アジア及び日本に共通して重

要な行動計画を見出す結果を迎えられて、喜ばしく思っている。

第8章

事後活動セッション

1 事後活動セッションの概要

(1) 目的

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

(2) 実施方法

事後活動セッションI(全体会)では、ファシリテーターの発表後、各国事後活動組織代表者が各国事後活動組織の連携体であるSSEAYPインターナショナルについて紹介するとともに、その目的・活動状況についての理解を深め、PYのSSEAYPインターナショナルや各国事後

活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去のPYが事業中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況及び成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。また、各国における事後活動組織や過去のPYの活動状況や事例について理解を深めた。

事後活動セッションII以降では、国別にPYが事後活動として各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取りかかった。また、ディスカッション活動を通して得た学びをいかした議論を繰り返し、自国のプロジェクトを最終化していった。そして、サマリーフォーラムに向けた発表の準備を行った。

(3) 各国事後活動組織代表者

国名	氏名	事業参加年
日本		2015
ベトナム		2018
インドネシア		2015
ブルネイ		2014
カンボジア		2017
ラオス		2013 (NL)
マレーシア		2016
フィリピン		1991
シンガポール		2017
タイ		2015

(4) プログラムの流れ

船内 事後活動 セッション	11月27日 14:15～17:00	事後活動セッションI(全体会)
	11月28日 10:00～12:45	事後活動セッションII(国別) (事後活動組織や既参加青年による活動紹介)
	11月29日 14:15～17:00	事後活動セッションIII(国別) (プロジェクト案の議論)
	11月30日 10:00～12:45	事後活動セッションIV(国別) (プロジェクトの最終調整、サマリーフォーラムの準備)
	12月5日 10:00～12:45	サマリーフォーラム

2 サマリーフォーラム（事後活動案）

(1) 概要

12月5日、にっぽん丸船内ドルフィンホールにてサマリーフォーラムが開催され、各国の事後活動についての活動案を発表し、共有した。PYは、第48回SSEAYPを通して学んだことを最大限にいかし、社会に貢献していくための第一歩としてこれらの活動案を考案した。

(2) 各国事後活動提案

A. ブルネイ

プロジェクト名：サトリア・ケスマの文化ロードショー

目的：

- ・ ブルネイ文化を促進するための仕組みとしてストーリーテリングの実施
- ・ 学生が文化を実際に学べるプラットフォームの提供
- ・ ブルネイの4つの地区すべてに、各地区に1校ずつ、学校あたり約100人の生徒を派遣

内容：

- ・ SSEAYP48のハイライト映像の上映
- ・ ブルネイのナショナル・プレゼンテーション

実施

- ・ ミニカルチャーワークショップ
- ・ 言語、ストーリーテリング、踊り
- ・ 学生（参加者）によるストーリー創作
- ・ 学生（参加者）によるパフォーマンス

タイムライン：

- ・ 2024年12月：書類提出
- ・ 2025年1月4日：関係者への対応
- ・ 2025年1月17～18日：実行委員会開催
- ・ 2025年2月10～20日：プログラム実行

期待される効果：

- ・ ブルネイ文化への認識と理解の向上
- ・ 学生の創造的思考力の促進
- ・ 地元の文化を共有する創造的な方法の提案
- ・ SSEAYPの紹介を通じ、若者の関心を高め、今後の参加を促進

B. カンボジア

プロジェクト名：Chulasa Core

背景：

- ・ 「Chulasa チュラサ」は、第48回SSEAYPカンボジア派遣団のバッチ（期）名であり、チュラサコアという

プロジェクト名は、48回生の最初のプロジェクトである「若者の夢」から発展してできた。

- ・ SSEAYPの国紹介ビデオ作成の際、シェムリアップ州の芸術文化トレーニングクラブを訪問した。当該訪問で直面した問題は次のとおり「トレーニングのための物理的なインフラの不足」「不衛生なライフスタイルとゴミ処理の問題」「技術的物質的資料の不足」

目的：

- ・ 子供向けのクラスのために、芸術文化トレーニングクラブのインフラと設備を改修
- ・ 文化の保存・保護の促進
- ・ 地域環境の衛生と廃棄物管理を促進

対象：

- ・ 文化コミュニティクラブの学生（6～25歳）
- ・ 地域社会の人々

内容：

- ・ インフラを改修し、技術設備をサポート
- ・ 文化保全の促進
- ・ 衛生管理、適切なゴミ処理の推進

期待される効果：

- ・ クラブはより良い環境を訪問者に提供、観光客や学生を惹きつけ、収入の増加
- ・ 若い世代の文化保存に対する意識の向上
- ・ 健康的で衛生的な生活の促進

タイムライン：

イベント前：計画、資金調達、ソーシャルメディアでのマーケティングキャンペーン、スポンサー探し、協賛企業探し、活動に関するマーケティングキャンペーン、寄付の募集

イベント実行：2025年2月第2週

イベント後：報告書作成、プロジェクトの結果と全体的な影響を評価するための調査を実施

C. インドネシア

プロジェクト名：GEMILANG（素晴らしい）

明るいインドネシアのための読み書き能力向上

背景：

現代の子供はテクノロジーに執着しすぎていて、読み書き能力や批判的思考力が低下しているのではないかと懸念

内容：

- 子供の読み書き能力と批判的思考力を向上させ、生産性と文章作成意欲を高めるゲミランプログラムを実施
- 国全体（ジョグジャカルタ特別州）と州レベルで（15 州）で実施
- 240 人の小学生が参加
- 160 点の作品を小学生が作成
- 小学生（9～12 歳）が対象
- 読み書き能力と批判的思考力を向上させるための子供のニーズをサポート

持続させるための方法：

- 学校、地域社会、NGO、政府など、様々な関係者と連携して、社会における持続的で有意義な影響を拡大
- 生徒の作品（詩、短編小説、漫画など）集めた本を出版
- 小学生から SSEAYP 参加青年へペンフレンドとして文通を行う
- インドネシア教育文化省との協力による学生作品の展示

タイムライン：

- 2024 年 12 月：プロジェクト立案
- 2024 年 12 月～2025 年 3 月：協力団体、スポンサーを探す
- 2024 年 12 月～2025 年 1 月：カリキュラムとモジュールの実施、資金調達
- 2024 年 12 月～2025 年 7 月：学校との連携
- 2025 年 1～2 月：国レベルのプロジェクトもしくはパイロットプロジェクトの実施
- 2025 年 2～8 月：各州におけるプロジェクト実施
- 2025 年 8 月：評価
- 2025 年 8～9 月：プロジェクト報告

D. 日本

プロジェクト名：Mini SSEAYP

背景：

グローバル化が進む中で、グローバル人材の不足や多文化共生における課題が各地で起こっている。今回東南アジアで活躍する人材育成を目的とした本プログラムで、多くの海外青年や現地の人と関わった。中でも特に、異文化への理解不足とディスカッションなどにおける心理的安全性の重要性について改めて気づいた。

目的：

Mini SSEAYP を開催し、異文化理解を通じて世界を身近に感じ、自分と他者の違いを楽しむ機会を若者にもっと増やす。

内容：

- 15 歳以上、高校生以上を対象
- 最大 30 名
- 参加者は公募にて募集
- IYEO（日本青年国際交流機構）と地方自治体の協力を依頼
- 開催場所は公民館などを想定
- 1 日プログラム
- プログラムは日本語にて実施

期待される効果：

- 参加者は異文化に対する新しい視点を得る。
- プロジェクト前後にアンケートを実施し、効果を測る。
- 参加者は異文化に対する理解を深める。
- 異文化への関心と敬意を高める。

タイムライン：

- 2024 年 12 月～2025 年 2 月：開催場所の選定
- 2025 年 2～3 月：資金集め
- 2025 年 2～5 月：協力依頼
- 2025 年 5～6 月：参加者募集
- 2025 年 8 月：プロジェクト実施及びフィードバックを基にした改善

E. ラオス

プロジェクト名：D.O. I.T Project

Diet – Optimization – Initiative – Transformation

ダイエット – 最適化 – イニシアチブ – 変革

背景：

- 世界中で 13 億トンの食品が廃棄されており 1 人あたりにすると 132 キロにもなる。
- 家庭からの食品廃棄物はラオスの緊急課題の 1 つである。
- 堆肥などの適切な食品管理が不足しているため、食品廃棄物の削減を優先する必要がある。
- ラオスにおける食品廃棄物は 1 人あたり 86.72 キロにもなる。

目的：

- 家庭や学校からの食品廃棄物の削減
- 食品廃棄物問題への取組に若者の参加の促進
- 環境保護に対する若者の意識向上

期待される効果：

- 家庭や学校からの食品廃棄物の減少
- 参加者の食品廃棄物と環境保護に関する知識と意識の向上
- より多くの学校がこのプロジェクトの提案モデルを

実行

内容:

- 対象: 14～30歳の若者
- 場所: ビエンチャン中学校
- 参加者数: 直接: 50人、間接: 1000人
- 期間: 2025年2月～7月
- 食品の価値とイノベーションに関するワークショップにおいて、農産物の価値や参加者に食材の革新的な使用方法を紹介する
- 食品廃棄物の削減と加工に関するワークショップにて食品廃棄物 - 発生源と現在の管理方法、問題への参加に関する若者の考え方を形成し、学生に堆肥化に関する地元の知恵を教える
- オンラインキャンペーン: 食品加工のアイデア、食の革新と地元食材の価値の認識を促進する
- オンラインキャンペーン:
 #ຂໍ້ໝາຍດ້ານດິນໄຊ #Eat_it_up を
 実行し、拡散

F. マレーシア

プロジェクト名: 「HIDUP」

(マレー語: 人生・生活)

背景:

クランタン州グア・ムサン郡バトゥ・パパンの農村地域に暮らす13歳から15歳までの中学生40名の健康、自己衛生、デジタルリテラシーの3つの側面を向上させる必要がある。

目的:

- 地方の高校に通う13歳から15歳の中学生の生活の質を向上させる。
- 中学生にデジタルリテラシー教育に触れる機会を提供する。
- メンタルヘルス、身体活動レベル、自己衛生、デジタルリテラシー教育に関する認識と理解を高める。

内容:

「HIDUP」プログラム

- HATI = Heart (心) アートヒーリング
- INTELEK = Intellect (知性) デジタルリテラシー
- DIRI = Self-love (自己愛) 自己衛生セルフケア
- USAHA = Hard working (勤勉) 身体活動
- PRIHATIN=Caring (思いやり) 社会福祉・気候変動対策

タイムライン:

- 2025年1月: 関係各所からの承認、第1回実行委員会開催
- 2025年2月: NGO、企業などの協力団体からの承認を得る、プロジェクト立案の決定、スポンサーへのプレゼンテーション、ターゲット分析、第2回実行委員会開催
- 2025年3月: ターゲット選定、予約手配、データ収集、第3回実行委員会開催
- 2025年4月: スポンサー確定、ロジスティック、物品手配、宣伝広報、第4回実行委員会開催
- 2025年5月: プロジェクト始動、反省会、報告書作成

G. フィリピン

プロジェクト名: KKK: Kabataan para sa Kahandaan at Kalusugang Pangkaisipan

若者の災害への備えとメンタルヘルス

背景:

- 災害リスク軽減・管理と気候変動適応への若者の関与不足
- 応急処置の適用を含む災害への備えと対応に関する訓練不足
- 若者のメンタルヘルスに関する問題(ストレスや鬱): 特に農村部では、生殖と精神の健康に関する医療サービスへのアクセスが不足

内容:

- 全国で青少年キャンプ、トレーニング、または啓発キャンペーンを実施することにより、災害への備えと総合的な健康に対するエンパワーメントと積極的な関与を促進し、フィリピンの青少年のために、フィリピンの青少年によって、フィリピンの青少年と共に、2025年から2026年にかけて実施
- トレーナーのトレーニング - 心理社会的サポートと心理的応急処置
- メンタルヘルス啓発キャンペーン
- コミュニティベースのトレーニング (災害リスク軽減・管理)

期待される効果:

- メンタルヘルス、気候変動適応、またはコミュニティベースの災害リスク軽減・管理の取組への参加
- 心理社会的支援と心理的応急処置に関するトレーナー研修の実施
- コミュニティベースの災害リスク軽減・管理研修の実施
- 参加者のメンタルヘルス、気候変動適応、災害リスク軽減・管理に関する認識とリテラシーが70%向上

H. シンガポール

プロジェクト名: 大丈夫だよ... (It's OK to...)

背景:

- 若者のメンタルヘルスはシンガポールにおいて喫緊の課題となっている。
- 若者のうち4人に1人はメンタルヘルス不調をかかえていると報告している(2023年)。
- 2023年シンガポールのZ世代の10人のうち9人はストレスを感じていると報告しており、16%がストレスマネジメントできていないと感じている。
- シンガポール人のうち10人に3人が毎日を楽しみにしている。
- 10人のうち3人が自分の感情のコントロールができていると感じている。
- 10人のうち3人が健康的な生活を送るために必要なすべてのスキルとツールを備えていると感じている。

目的:

ストレスの多いシンガポールの環境の中で、若者が効果的なセルフケアと対処法を身につけ、幸福度を高める。

内容:

- 多くの場合、私たちは「休む」「ノーと言う」「深く考える」「手放す」「生産的でない」これらのことはすべてダメだと思い込み、それが普通で人間的なことであっても罪悪感を抱き、自分自身にストレスを与えてしまっている。これらのことを「してもいいことなのだ: It's OK」という意識に変革することを目指す。
- 各ブースに参加すると参加者は「パスポート」にスタンプを獲得できる5つのステーションが設置されている。
- 対象者: 若者(18～35歳)
- 参加者数: 50人
- 会場案: 植物園、都市農場/庭園、学校
- 時間数: 半日(4時間)

タイムライン:

- 2025年1月初旬: プロジェクト及び活動の計画立案
- 1月15～30日: 協力者への説明
- 2月第1週: 会場と協力者の確定
- 2月1～15日: 物品購入(スライド、販促資料、ポスター、装飾を含む)
- 2月15日: フィードバックメカニズムの作成
- 2月最終週: リハーサルの実行
- 3月初旬: イベントの実施
- 3月15～20日: フィードバックデータの集計
- 3月25日: ドキュメントの作成及び投稿
- 3月末～4月初旬: 振り返りセッション

I. タイ

プロジェクト名: Hope For the Better Future

より良い社会への願い

背景:

- タイ政府の養護施設では7,000人以上の子どもたちが保護されている。
- 基礎スキルを高める機会が不足している。
- 社会的弱者グループになる可能性が高く、さらなる社会問題の増加につながる可能性がある。

対象:

バンコクエリアの児童養護施設(センター)で保護されている8～15歳の子どもと15～21歳の若者

内容:

- ゲームベース学習キットの開発
- 里親家庭スタッフ向けのアクティビティガイドブック
- ライフスキルボードゲーム
- 学習キットを全国の里親家庭に配布する

タイムライン:

- 2024年12月: 第2回補助金申請
- 2024年12月～2025年1月: 学習キットの開発
 - SSEAYPからの知識をリストアップ
 - 学習キットの初稿作成
 - デモクラスで里親家庭と連絡
 - デモクラス開始
 - 結果の記録
- 2025年1月～2月: パイロットプログラム実施
 - 学習キットの改善版の作成
 - 試作品の作成と試行
- 2025年2月～3月: 本番プログラムの立上げ
 - マーケティングとキャンペーン
 - 注文、発送の管理
 - フィードバックのフォロー
- 2025年3月～4月: 製品の発送
 - 全国の他の里親家庭に商品を発送
 - フィードバックのフォロー

J. ベトナム

プロジェクト名: The S.E.A Project

(The Sex Education Awareness: 性教育の意識向上)

背景:

世界保健機構によると、ベトナム、日本、その他4カ国のASEAN諸国は、アジアにおいて最も中絶率が高い国のトップ10に入っている。

ベトナム保健省によると、15～19歳の学生の人工中絶

率はベトナム国内の人工中絶全体の60～70%を占めている。

10代の若者は安全な性行為についての知識が不足しており、緊急避妊薬に頼っているが、薬の使用によるリスクに十分理解していないことが多い。よって特に地方の10代の若者が正しい性教育の知識を身につける必要がある。

内容：

- バクザン省の学生500名を対象
- 約300分間のプログラム
- ゲームやグループ・ディスカッションなど学習者中心の活動
- 視覚的に知識を効果的に伝える（写真の展示、寸劇など）
- 一般企業からスポンサーを募り、学生（15歳以上）向けのギフトボックス（コンドーム、タンポン、月経カップ、生理用品関連）を準備

期待される効果：

- 思春期の自分の変化に気づく
- 安全でない性行為の有害な影響（淋病、梅毒、B型肝炎、HIVなど）と、女子学生の望まない妊娠の認識
- 思春期の身体のケア方法を知る（月経、夢精）
- 安全な避妊方法を知る：コンドーム、緊急避妊薬

タイムライン：

- Act 1：対象学校の選定・法的書類の準備
- Act 2：ボランティアの募集
- Act 3：プロジェクト実行
- Act 4：ソーシャルメディアでのプロジェクト発信
- Act 5：学生にアンケートを実施し、安全な性行為に対する認識と身体の発達に関する基礎知識を調査
- Act 6：プロジェクト実行
- Act 7：アンケート実施
- Act 8：知識共有のため Facebook グループを作成

第9章

日本国内活動2

1

日本国内活動（東京プログラム②）日程

月日	時間	活動内容
12月4日 (水)	8:30 10:00-11:40 14:15-20:45	入港（東京港） 入国手続き サマリーフォーラム準備
	7:00 7:15 7:30 7:40 8:40 8:50 13:55	<各国政府代表者> 成田空港又は羽田空港に到着 ベトナム（VN310）成田空港 マレーシア（MH88）成田空港 ブルネイ（BI695）成田空港 カンボジア、ラオス、タイ（TG642）成田空港 東ティモール（GA880）成田空港 インドネシア（GA874）羽田空港 フィリピン（PR422）羽田空港 到着後乗船
	17:20-17:35	<各国NL、YL、AYL> 内閣総理大臣表敬訪問（於 内閣総理大臣官邸） ・ PY代表マレーシアYL挨拶 ・ 石破茂内閣総理大臣挨拶 ・ 記念撮影 にっぽん丸泊
12月5日 (木)	10:00-12:45 14:15-15:30 15:45-20:45	サマリーフォーラム（於 ドルフィンホール） <各国NL、PY> 地方プログラム説明 自主活動
	14:00-16:00	<各国政府代表者、事後活動組織代表者> 令和6年度「東南アジア青年の船」事業（48回）各国政府代表者連絡会議（於 ドルフィンホール） にっぽん丸泊
12月6日 (金)	9:30 9:30 10:05 10:35 10:55 11:45 11:45 16:50	<ファシリテーター、各国政府代表者、各国事後活動組織代表者> 成田空港又は羽田空港から帰国 フィリピン（PR431）成田空港 ベトナム（VN311、VN307）成田空港 マレーシア（MH89）成田空港 カンボジア、ラオス、タイ（TG683）羽田空港 シンガポール（JL037）羽田空港 ブルネイ（BI696）成田空港 インドネシア（GA875）羽田空港 メキシコ（NH180）成田空港

月日	時間	活動内容
12月6日 (金) 12月8日 (日)		<各国NL、PY> 地方プログラム(3泊4日、詳細は(2) 地方プログラム日程を参照) ・ 奈良県 (SG-A, SG-F) ・ 高知県 (SG-B, SG-D) ・ 熊本県 (SG-C, SG-H) ・ 北九州市 (SG-D, SG-E) ・ 函館市 (SG-I, SG-J)
12月9日 (月)	19:00-20:30	地方プログラムから帰京 国立オリンピック記念青少年総合センターに到着 チェックイン SGミーティング 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
12月10日 (火)	9:15-9:45 10:00-14:00	チェックアウトオリエンテーション 都内視察
	11:00-11:30	<各国NL、YL、AYL> 佳子内親王殿下御引見(於 赤坂東邸) ・ PY代表フィリピンYL挨拶
	15:00-16:00 17:00-18:30	解散式 ・ 由布和嘉子内閣府大臣官房審議官(青年国際交流担当室長) 挨拶 ・ PY代表シンガポールYL挨拶 ・ 修了証授与 解散交歓会 ・ 辻清人内閣府副大臣挨拶 ・ PY代表タイYL挨拶 ・ 記念品交換 ・ 由布和嘉子内閣府大臣官房審議官乾杯 ・ 各国文化紹介 ・ 記念撮影 国立オリンピック記念青少年総合センター泊
12月11日 (水)	9:30 9:35 10:55 11:00 11:20 11:45 11:45 11:45	<ASEAN各国NL、PY> 成田空港又は羽田空港から出発 ベトナム (VN311) 成田空港 フィリピン (NH869) 羽田空港 シンガポール (JL037) 羽田空港 東ティモール (GA881) 成田空港 マレーシア (JL723) 成田空港 ブルネイ (BI696) 成田空港 カンボジア、ラオス、タイ (TG643) 成田空港 インドネシア (GA875) 羽田空港

2 日本国内活動（地方プログラム）日程

12月6日、下船後、地方プログラムの行き先別に、それぞれバスで東京駅、羽田空港へ向かった。

①奈良県（SG-A、SG-F）

月 日	時 間	活動内容
12月6日 (金)	10:00-12:15 12:50-13:19 14:00 18:30-20:00	東京駅から京都駅へ移動（のぞみ221） 京都駅から近鉄大和西大寺駅へ移動（近鉄特急4219） 【地元青年との交流】 東大寺及び奈良公園、ならまち散策 歓迎レセプション（於 ホテル日航奈良） ・ ホームステイ・マッチング ・ PYによるファッションショー ・ 地元青年によるパフォーマンス ・ 記念撮影
12月7日 (土)		～終日ホームステイ～
12月8日 (日)	20:00	ホームステイ先から集合（於 ホテル日航奈良） ホテル日航奈良泊
12月9日 (月)	10:00 11:20-11:56 12:21-14:33 15:30	奈良県副知事表敬訪問 ・ 西村高則奈良県副知事挨拶 ・ 日本NL挨拶 ・ シンガポールNL挨拶 ・ 記念品交換 ・ 記念撮影 近鉄奈良駅から京都駅へ移動（近鉄特急1106） 京都駅から東京駅へ移動（のぞみ18） 国立オリンピック記念青少年総合センター着



西村高則奈良県副知事表敬訪問（12月9日）

②高知県 (SG-B、SG-G)

月 日	時 間	活動内容
12月6日 (金)	9:10-10:40 13:30 16:15-16:45 17:00-19:00	羽田空港から高知龍馬空港へ移動(JAL493) 昼食 高知県立牧野植物園視察 ・ 高知県プログラム説明 ・ 牧野植物園子どもガイドプレゼンテーション ・ 牧野植物園散策 高知県表敬訪問 ・ 高知県出席者紹介 ・ PY紹介 ・ 池上香高知県文化生活部長挨拶 ・ ラオスNL挨拶 ・ ベトナムNL挨拶 ・ 懇談 ・ 記念品交換 ・ 記念撮影 ホームステイ・マッチング
12月7日 (土)		～終日ホームステイ～
12月8日 (日)	10:00-10:30 10:30 17:00	ホームステイ先から集合 (於 ザ・クラウンパレス新阪急高知) 【地元青年との交流】 日曜市、高知よさこい情報交流館見学 昼食 高知城、高知城歴史博物館見学 夕食 ザ・クラウンパレス新阪急高知泊
12月9日 (月)	11:00-11:50 13:10-14:25 16:00	高知龍馬空港へ移動 昼食 高知龍馬空港から羽田空港へ移動 (ANA566) 国立オリンピック記念青少年総合センター着



池上香高知県文化生活部長表敬訪問 (12月6日)

③熊本県 (SG-C、SG-H)

月 日	時 間	活動内容
12月6日 (金)	10:05-12:00 13:45 15:30-16:00 16:30-18:30	羽田空港から阿蘇くまもと空港へ移動(JAL627) 昼食 水前寺成趣園散策 熊本県副知事表敬訪問 ・ 竹内信義熊本県副知事挨拶 ・ カンボジアNL挨拶 ・ インドネシアNL挨拶 ・ 出席者紹介 ・ 記念品交換 ・ 懇談及び質疑応答 ・ 記念撮影 ホームステイ・マッチング ・ シンガポールYL挨拶
12月7日 (土)		～終日ホームステイ～
12月8日 (日)	10:00 10:30-17:00 13:30-15:45 16:00	ホームステイ先からより集合 (於 熊本市総合体育館・青年会館) 【地元青年との交流】 開会式 ・ オリエンテーション ・ アイスブレイキング ・ PYによるパフォーマンス ・ タイYL挨拶 ・ 記念撮影 昼食 グループ活動 ・ 郷土料理調理体験(いきなり団子など) ・ 日本文化体験(牛深ハイヤ踊り) 全体会 ・ いきなり団子試食 ・ 牛深ハイヤ踊り 総踊り ・ 感想発表 ・ 記念撮影 KOKO HOTEL Premier泊
12月9日 (月)	9:30 11:00 12:45-14:15 16:00	阿蘇くまもと空港へ移動 解散式 (於 阿蘇くまもと空港会議室) ・ ブルネイPY挨拶 ・ フィリピンAYL挨拶 阿蘇くまもと空港から羽田空港へ移動(JAL628) 国立オリンピック記念青少年総合センター着



竹内信義熊本県副知事表敬訪問 (12月6日)

④北九州市 (SG-D、SG-E)

月 日	時 間	活動内容
12月6日 (金)	9:15-11:10	羽田空港から北九州空港へ移動(SFJ075) 昼食、門司港散策
	15:15-17:15	小倉城庭園見学 ・ 茶道体験
	17:30-18:00	北九州市表敬訪問 ・ 出席者紹介 ・ 大庭千賀子北九州市副市長挨拶 ・ ブルネイNL挨拶 ・ マレーシアNL挨拶 ・ 懇談及び質疑応答 ・ 記念品交換 ・ 記念撮影
	18:30-19:30	ホームステイ・マッチング (於 小倉城庭園) ・ PYによるパフォーマンス
12月7日 (土)		～終日ホームステイ～
12月8日 (日)	10:00	ホームステイ先から集合
	11:00-12:30	【地元青年との交流】 環境ミュージアム見学
	14:20-16:20	昼食 竹あかり竹灯籠作り体験
	17:10	若戸渡船戸畑渡場着 渡船で若松へ移動 夕食 ホテルクラウンパレス小倉泊
12月9日 (月)	10:30-11:00	北九州空港へ移動
	12:30	昼食 お別れ会 (於 北九州空港会議室) ・ ベトナムYL挨拶 ・ ラオスYL挨拶
	13:50-15:20	北九州空港から羽田空港へ移動(ANA3882/SFJ082)
	16:30	国立オリンピック記念青少年総合センター着



大庭千賀子北九州市副市長表敬訪問 (12月6日)

⑤函館市 (SG-I、SG-J)

月 日	時 間	活動内容
12月6日 (金)	9:45-11:05 13:00-14:30 15:00-15:35 16:00-18:00 19:30	羽田空港から函館空港へ移動 (ANA553) 昼食 箱館奉行所見学 函館市表敬訪問 ・ 佐藤聖智子函館市副市長挨拶 ・ フィリピンNL挨拶 ・ タイNL挨拶 ・ 懇談 ・ 記念品贈呈 ・ 記念撮影 【地元青年との交流】(於 函館市地域交流まちづくりセンター) ・ グループトーク ・ PYによるパフォーマンス ・ 地元参加青年によるダンスセッション 夕食 グループ毎にクリスマス・ファンタジー観賞 ホテルチェックイン プレミアホテル・キャビンプレジデント函館泊
12月7日 (土)	9:00-10:30	ホームステイマッチング ・ マレーシアPY挨拶 ・ PYによるパフォーマンス
12月8日 (日)		～終日ホームステイ～
12月9日 (月)	9:00 9:20 10:30-11:00 11:50-13:20 15:00	ホームステイ先より集合 (於 北海道国際交流センター) 旧函館区公会堂散策 函館空港へ移動 函館空港から羽田空港へ移動 (ANA554) 国立オリンピック記念青少年総合センター着



佐藤聖智子函館市副市長表敬訪問 (12月6日)

3 石破茂内閣総理大臣表敬訪問

12月4日17時20分より、内閣総理大臣官邸の大ホールにて表敬訪問を行った。

始めに、藤森俊輔管理官の先導により、石破内閣総理大臣が各国参加青年代表の前方に進み、各国ナショナル・リーダーと順次握手を交わした。

その後PY代表としてマレーシアYLが挨拶をし、続いて石破内閣総理大臣から挨拶をいただき、最後に、石破内閣総理大臣と参加青年の代表者の記念撮影を行った。



4 佳子内親王殿下御引見

12月10日11時より、赤坂東邸にて参加青年の代表者が佳子内親王殿下のご引見を賜った。

佳子内親王殿下からの歓迎のお言葉に続き、PY代表としてフィリピンYLが挨拶を行った。その後、参加青年の代表者は、3～4の国ごとに3つのグループに分かれて、

内親王殿下とご懇談をする機会を賜った。

その後、佳子内親王殿下と参加青年の代表者の記念撮影を行い、最後に由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）からお礼のご挨拶を述べた。

5 解散式

12月10日15時から、国立オリンピック記念青少年総合センターの国際会議室にて解散式を行った。

始めに由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）から挨拶があり、その後PY代表としてシンガポールYLが挨拶をした。続いて由布内閣府官房審議官から各国YLに終了証を授与した。



6 解散交歓会

12月10日17時から、レセプションホールで解散交歓会を開催した。辻清人内閣府副大臣からの挨拶の後、PY代表としてタイYLが挨拶をし、続いて由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）が乾杯挨拶をした。

続いて、各国PYによる文化紹介パフォーマンスや辻内閣府副大臣との懇談をし、最後に記念撮影を行った。



7 帰国

12月11日、日本以外のNLとPYは国別に順次ロビーに集合した後、互いに別れを惜しみつつ、それぞれバスで

成田空港又は羽田空港に向かい、帰国した。

8 各国政府代表者連絡会議③

第48回事業の終盤の2024年12月5日に、にっぽん丸の船上にて、各国政府代表者連絡会議を開催した。各国

政府代表者連絡会議では、第48回事業内容の評価や第49回事業の方針について協議を行った。

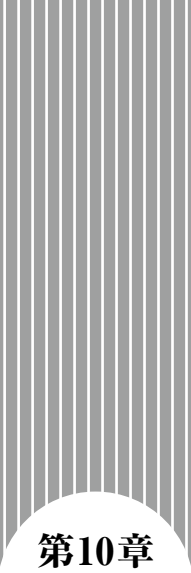


9 日本参加青年の帰国後研修

日本参加青年20名に対し、12月11日及び12日の2日間、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて帰国後研修を行った。日本参加青年は事業の振り返りを行う

とともに、事業報告会の準備を進めた。また、船内で話し合い、サマリーフォーラムで発表した事後活動プロジェクトについて、更に議論を深めた。

月日	時間 (日本時間)	活動内容
12月11日 (土)	9:00-9:30 9:30-10:00 10:00-12:00 13:30-14:00 14:00-15:00 15:00-17:00 19:00-21:00	自主活動 交通費の説明 自主活動 自主活動 IYEOについての説明 自主活動 自主活動
12月12日 (日)	9:00-9:30 9:30-12:00 12:00	保険の説明 自主活動 解散

A series of thin, vertical white lines of varying heights, creating a textured, column-like effect in the center of the page.

第10章

本事業に対する評価等

第48回「東南アジア青年の船」

管理官

藤森 俊輔



2024年の「東南アジア青年の船」事業（第48回）は、2019年以来5年ぶりに船舶を使用した通常の形態での事業を再開することができた。この事業は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機として、2020年から2022年まではオンライン事業として実施することを余儀なくされ、2023年（第47回）については、ASEAN諸国の青年を航空機で日本に招へいする形で実施していた。2024年10月、「東南アジア青年の船」事業は、1974年の最初の航海から半世紀を迎えたが、この50年目の節目に私たちの船を再び東南アジアの海に戻すことができたことに満足している。

また、管理部としては、大きな事件・事故なく安全に事業を実施することが最優先事項であるが、5年間の中断の契機となったのが感染症であったこともあり、事業期間中の参加者の健康管理にとりわけ注意を払った。インフルエンザ等の感染症に罹患して一定期間病室で療養した参加者もいたものの、168人の参加者全員が最後まで事業に参加することができ、無事にそれぞれの国に送り出すことができたことに責任者として安堵している。

こうして実施された第48回事業への評価については、120ページでご紹介した2024年12月5日の各国政府代表者連絡会議でもすでに議論されたところであり、ASEAN諸国の政府代表者より概ね好意的な評価をいただいていることをうれしく思っている。この事業の真の成果を見極めるには、十年後あるいは二十年後の参加者たちの活躍を待つしかないが、本章でご紹介する参加者の事業評価アンケートなども踏まえ、ASEAN諸国政府と協議しつつ、次回以降のより良い事業実施に向けて、事業内容の不断の見直しを進めてまいりたい。この点、5年ぶりに外国航路での事業を再開させることになった第48回事業についても、2019年の事業内容に比して多くの変更や見直しを行っている。実際に行われた事業内容は前章までに詳しく紹介されているが、ここでは最後に船を使って事業を行った第46回事業からの主な変更点についてその経緯を含めて報告させていただく。

1 参加国

ミャンマーについては、2021年2月のクーデター以降、人権状況は悪化の一途を辿っていることから、ASEANの開催するハイレベルの会合においては、政治レベルの

参加を認めない措置がとられているほか、日・ASEAN間の会議においても同様の措置がとられている。こうした中、日本政府としては、「東南アジア青年の船」の参加者は各参加国政府が独立して選考を行うという本事業の特性も踏まえ、2023年に続き、2024年の第48回事業についてもミャンマーの参加を認めないこととした。

また、東ティモールについては、2022年11月にASEANへの加盟が原則として承認されており、これ以降、ASEANの各種会合や日・ASEAN間の会議にもオブザーバーとして参加している。こうした状況を踏まえ、これまでのASEAN新規加盟国の「東南アジア青年の船」事業参加の慣行に則り、日本政府としては、第48回事業にオブザーバーとして東ティモールを招待することを提案した。これらの2つの方針は、2023年12月8日に開催された各国政府代表者連絡会議において承認された。

2 寄港地

寄港地決定に当たっては、5年ぶりに外国航路での事業を再開することになったこと及び航海日程の制約上寄港地が実質的に2か所に限られることから、2023年9月にASEAN諸国に対して寄港地受入れ希望について照会を行った。その結果、ベトナムとインドネシアからそれぞれホーチミン市とジャカルタへの受け入れ意思の表明があり、両国を寄港地とすることについては、2023年12月8日の各国政府代表者連絡会議において承認された。なお、従来に比べると寄港地数は少なくなったが、船上で伝統的に行われてきた国旗掲揚式については、それぞれベトナム、インドネシア、日本への寄港の前に行った。

3 事後活動組織代表者の乗船

第46回事業においては、本事業の既参加青年からなる事後活動組織代表者が事後活動セッションの一部を出航前の日本国内活動の中で行い、第45回事業以前のように事後活動組織代表者が乗船することはなかった。一方で、事後活動セッションは事業全体の終盤に実施することが効果的であるとの判断に加え、2023年12月8日の各国政府代表者会議において区間乗船が既参加青年による継続的な事後活動実施の動機付けになるとの複数の政府からの意見表明を受け、第48回事業においては再び事後活動組織代表者を区間乗船させることとし、船上で事後活動セッションを行った。なお、乗船区間は、ジャカルタから東京までとした。

4 各国政府代表者連絡会議

毎年の事業内容を討議する各国政府代表者連絡会議は、第47回事業以前は毎年6月頃に開催することが定例化し

ていたが、6月頃においては各国政府が参加青年の募集をすでに開始しており、寄港地活動の受入準備も相当程度進んでいる場合が多く、実質的な討議が難しいと考えた。したがって、第48回事業については、第47回事業の終了直後の2023年12月8日に東京にて同会議を開催し(24ページ参照)、第48回事業の開催日程、寄港地、参加青年数といった事業内容の基本的事項は同会議において討議され、合意に至った。もっとも、2024年6月25日には2回目の連絡会議をオンラインで開催し、日本、ベトナム、インドネシアの各寄港地におけるプログラムの準備状況について情報交換を行った。こうした考え方に則り、第49回事業に関する最初の連絡会議についても、第48回事業の終盤の2024年12月5日ににっぽん丸の船上にて開催した。事業の終盤に連絡会議を開催することにより、各国政府代表者は実施中の事業における自国参加青年の様子を現場にて確認できることから、当該年の事業内容を評価して次回の事業について検討するのにも適当なタイミングであると考えている。

5 ディスカッション・テーマ

第48回事業のディスカッション活動においては、「日・ASEAN友好協力に関する共同ビジョン・ステートメン

ト実施計画」に位置付けられている日・ASEAN友好協力に関する項目の中から6つのディスカッション・テーマを選定した。この実施計画は、2023年12月17日に東京で開催された日本ASEAN友好協力50周年特別首脳会議において採択されたものであり、日・ASEANの参加青年が議論する枠組みを提供するものと考えた。この6つのテーマの選定は、2024年6月25日のオンラインでの各国政府代表者連絡会議において日本政府が提案し、ASEAN諸国政府に了承された。

6 参加者識別番号における性別の扱い

各参加国政府がそれぞれの代表団の参加青年の選考を終えると、日本政府において参加国名を示すアルファベットを伴う識別番号を割り振っている。この際、従来は、男女別に最初に男性、続いて女性という順番で識別番号を割り振っていたが、この方法に合理性はなく、性的指向やジェンダーアイデンティティの多様性を尊重する観点から、第48回事業においては、参加青年の名前のアルファベット表記に従って性別によらずアルファベット順に割り振った。また、本報告書においても、参加者の一覧において性別の表記は行わないこととした。

2 船長評価

にっぽん丸 船長
内田幸一



東南アジア青年の船に参加された皆様、そして、事業を支えている皆様、こんにちは。今回のプログラムを終え、参加青年の皆様は、にっぽん丸で共に過ごした仲間との貴重な経験を糧に、それぞれの場所で活躍していることでしょう。私は、変わらずにっぽん丸の仕事に励んでいます。SSEAYP航海を振り返るため資料を開くと、29日間の記憶がまるで昨日のこのように蘇ります。

私は、これまでに航海士としてSSEAYP航海に取り組んだ経験はあるものの、船長としては初めてのSSEAYP航海でした。11月7日、出航式の日、PY、青年の船事業関係者、そして来賓の皆様がいるなか、ドルフィンホール壇上の船長席で、これから始まる航海への緊張と12月4日に東京港へ無事に帰着しなければならない重圧を感じていました。出港時間が近づくと、デッキではPY全員がいよいよ始まる航海への期待感に高揚している姿が印象的でした。

その日の夜には東京湾を出て、まずはフィリピン北方のルソン海峡へ向けて、にっぽん丸は太平洋を全速力で航行いたしました。このとき、にっぽん丸の進路には、台風22号がフィリピン東方海上から南シナ海へ進んでいるところでした。迂回ルートを準備していましたが、台風22号は予想よりも早く南シナ海へ進んだため、にっぽん丸は想定した航路を辿ります。ただ、台風の影響を受けなかったとはいえ、大海原ですので、ゆりかごのような揺れがあり、船酔いを経験したPYもいたことでしょう。

にっぽん丸がルソン海峡に近づく頃、さらに台風23号が発生し、うしろから追いかけてくる状況となりました。ルソン海峡からホーチミンまで、常用航路で向かうと台風23号に追いつかれてしまいます。そのため、にっぽん丸はルソン島西岸を南下し、南シナ海の南方海域から大回りをしてホーチミンへ向かいました。東京からホーチミンへの航海では、立て続けに発生した台風のあいだを通り抜けたかたちで、台風発生タイミングが違えば、大きな遅延となりかねず、安堵いたしました。その後の航海も比較的穏やかで、夕暮れ時にはデッキで夕日を楽しむPYもいて、船上生活に馴染んでいる様子が見えます。

ナショナル・プレゼンテーションでは各国から丁寧な

招待を受けました。国ごとに創意工夫があり、高い完成度のビデオクリップに驚いたことを覚えています。船内では資材に限られ創作に苦労があったかもしれません。そこはチーム一丸となって乗り越えたのでしょう。本番のプレゼンテーションで伝わります。そして、最後のフォトタイムでは会場の一体感を楽しみました。

11月14日、最初の寄港地ホーチミンでは、早朝からサイゴン川を航行しました。川は潮流の変化が激しく、水先人の助言をもとに、直前まで着岸時間や着岸舷を調整することになり、管理部、関係者の皆様にご不便をお掛けいたしました。安全運航へのご協力に感謝いたします。

11月21日、次の寄港地ジャカルタ（タンジュンプリオク港）では、狭い埠頭の間をうしろ向きに船を進め、所定の位置に止めた水先人の技術はさすがです。ホーチミン、ジャカルタともに出港時には大勢の方からの見送りを受け、活発な寄港地活動の賜物と感心いたしました。

さて、今回の航海では2回、赤道を通過しています。1回目はホーチミンからジャカルタへの航海中で、深夜、何事もなかったかのように北半球から南半球へ入りました。2回目はジャカルタから東京へ帰る途中です。11月26日17時43分。南半球から北半球へ、赤道通過を汽笛でお知らせいたしました。特別な瞬間を感じていただけましたか。

東京帰着の前日は、時間を調整して駿河湾を航行し、富士山の雄大な景色を見ました。多くのPYがその景色を写真に収めている姿や、ずっと富士山を眺めているPYの姿を見ると、日本を知ってもらおう一助になったか

と思います。

12月4日、東京港へ入港し、着岸が完了したときは、11月7日の出航式で感じた緊張感と重圧が、航海を終えた達成感と無事に帰着した安堵に変わりました。にっぽん丸を支えてくださった多くの関係者の皆様にお礼申し上げます。

ところで、Captain's Lectureでは覚えて欲しい数字の話をしました。PYの皆様、記憶にありますか。航海で使用する距離（1 mile=1852m (1.852km)）の話です。あの時のようにカレンダーを使って思い出してください。今回の総航海距離は、7281mileでした。仲間と共に歩んだ距離です。

今回、東南アジア青年の船は2019年以来の船上プログラムでした。藤森管理官をはじめとする管理部の皆様、各国関係者の方々におかれましては、従前にも増して入念な準備を整えていたと思います。本事業の成功にお祝い申し上げます。

私たち、にっぽん丸乗組員が本事業に従事できたことは誇りであり、これからも青年の船事業に貢献できれば光栄です。

48回PYの皆様、にっぽん丸で共に過ごした仲間との深い絆を心から大切にしてください。そして、SSEAYPの学び多き体験はきっと自らの人生を広げてくれるきっかけになるでしょう。東南アジアの架け橋として、皆様の大きな飛躍が楽しみです。いつか、また、にっぽん丸で会いましょう。

3 参加者による事業評価

参加者に対してプログラム終了時に事業評価アンケートを実施した。集計結果は次のとおり。

注：対象は、ナショナル・リーダー11名、参加青年157名。

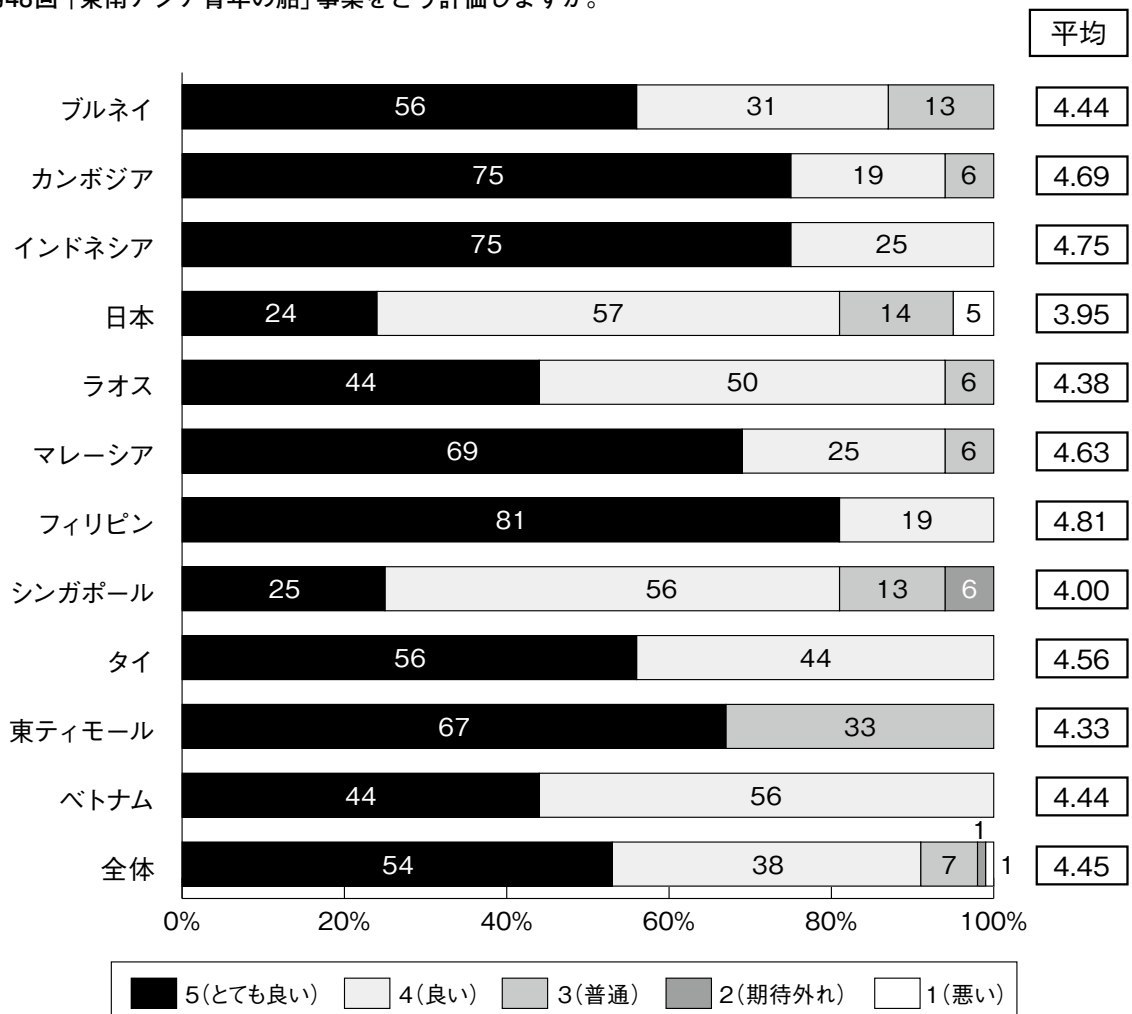
値は小数第一位で四捨五入されている。

統計処理上、合計が100%にならないことがある。

【事業全体】

事業全体に関しては全体平均は4.45で、93%の参加者が4以上（良い、とても良い）と評価した。この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に4以上（思う、強く思う）をつけた参加者はそれぞれ98%にのぼる。またこの事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対して、参加者の80～85%が「国内外の友人・ネットワーク作り」、「責任感」、「自国民としてのアイデンティティと誇り」、「集団生活への適応能力（協調性と柔軟性）」の発展に対して4以上（大きな効果がある、著しく大きな効果がある）の評価をした。

Q. 第48回「東南アジア青年の船」事業をどう評価しますか。



Q. この事業が、あなたと各国の人々との相互理解を促進することに貢献していると思いますか。

平均: 4.79



5 (強く思う) 4 (思う) 3 (普通) 2 (思わない)

Q. この事業が、あなたと各国の人々との友情を築くことに貢献していると思いますか。

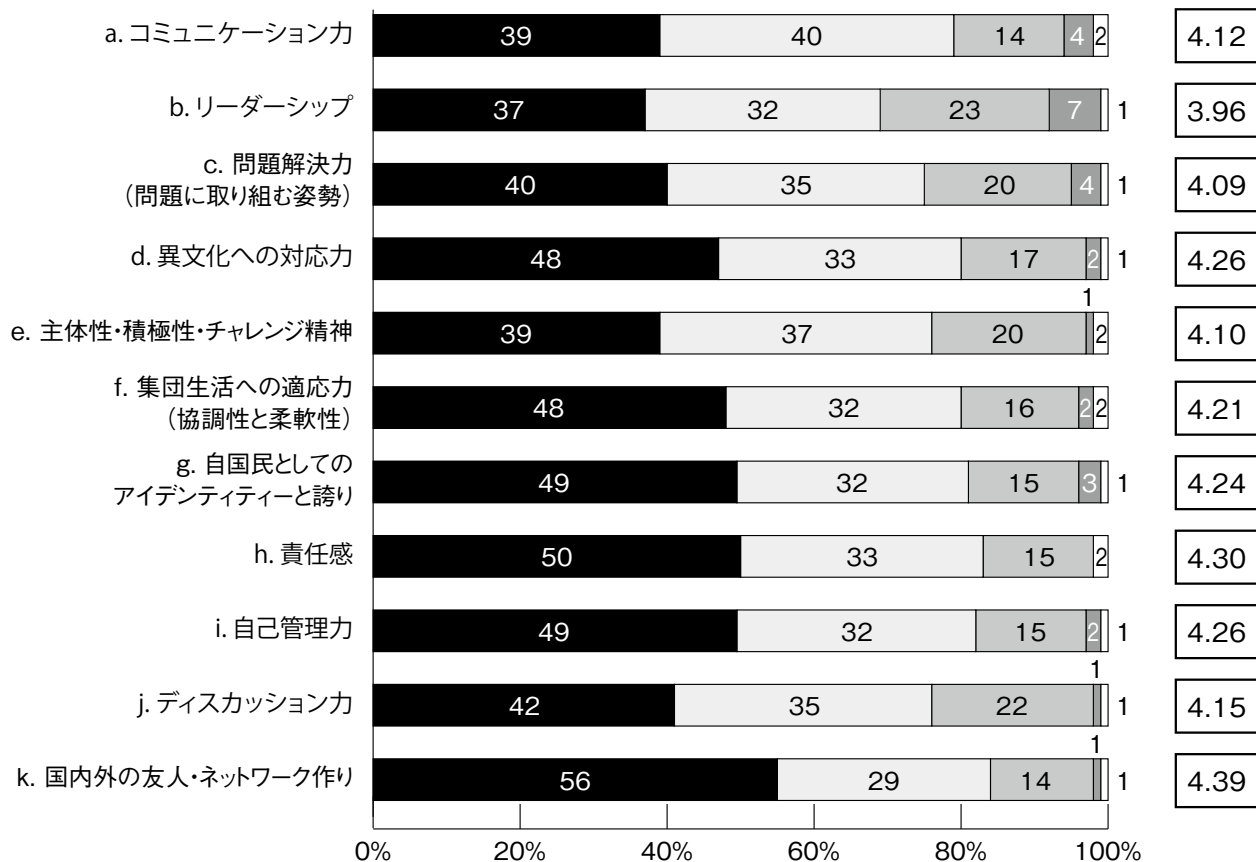
平均: 4.85



5 (強く思う) 4 (思う) 3 (普通) 2 (思わない)

Q. この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えますか。それぞれの項目について回答してください。

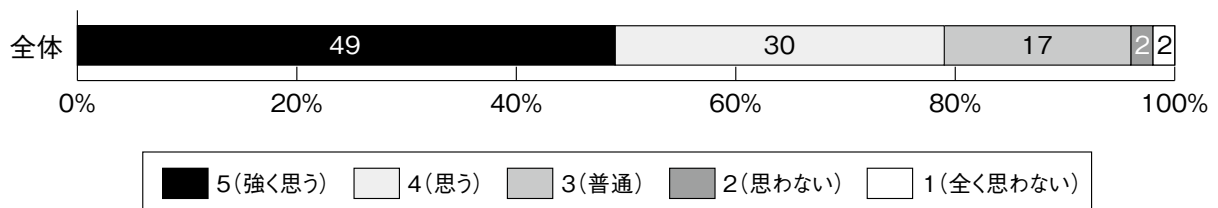
平均



5 (著しく大きな効果がある) 4 (大きな効果がある) 3 (効果がある) 2 (あまり効果がない) 1 (全く効果がない)

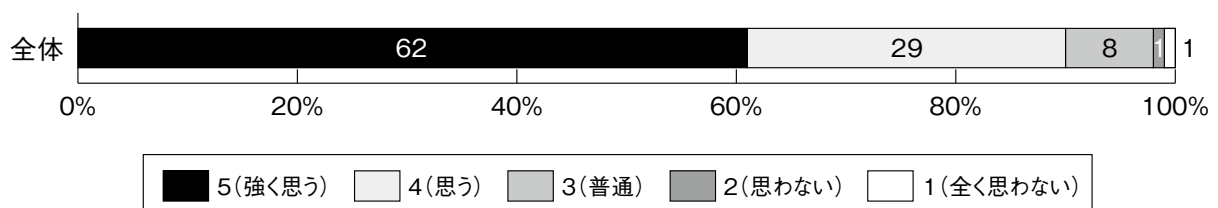
Q. この事業への参加はあなたのキャリア（職業）における将来性を高めると思えますか。

平均: 4.23



Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めると思えますか。

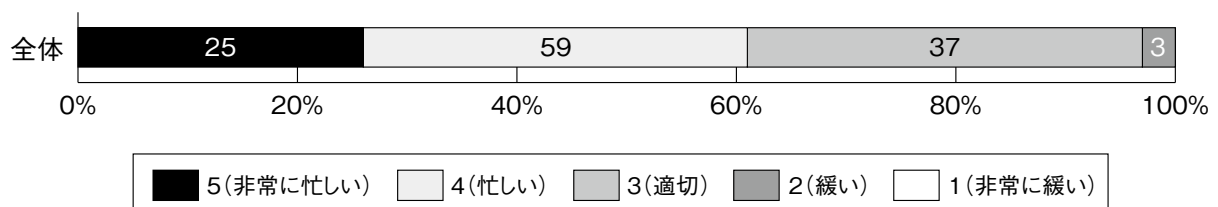
平均: 4.52



[船内活動]

Q. 船内活動の日程についてどう思いますか。

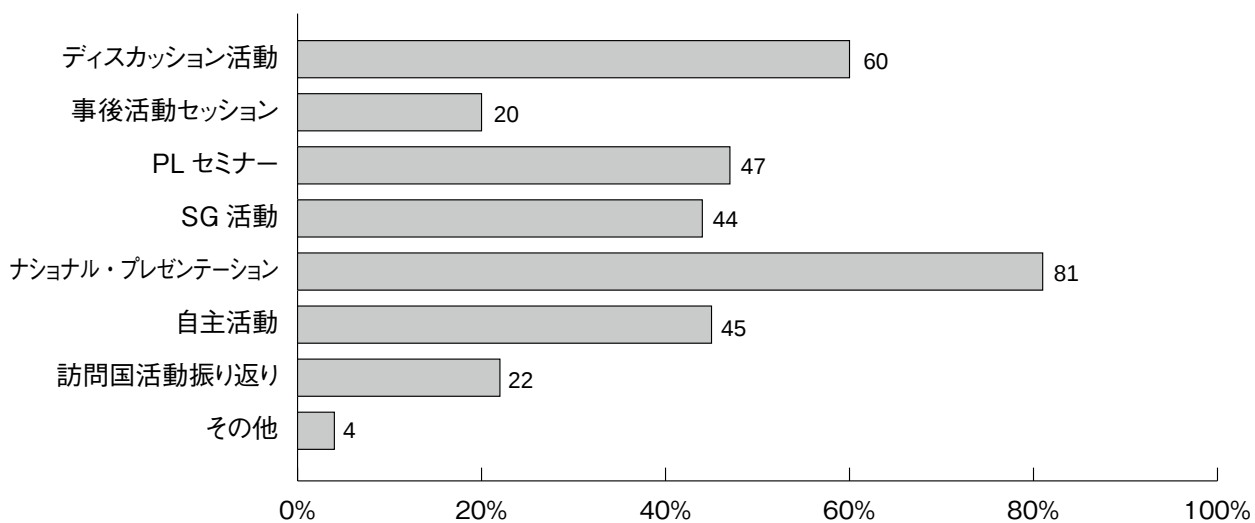
平均: 3.82



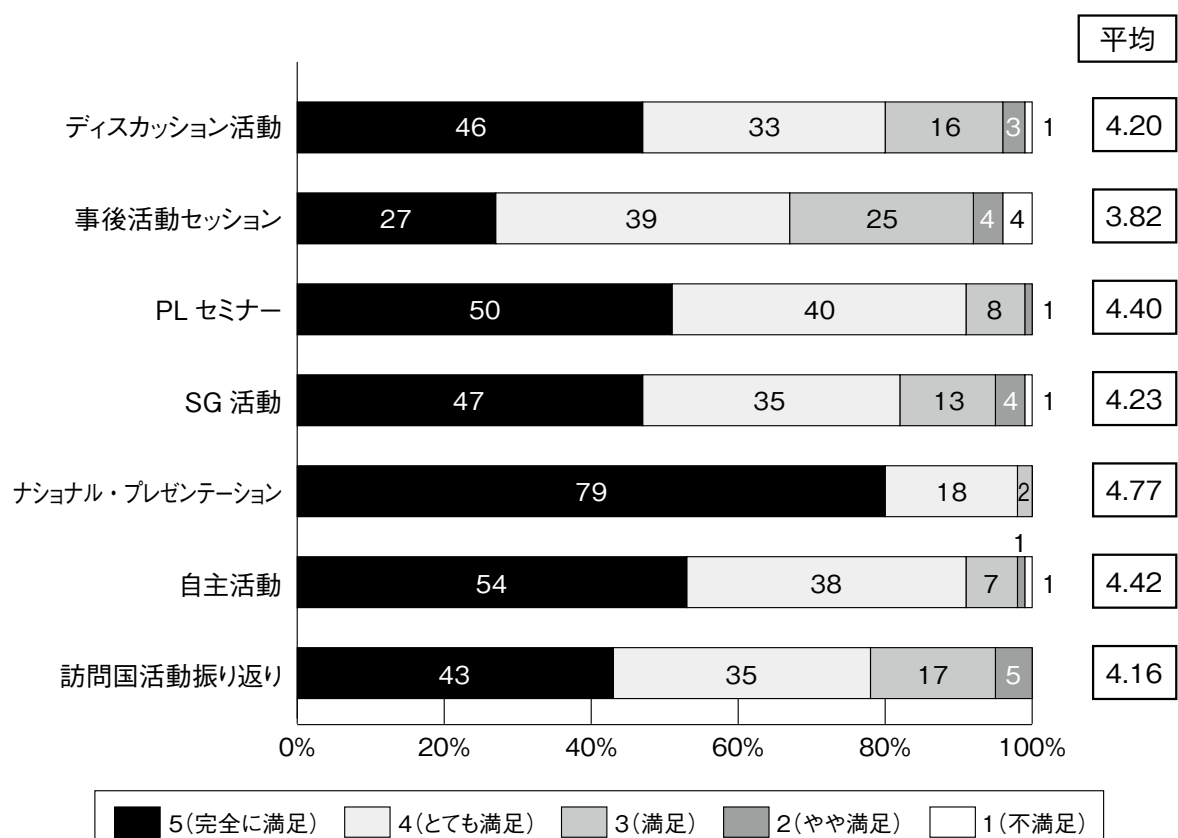
日程について、37%の参加者が3（適切）と評価し、84%が4以上（忙しい、非常に忙しい）とした。

船内活動について、「最も意義のある船内活動」として参加者が選択（1つ又は2つまで選択可）したのは、多い順に、ナショナル・プレゼンテーション（81%）、ディスカッション活動（60%）、となった。一方、それぞれの船内活動の内容についての満足度は、全体平均の高い順に、ナショナル・プレゼンテーション（4.77）、自主活動（4.42）となった。

Q. 最も意義のある船内活動は何ですか。(1つ又は2つまで選択可)



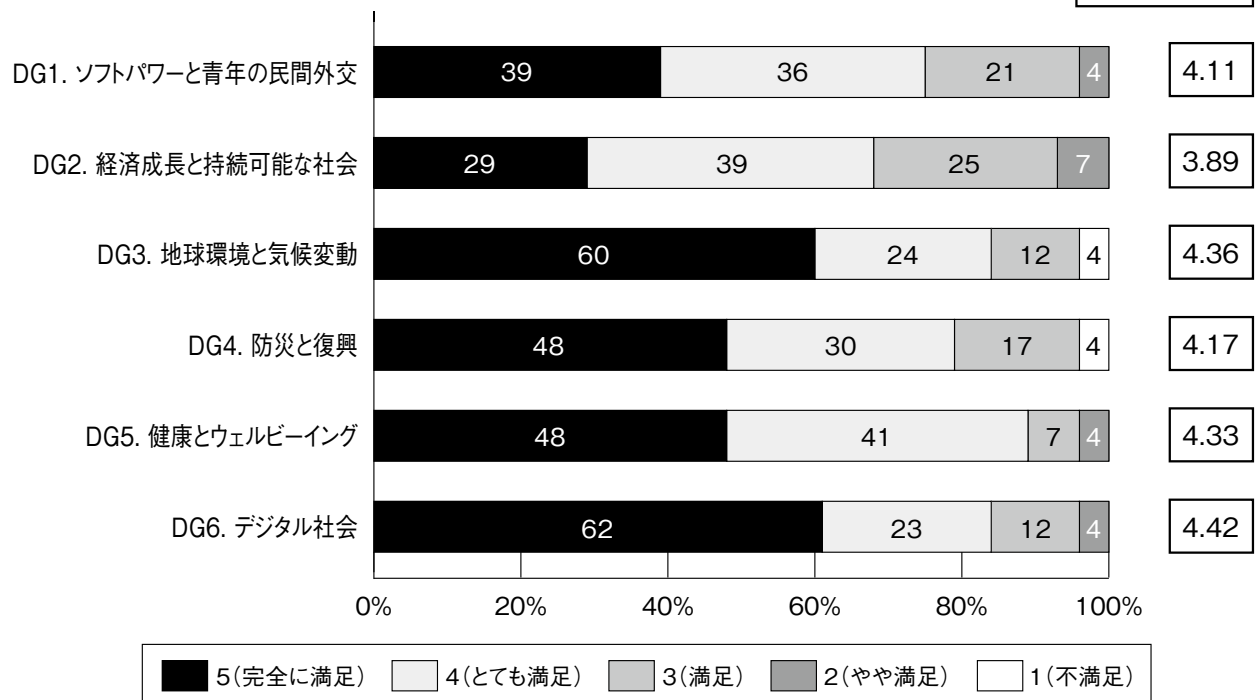
Q. 各船内活動の内容に満足していますか。



[ディスカッション活動]

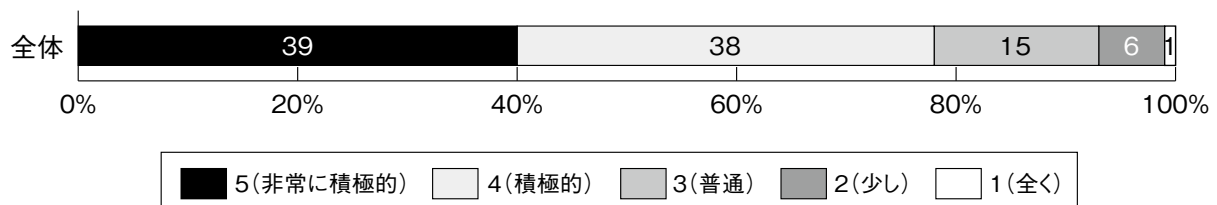
Q. ディスカッション活動の内容に満足していますか。 *PYのみ

平均: 4.20

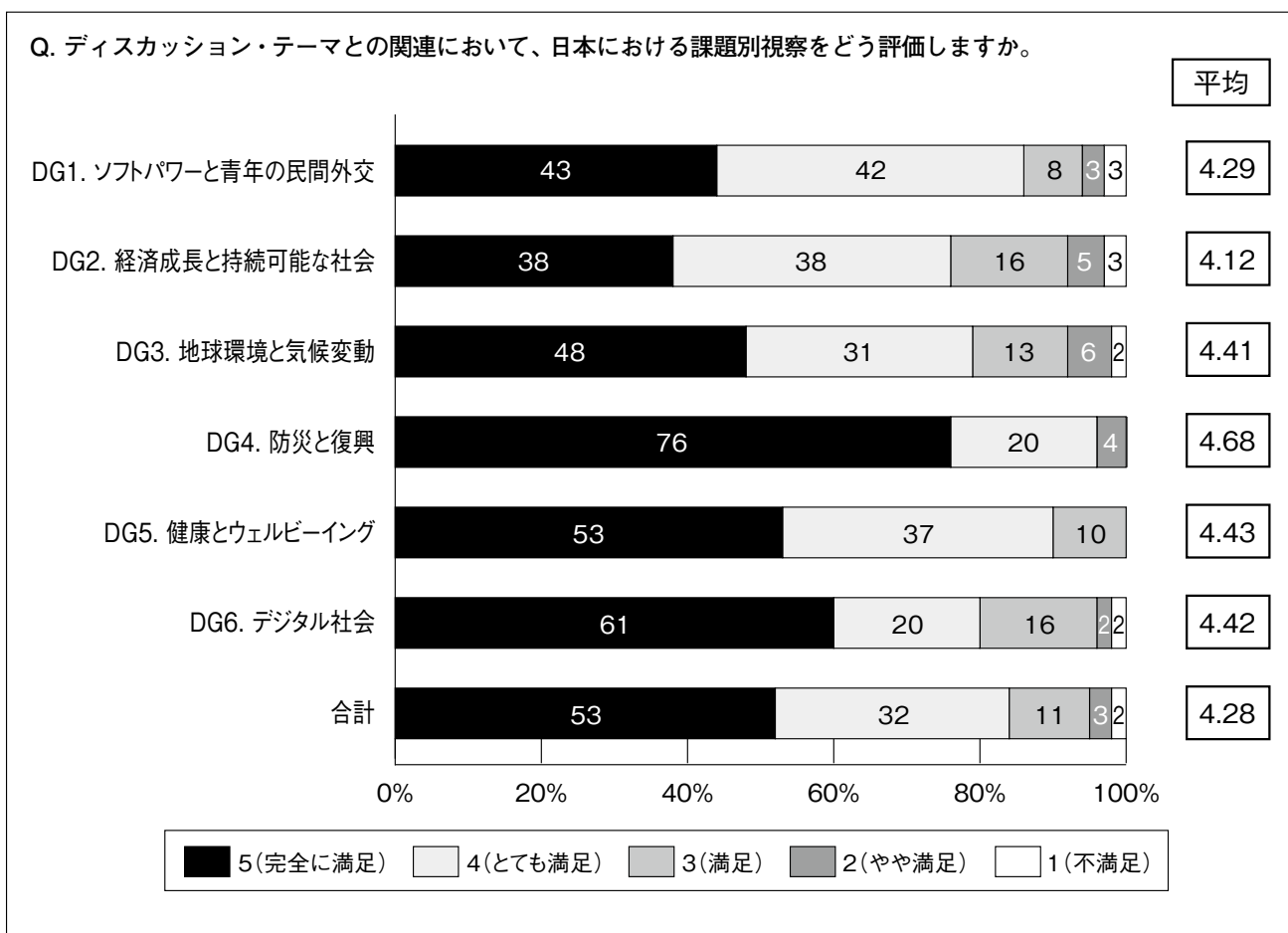


Q. あなたはどれくらい積極的にディスカッション活動に参加しましたか。 *PYのみ

平均: 4.08



【日本、ベトナム及びインドネシアにおける課題別視察】



ディスカッション・テーマとの関連において、日本における課題別視察に参加した青年の85%が4以上(良い、とても良い)と評価した。

DG1: 国会議事堂/日本アセアンセンター

DG2: 東京証券取引所 /KOITTO TERRACE (一般社団法人小岩駅周辺地区エリアマネジメント)

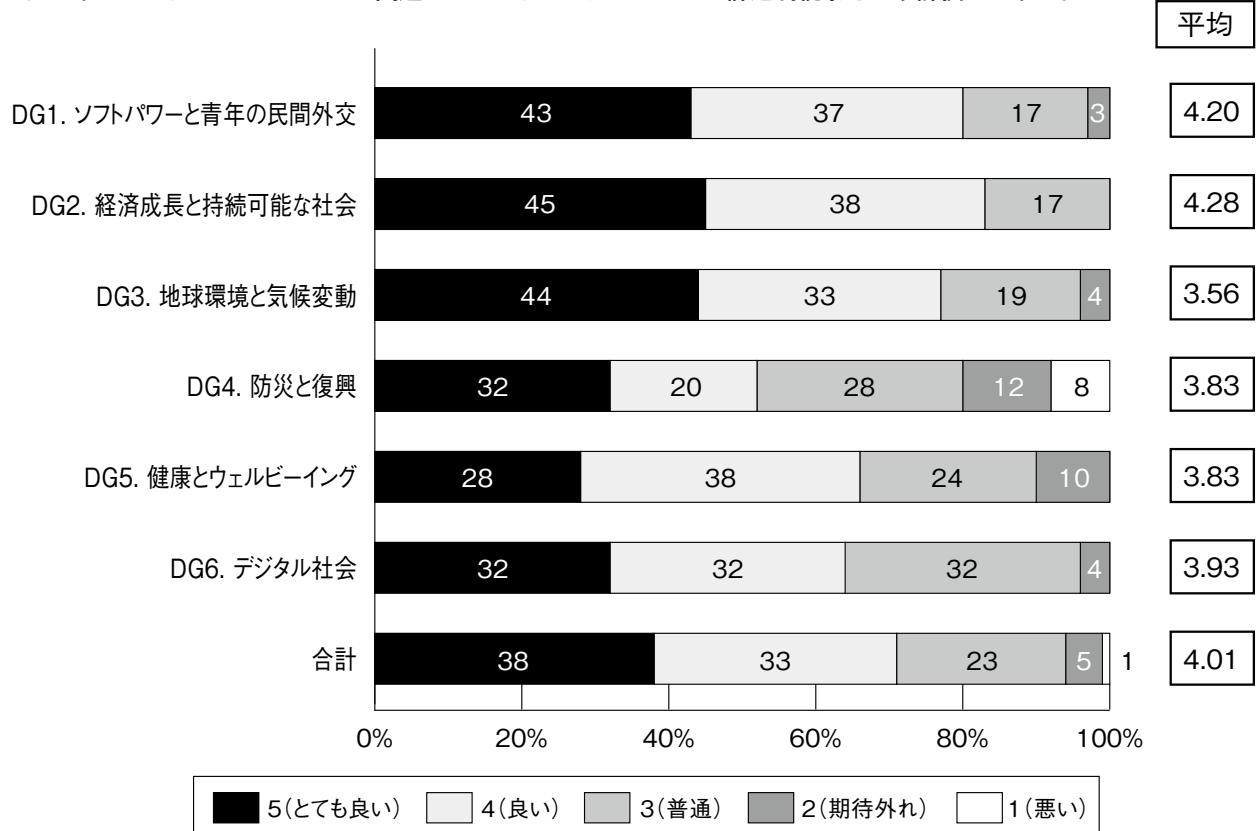
DG3: 環境省/東京都環境公社

DG4: 首都圏外郭放水路

DG5: パーソルテンプスタッフ株式会社

DG6: デジタル庁/NEC Future Creation Hub

Q. ディスカッション・テーマとの関連において、ベトナムにおける課題別視察をどう評価しますか。



ディスカッション・テーマとの関連において、ベトナムにおける課題別視察に参加した青年の71%が4以上(良い、とても良い)と評価した。

DG1: ホーチミン市人文社会科学大学

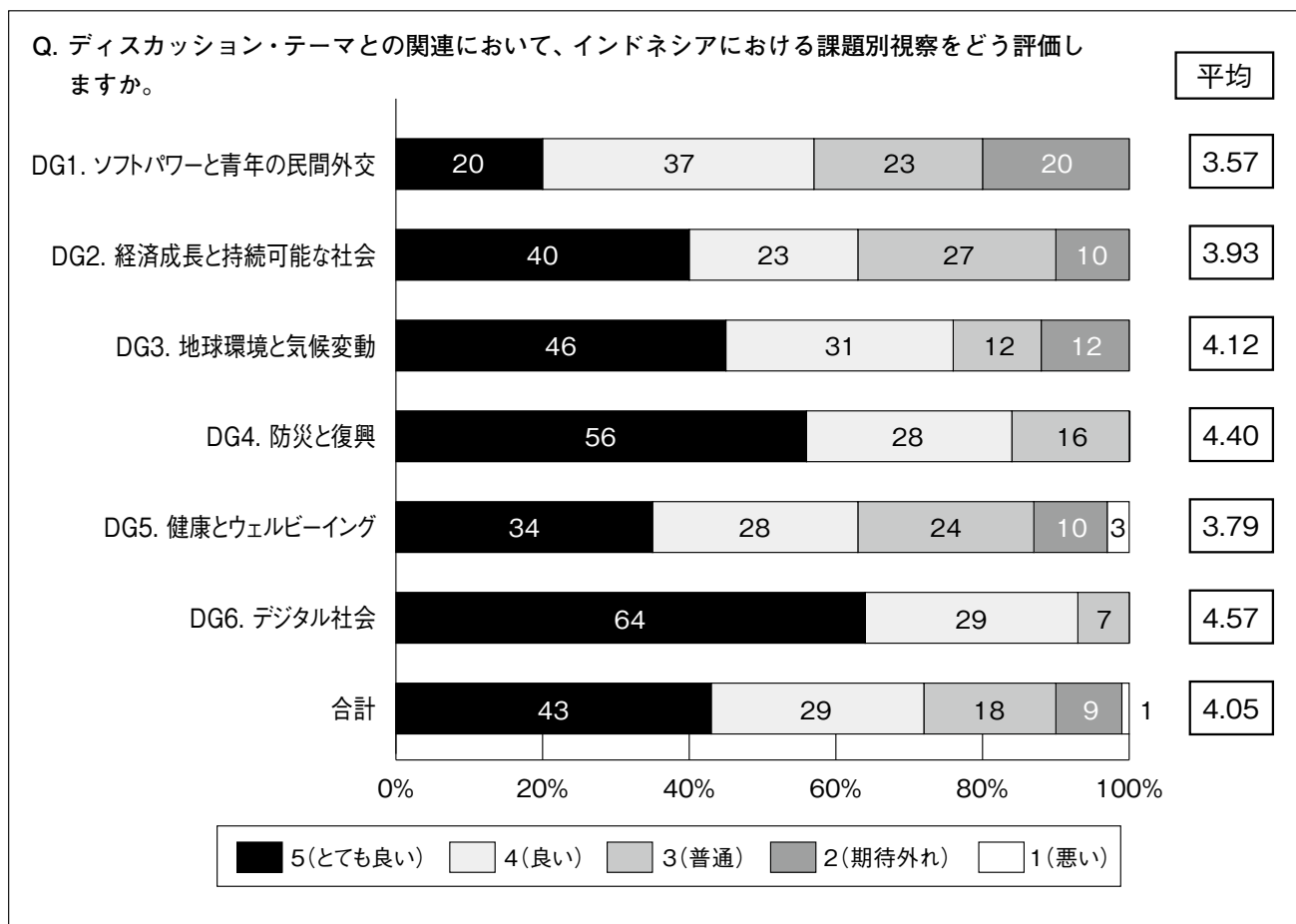
DG2: ホーチミン市経済大学

DG3: トンデュックタン大学

DG4: ホーチミン市工科大学

DG5: ホーチミン市医科薬科大学

DG6: ホーチミン市情報教育大学



ディスカッション・テーマとの関連において、インドネシアにおける課題別視察に参加した青年の72%が4以上(良い、とても良い)と評価した。

DG1: インドネシア銀行

DG2: GoTo Group

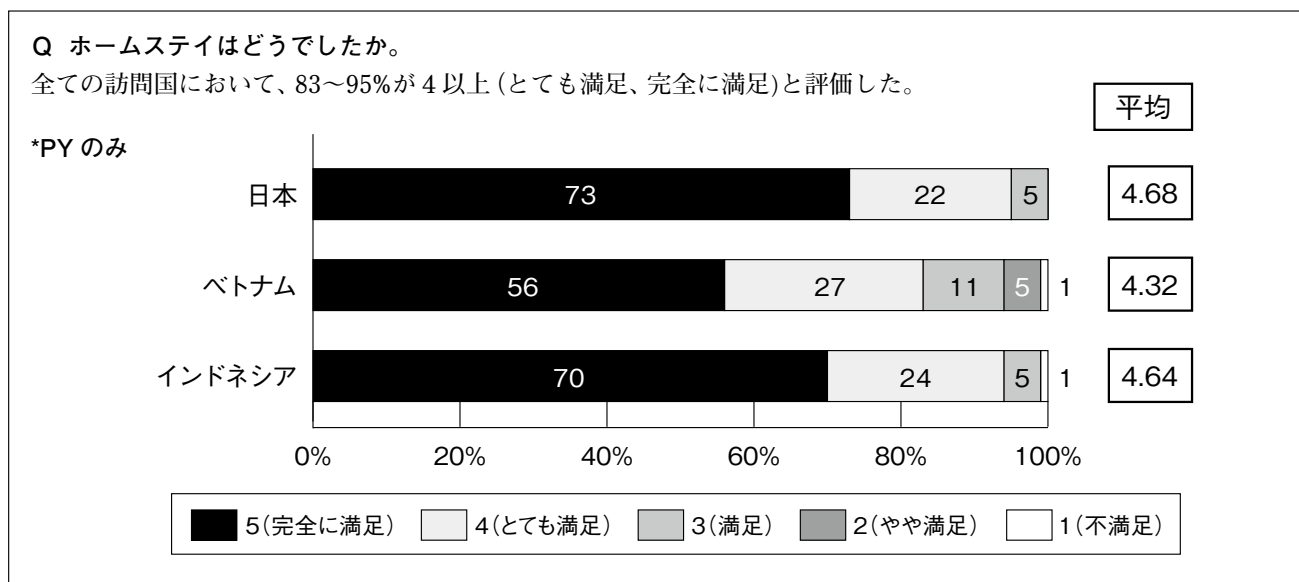
DG3: インドネシア環境フォーラム(WALHI)

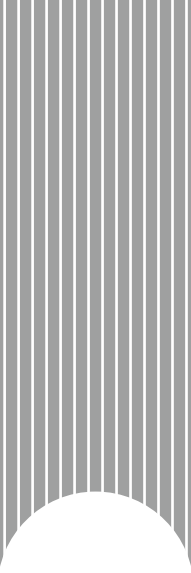
DG4: ASEAN防災人道支援調整センター(AHAセンター)

DG5: Menjadi Manusia

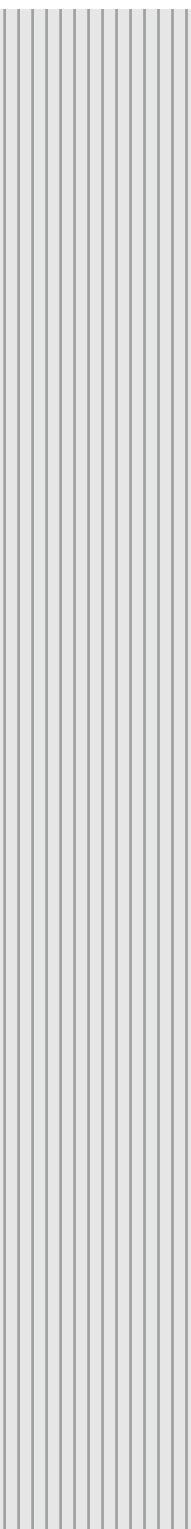
DG6: Traveloka(オンライン旅行会社)

[ホームステイ]





關係資料



2

参加青年の構成等

(1) 国別・年齢別参加青年数

国名 \ 年齢	18～19歳	20～24歳	25～30歳	31歳以上	計
日本	0	11	9	-	20
ベトナム	2	7	6	-	15
インドネシア	0	10	5	-	15
ブルネイ	0	7	8	-	15
カンボジア	0	10	5	-	15
ラオス	1	7	7	-	15
マレーシア	0	9	6	-	15
フィリピン	0	4	11	-	15
シンガポール	0	4	11	-	15
タイ	1	5	9	-	15
東ティモール	0	0	0	2	2
計	4	74	77	2	157

(注) 2024年4月1日現在

(2) 国別・職業別参加青年数

国名 \ 職業	公務員	会社員	NGO/ NPO	自営	教員	学生	その他	計
日本	2	1	1	2	0	11	3	20
ベトナム	1	5	2	0	1	6	0	15
インドネシア	1	4	2	1	2	1	4	15
ブルネイ	0	2	1	4	2	1	5	15
カンボジア	0	2	1	1	0	9	2	15
ラオス	2	3	3	1	0	6	0	15
マレーシア	3	2	0	0	1	7	2	15
フィリピン	7	1	3	0	0	0	4	15
シンガポール	4	2	0	1	0	6	2	15
タイ	3	1	1	2	1	5	2	15
東ティモール	2	0	0	0	0	0	0	2
計	25	23	14	12	7	52	24	157

(注) 2024年4月1日現在

3 SSEAYP インターナショナルの概要

(1) SSEAYPインターナショナル(SI)とは

「東南アジア青年の船」事業(SSEAYP)の参加国では、日本における内閣府(総理府／総務庁)の青年国際交流事業既参加青年の組織である日本青年国際交流機構(IYEO)と同様に活動団体を組織し、各国において各種の国際交流活動及び青少年健全育成活動等に寄与している。

SIは、1987年に、当時のこれらのASEAN 6 各国の事後活動組織とIYEOによって結成された国際的連携組織である。

(2) 構成員

正会員：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、日本、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール及びタイにおける事後活動組織

準会員：ラオス及びベトナムにおける事後活動組織

国際組織としてのSI事務局は、現在日本(IYEO)に置かれており、事務局長には田島如子氏(第26回日本PY)が選任されている。また、事務局次長には、竹内紫保氏(第39回日本PY)及びMr. Pakin Santanan(第36回タイPY)が選任されている。

(3) 目的

SIは、「東南アジア青年の船」事業に参加することで得られた友情の永続・発展を図るとともに、国際交流活動及び社会貢献活動などにより、各国事後活動組織の活動を展開することを第一の目的としている。SIの活動を通して、各国事後活動組織が協力し合い、それぞれの、またSI全体としての目的の達成に向かっている。

(4) 活動内容

① 総会の開催 (SIGA: SSEAYP International General Assembly)

年1回、開催は参加国の持ち回りで行われている。

② 各国事後活動組織代表者会議の開催 (COP: Council of Presidents)

年2回以上、各国の事後活動組織の代表者が集まり、SIの活動について話し合いを行っている。

③ 既参加青年連携強化会議 (OBSC: Onboard Ship Conference)

年1回、「東南アジア青年の船」事業実施中に、PYに対し事後活動の現状を報告するもの。

④ SSEAYP NEWSの編集

年1回、OBSC代表者によって記事の収集と編集がな

されている。主な内容は、SIの活動、各国事後活動組織の活動紹介及び各国PYの事後活動紹介等である。

⑤ SSEAYPインターナショナル賞 (SI AWARD)

3年に一度、SI構成員のボランティア精神や社会貢献の精神を促進するために、SIに貢献のあった個人もしくは団体に賞を贈るもの。

⑥ 社会貢献活動の推進

SIは、自然災害の被災地域、障害者施設、児童養護施設などに物資等を提供するほか、各国での資金集めや様々な社会貢献活動に取り組んでいる。2017年は、SI結成30周年及びASEAN設立50周年に当たる記念の年のため、SI加盟各国でそれぞれの社会貢献活動「Project 30/50」に取り組んだ。2018年からは、SI加盟各国が取り組む社会貢献活動を、「SSEAYP Go & Grow」と名付けている。

⑦ 人材ネットワークの推進

似たような分野の職業や学問に従事している既参加青年同士が、SIの人材ネットワークを活用し、専門分野に関する情報の共有などを行っている。

⑧ 他団体の行う国際交流事業や研修会への人材の派遣

既参加青年は、事業参加後様々な方面で活躍している。様々な国で行われている青年国際交流事業、研修会、セミナー等に人材を派遣することで、既参加青年に多くの活動の機会を提供している。

⑨ 名簿のデータベース

各事後活動組織でそれぞれ自国の既参加青年の名簿を管理している。

⑩ 「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA : Ship for World Youth Alumni Association) とのネットワーク推進

「東南アジア青年の船」事業の既参加青年は、IYEOを通じて、「世界青年の船」事業の既参加青年とのネットワークを広げることできる。

(5) 第33回SIGA(タイ)

「東南アジア青年の船」事業(SSEAYP)に参加した参加青年は、IYEOと同様に東南アジア各国及び日本において事後活動組織を作り、各国において各種の国際交流活動及び青少年健全育成活動等の社会貢献活動に寄与しています。各国の事後活動組織の国際ネットワークとして、SSEAYPインターナショナル(SI)が1987年に設立され、毎年1回、各国の持ち回りでSI総会(SIGA)を開催している。

対面のSIGAとしては5年ぶりの開催となった第33回

総会は、由布和嘉子内閣府大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）、藤森俊輔内閣府青年国際交流担当室参事官の出席の下、令和6年（2024年）5月1日から4日にタイ・チョンブリー県パタヤにて行われ、日本及びASEAN10か国（合計11か国）から197名が参加した。



4 「東南アジア青年の船」事業実績

年度 (回)	訪問国 社 訪問国	参加国 (参集地)	期間		PY										NL	管理部	業務員 等	参加者 合計
			運航	日本 国内活動	ブルネイ	カンボジア	インドネシア	日本	ラオス	マレーシア	ミャンマー	フィリピン	シンガポール	タイ	東ティモール	ベトナム	PY 合計	
昭和 49年度 (1)	インドネシア、日本、マレーシア、 フィリピン、シンガポール、タイ	タイ (バンコク)	10.10～ 11.21 43日間	11.21 ～11.30 10日間			30	30		30		30	30	30			180	217
			計52日間															
昭和 50年度 (2)		シンガポール	9.30～ 11.18 50日間	11.18 ～11.29 12日間			30	30		30		30	30	30			180	207
			計61日間															
昭和 51年度 (3)		フィリピン (マニラ)	9.28～ 11.15 49日間	11.15 ～11.26 12日間			30	30		30		30	30	30			180	209
			計60日間															
昭和 52年度 (4)		インドネシア (ジャカルタ)	9.27～ 11.16 51日間	11.16 ～11.26 11日間			30	30		30		30	30	30			180	204
			計61日間															
昭和 53年度 (5)		マレーシア (ポートクラン)	9.28～ 11.17 51日間	11.17 ～11.28 12日間			35	35		35		35	35	35			210	233
			計62日間															
昭和 54年度 (6)		タイ (バンコク)	9.29～ 11.16 49日間	11.16 ～11.27 12日間			35	35		33		35	35	35			208	232
			計60日間															
昭和 55年度 (7)		シンガポール	9.27～ 11.15 50日間	11.15 ～11.26 12日間			35	34		34		32	35	35			205	228
			計61日間															
昭和 56年度 (8)		フィリピン (マニラ)	9.25～ 11.13 50日間	11.13 ～11.21 9日間			35	34		34		35	35	35			208	231
			計58日間															
昭和 57年度 (9)		インドネシア (ジャカルタ)	9.22～ 11.9 49日間	11.9 ～11.17 9日間			35	35		35		35	35	35			210	233
			計57日間															
昭和 58年度 (10)		マレーシア (ポートクラン)	9.20～ 11.9 51日間	11.9 ～11.17 9日間			35	35		35		35	35	35			210	233
			計59日間															

年度 (回)	訪問国 注1	参集国 (参集地)	期間		PY										NL	管理部	業務員 等	参加者 合計
			運航	日本 国内活動	ブルネイ	カンボジア	インドネシア	日本	ラオス	マレーシア	ミャンマー	フィリピン	シンガポール	タイ	東ティモール	ベトナム	PY 合計	
昭和 59年度 (11)	インドネシア、日本、マレーシア、 フィリピン、シンガポール、タイ	タイ (バンコク)	9.19～ 11.6 49日間	11.6 ～11.14 9日間	6 (試行参加)		35	35		35		35	35	35			216	239
			計57日間															
昭和 60年度 (12)	ブルネイ、インドネシア、日本、 マレーシア、フィリピン、 シンガポール、タイ	シンガポール	9.24～ 11.16 54日間	11.16 ～11.26 11日間	35		35	35		35		34	35	35			244	269
			計64日間															
昭和 61年度 (13)		フィリピン (マニラ)	9.29～ 11.20 53日間	11.20 ～11.26 7日間	35		35	35		35		35	35	35			245	269
			計59日間															
昭和 62年度 (14)		インドネシア (ジャカルタ)	9.29～ 11.20 53日間	11.20 ～11.27 8日間	35		35	35		35		34	35	35			244	269
			計60日間															
昭和 63年度 (15)		マレーシア (クアランタン)	10.1～ 11.21 52日間	11.21 ～11.29 9日間	35		35	35		35		35	35	35			245	269
			計60日間															
平成 元年度 (16)		ブルネイ (ムアラ)	9.26～ 11.16 52日間	11.16 ～11.23 8日間	35		35	35		35		35	34	35			244	269
			計59日間															
平成 2年度 (17)		タイ (バンコク)	10.5～ 11.22 50日間	11.22 ～11.30 9日間	35		35	35		35		35	35	35			245	270
			計58日間															
平成 3年度 (18)		フィリピン (マニラ)	9.15～ 11.2 49日間	11.2 ～11.9 8日間	40		49	45		45		49	39	45			312	338
			計56日間															
平成 4年度 (19)		シンガポール	9.25～ 11.10 47日間	11.10 ～11.18 9日間	40		50	45		45		45	44	44			313	339
			計55日間															
平成 5年度 (20)		インドネシア (ジャカルタ)	9.24～ 11.8 46日間	11.8 ～11.16 9日間	41		50	44		46		43	41	46			311	337
			計54日間															
平成 6年度 (21)		マレーシア (ポトクラン)	9.29～ 11.14 47日間	11.14 ～11.22 9日間	40		50	45		50		45	39	45			314	340
			計55日間															
平成 7年度 (22)		ブルネイ (ムアラ)	9.28～ 11.13 47日間	11.13 ～11.21 9日間	40		51	42		46		44	41	46		7 (試行参加)	317	345
			計55日間															

年度 (回)	訪問国 注1	期間		PY										NL	管理部	業務員 等	参加者 合計
		参集国 (参集地)	運航	日本 国内活動	ブルネイ	カンボジア	インドネシア	日本	ラオス	マレーシア	ミャンマー	フィリピン	シンガポール	タイ	東ティモール	ベトナム	PY 合計
平成 8年度 (23)	タイ、シンガポール、マレーシア、 インドネシア、ブルネイ、ベトナム、 フィリピン、日本	タイ (バンコク)	9.27～ 11.18 53日間 計61日間	11.18 ～11.26 9日間	40		50	45		44		44	40	50		39	352
平成 9年度 (24)	シンガポール、インドネシア、 マレーシア、タイ、ベトナム、 ブルネイ、フィリピン、日本	シンガポール	9.22～ 11.12 52日間 計59日間	11.12 ～11.20 8日間	40	2 (試行参加)	46	44	2 (試行参加)	44	2 (試行参加)	44	38	44		40	346
平成 10年度 (25)	フィリピン、ブルネイ、インドネシア、 シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナム、 日本(ラオス、ミャンマーを代表 団が航空機により訪問)	フィリピン (マニラ)	9.30～ 11.17 49日間 計57日間	11.17 ～11.25 9日間	32	4 (試行参加)	30	32	32	32	31	30	31	32		30	316
平成 11年度 (26)	シンガポール、マレーシア、インド ネシア、タイ、ベトナム、フィリピン、 日本(ミャンマー、ラオスを代表 団が航空機により訪問)	シンガポール	10.29～ 12.10 43日間 計51日間	12.10 ～12.18 9日間	- 注2	6 (試行参加)	31	42	32	32	31	30	32	32		32	300
平成 12年度 (27)	シンガポール、ミャンマー、マレーシ ア、インドネシア、タイ、ベトナム、フィ リピン、日本(ラオス、カンボジアを 代表団が航空機により訪問)	シンガポール	10.24～ 12.6 43日間 計51日間	12.6 ～12.15 10日間	- 注2	32	32	40	32	32	31	32	32	32		30	325
平成 13年度 (28)	日本、フィリピン、ブルネイ、 シンガポール 注3	日本 (東京)	9.12～ 10.16 35日間 計44日間	9.3 ～9.12 10日間	28	28	28	37	28	28	27	28	28	28		27	315
平成 14年度 (29)	日本、ベトナム、インドネシア、 マレーシア、タイ、シンガポール (カンボジア、ラオス、ミャンマーを 代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	9.17～ 10.29 43日間 計52日間	9.8 ～9.17 10日間	27	28	28	38	28	28	28	28	28	28		28	317
平成 15年度 (30)	シンガポール、インドネシア、マレーシ ア、タイ、フィリピン、日本(ミャンマー、 ベトナム、ブルネイ、カンボジア、ラオ スを代表団が航空機により訪問)	シンガポール	9.2～ 10.14 43日間 計53日間	10.14 ～10.24 11日間	28	27	28	39	28	28	28	28	28	28		28	318
平成 16年度 (31)	日本、フィリピン、ベトナム、タイ、 インドネシア、シンガポール(ラオス を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	9.9～ 10.22 44日間 計53日間	8.31 ～9.9 10日間	27	28	27	39	28	27	28	28	28	28		26	314
平成 17年度 (32)	マレーシア、タイ、ベトナム、ブルネ イ、フィリピン、日本(カンボジアを 代表団が航空機により訪問)	マレーシア (ポーターラン)	10.31～ 12.12 43日間 計51日間	12.12 ～12.20 9日間	28	28	28	38	27	28	28	28	28	27		28	316
平成 18年度 (33)	シンガポール、インドネシア、マレーシ ア、ブルネイ、フィリピン(ミャンマー を代表団が航空機により訪問)	シンガポール	10.23～ 12.4 43日間 計51日間	12.4 ～12.12 9日間	27	28	28	38	28	28	28	26	28	28		27	314
平成 19年度 (34)	日本、シンガポール、インドネシア、 マレーシア、タイ、ベトナム(ラオス を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.1～ 12.12 42日間 計52日間	10.22～ 12.11 11日間	28	27	28	38	28	28	27	27	26	28		27	312

年度 (回)	訪問国 注1	参集国 (参集地)	期間		PY												NL	管理部	業務員 等	参加者 合計	
			運航	日本 国内活動	ブルネイ	カンボジア	インドネシア	日本	ラオス	マレーシア	ミャンマー	フィリピン	シンガポール	タイ	東ティモール	ベトナム					PY 合計
平成 20年度 (35)	日本、ブルネイ、インドネシア、タイ、 ベトナム、フィリピン(カンボジアを 代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	10.31～ 12.11 42日間	10.21～ 10.31 11日間	27	28	28	39	28	28	28	27	25	26		27	311	11	15	8	359
			計52日間																		
平成 21年度 (36)	日本、フィリピン、マレーシア、シンガ ポール、タイ、ブルネイ(ミャンマー を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.6～ 12.18 43日間	10.27～ 11.6 11日間	28	27	27	39	28	28	28	25	27	28		28	313	11	15	8	362
			計53日間																		
平成 22年度 (37)	日本、マレーシア、タイ、インドネシ ア、シンガポール、ベトナム(ラオス を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.4～ 12.16 43日間	10.25～ 11.4 11日間	28	27	27	39	28	28	28	27	28	28		28	316	11	13	8	365
			計53日間																		
平成 23年度 (38)	日本、フィリピン、ブルネイ、インドネシ ア、マレーシア、ベトナム(カンボジア を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.4～ 12.16 43日間	10.25～ 11.4 11日間	28	28	28	38	28	28	28	27	28	28		28	317	11	13	8	365
			計53日間																		
平成 24年度 (39)	日本、ベトナム、タイ、シンガポール、 インドネシア、ブルネイ(ミャンマー を代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.2～ 12.14 43日間	10.23～ 11.2 11日間	28	28	28	38	27	26	28	28	24	28		27	310	11	14	8	358
			計53日間																		
平成 25年度 (40)	日本、ベトナム、タイ、シンガポール、 フィリピン(ラオスを代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.7～ 12.17 41日間	10.28～ 11.7 11日間	28	28	28	37	28	28	28	27	27	28		28	315	11	14	8	364
			計51日間																		
平成 26年度 (41)	日本、ブルネイ、カンボジア、 ミャンマー、インドネシア	日本 (東京)	11.7～ 12.18 42日間	10.29～ 11.7 10日間	27	28	28	39	28	27	28	28	26	28		28	315	11	13	8	362
			計51日間																		
平成 27年度 (42)	日本、フィリピン、ベトナム、 ミャンマー、マレーシア(ラオスを 代表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.5～ 12.17 43日間	10.27～ 11.5 10日間	28	28	27	37	28	25	26	27	27	28		28	309	11	11	8	356
			計52日間																		
平成 28年度 (43)	日本、ベトナム、タイ、シンガポー ル、インドネシア(カンボジアを代 表団が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.4～ 12.15 42日間	10.25～ 11.4 11日間	28	28	28	39	28	28	28	28	27	28		28	318	11	12	8	365
			計52日間																		
平成 29年度 (44)	日本、カンボジア、タイ、インドネシ ア、マレーシア(ラオスを代表団 が航空機により訪問)	日本 (東京)	11.2～ 12.13 42日間	10.23～ 11.2 11日間	28	27	28	38	28	28	28	27	25	28		28	313	11	11	8	361
			計52日間																		
平成 30年度 (45)	日本、ブルネイ、フィリピン、タイ、 ベトナム	日本 (東京)	11.2～ 12.13 42日間	10.23～ 11.2 11日間	27	28	28	37	28	28	28	28	27	28		27	314	11	10	8	363
			計52日間																		

年度 (回)	訪問国 注1	参集国 (参集地)	期間		PY											NL	管理部	業務員 等	ボランティア 等	参加者 合計	
			運航	日本 国内活動	ブルネイ	カンボジア	インドネシア	日本	ラオス	マレーシア	ミャンマー	フィリピン	シンガポール	タイ	東ティモール						ベトナム
令和 元年度 (46)	日本、ベトナム、シンガポール、 ミャンマー、マレーシア	日本 (東京)	11.3～ 12.13 41日間	10.24～ 11.3 11日間	28	28	28	39	28	28	27	28	28		28	317	11	11	21	9	369
			計51日間																		
令和 5年度 (47)	日本	日本 (東京)	オンライン	日本 国内活動	10	10	10	20	10	10	10	10	10		10	110	10	24	5	139	
			11.12、 11.19 2日間	11.29～ 12.8 10日間																	
令和 6年度 (48)	日本、ベトナム、インドネシア	日本 (東京)	11.07～ 12.06 30日間	11.04～ 11.07、 12.06～ 12.11 8日間	15	15	15	20	15	15	15	15	15	2	15	157	11	32	6	206	
			計38日間																		
計					1,080	596	1,567	1,763	653	1,537	622	1,520	1,489	1,545	2	727	13,101	425	1,120	137	14,783

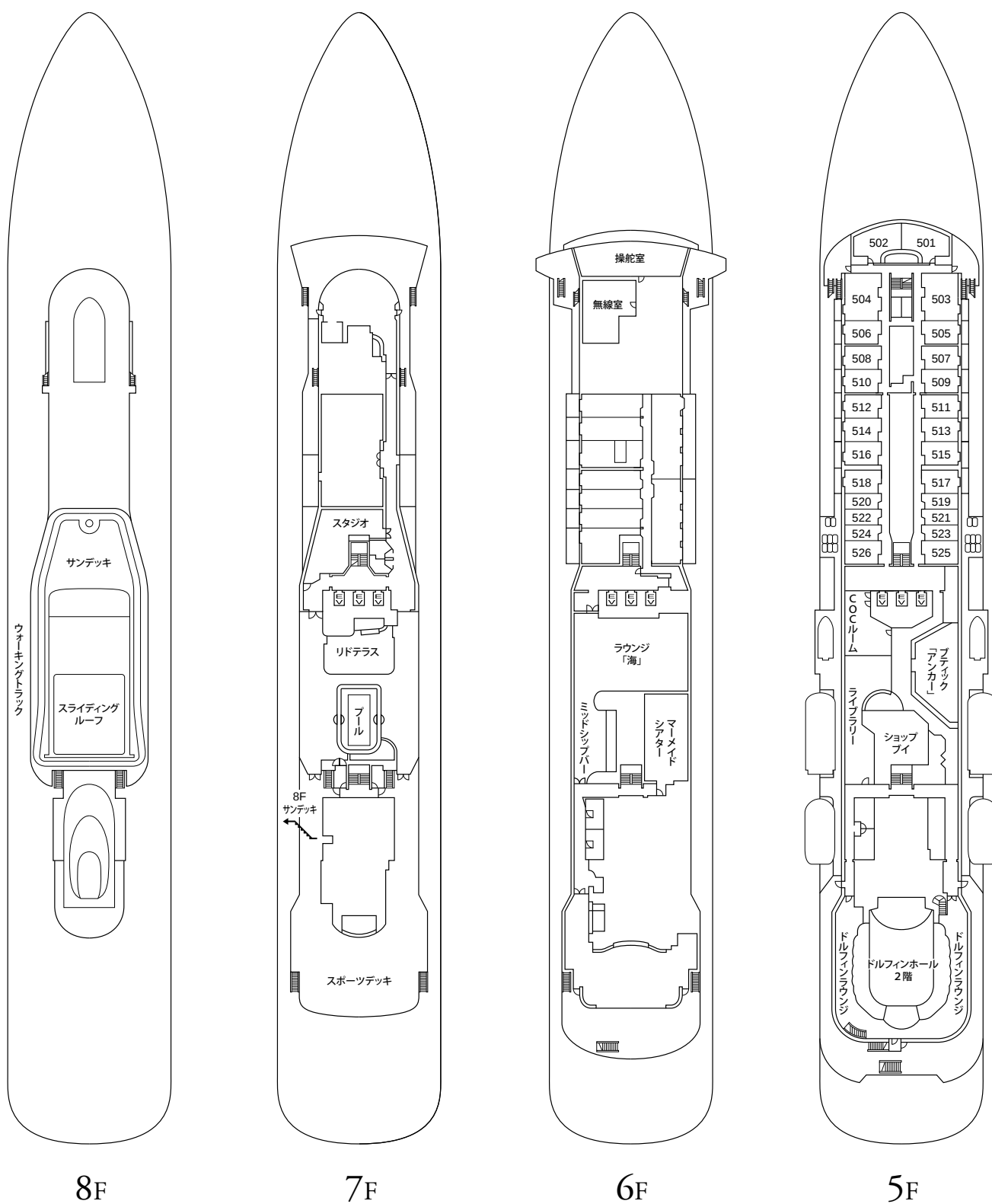
本表においては、「運航」とは、出航日から下船日までの期間とする。また、「日本国内活動」とは、外国参加青年が来日した日を含むこととする。

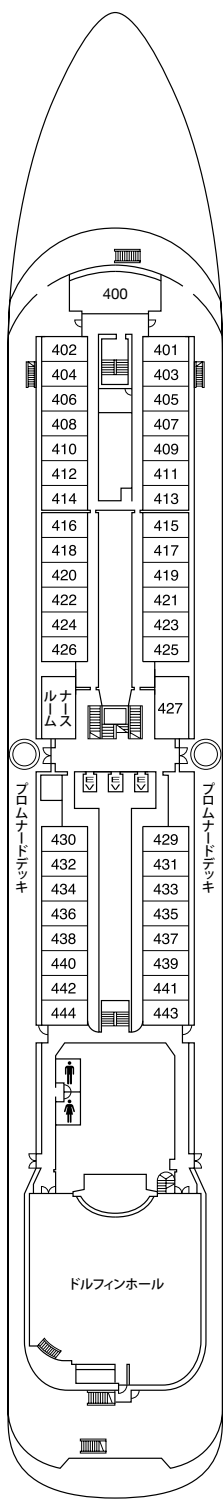
注1 訪問国については、平成7年度までは国名のアルファベット順、平成8年度からは訪問順に並んでいる。

注2 「東南アジア青年の船」事業の実施期間がイスラーム教の断食月(ラマダーン)に当たったため、参加を見送った。

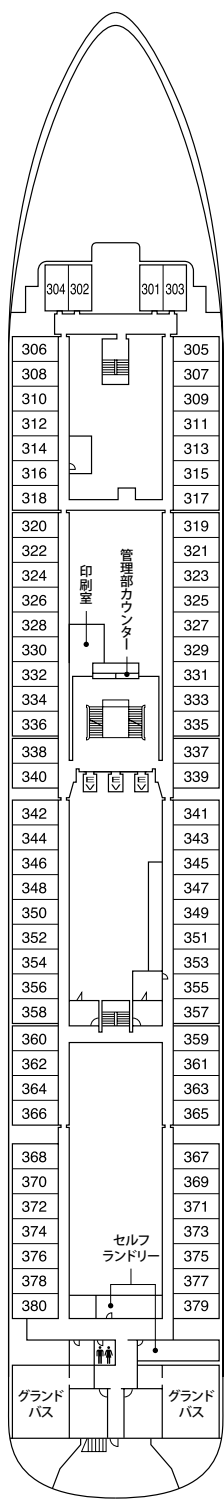
注3 ブルネイにおける事故のため、これ以降のプログラムは短縮され最終寄港地のシンガポールで外国参加青年は下船した。これにより、カンボジア、ラオス及びミャンマーへの代表団による航空機での訪問は中止された。

5 にっぽん丸船内配置図

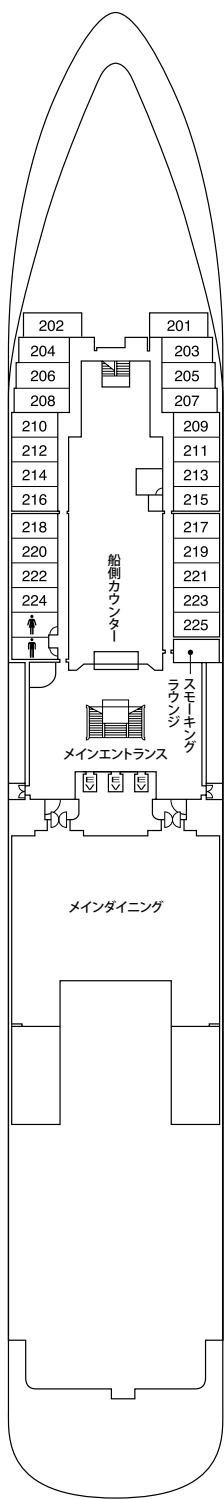




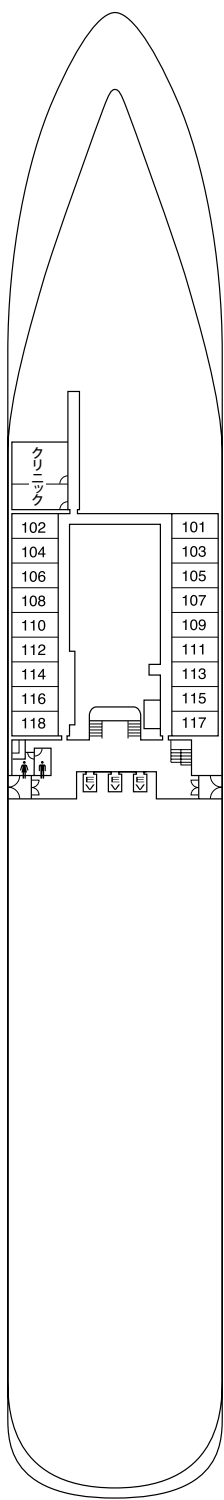
4F



3F



2F



1F

内閣府青年国際交流事業報告書2024

令和6年度

第48回「東南アジア青年の船」事業

発 行 内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町 1-6-1

TEL: 03-6257-1432

FAX: 03-3581-1609

URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

編 集 一般財団法人青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町 2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL: 03-3249-0767

FAX: 03-3639-2436

URL: <https://www.centerye.org>

編集協力 日本青年国際交流機構

URL: <https://www.iyeo.or.jp>

内閣府青年国際交流事業報告書2024
令和6年度 第48回「東南アジア青年の船」事業